

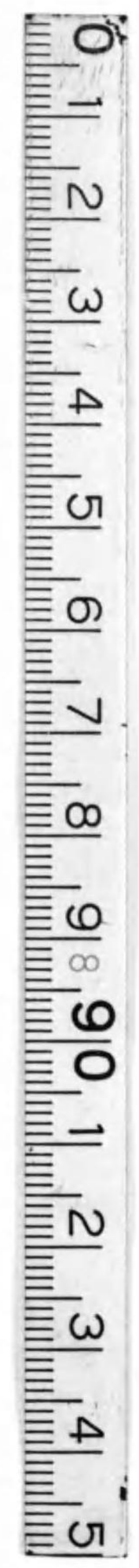
と親大港古  
蹟道石名の土郷

特230  
619



港古宮

社聞新日日古宮

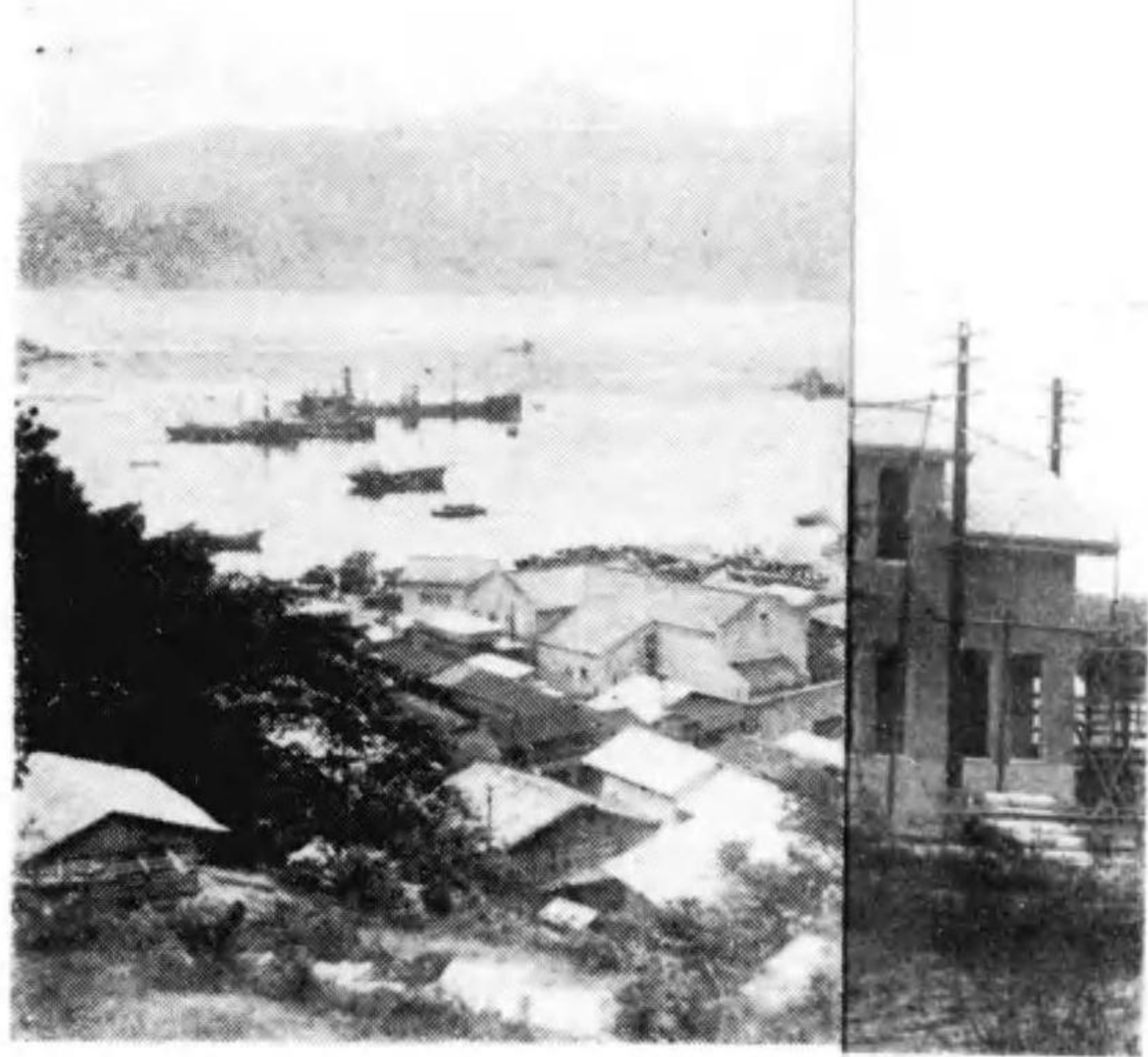


始

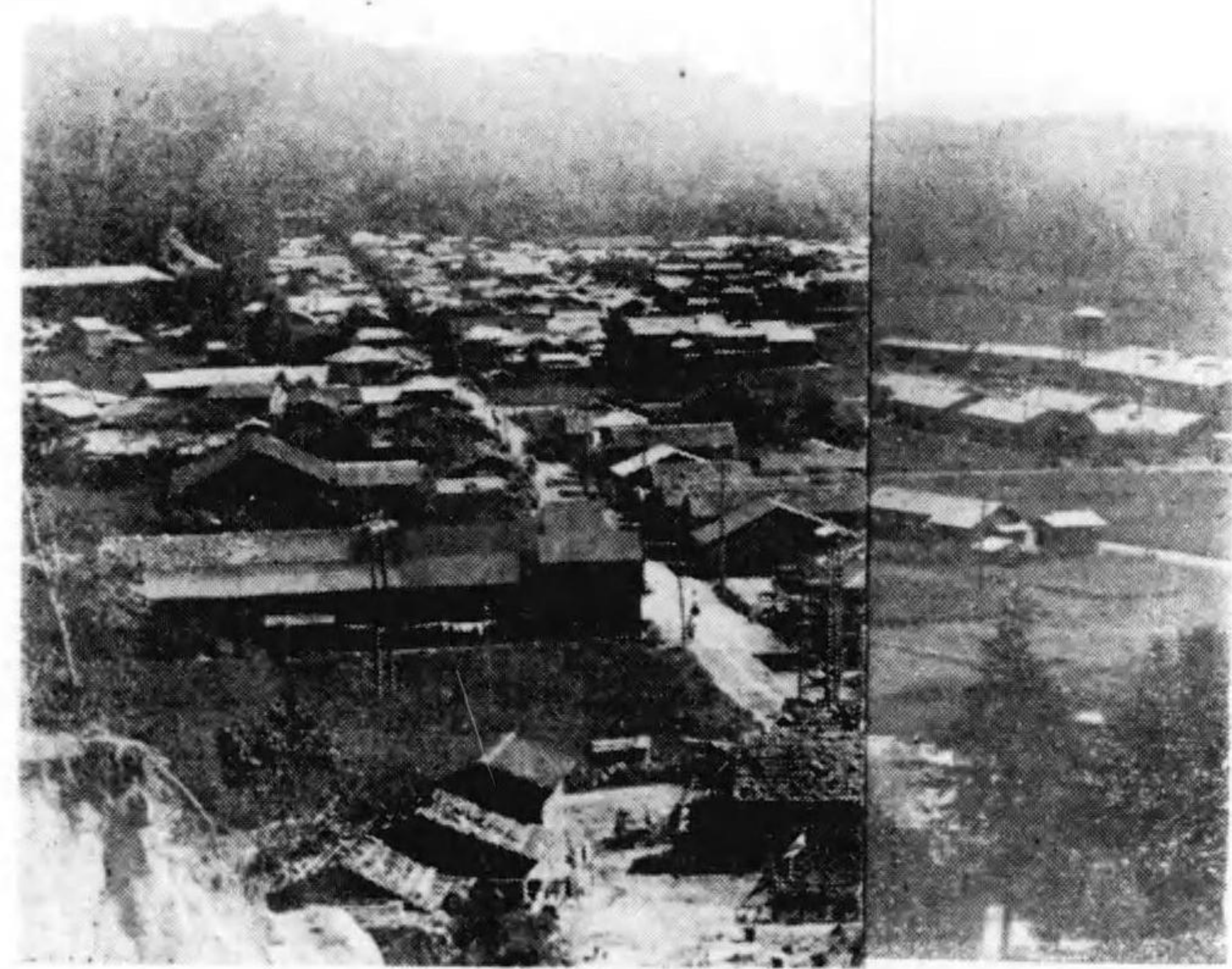




特230  
619



む望を港古宮りよ



此の小冊子は宮古の鐵道、港灣の完成史でも無く、又宮古町政史でも無い、宮古の有りの儘の姿を展望して廣く江湖に紹介し郷土の認識を高めて貰へば結構である。勿論宮古の充實が「ミナト」宮古の發展に負ふ處多いと云ふ主觀から海に關する内容の多いのは事實である、田舎新聞の微力を省みず吾が社が郷土愛の一念から出版した此の小冊子が、幾分でも宮古の紹介になり觀光の資ともなりて地方充實進展に資する事を得ば幸である。

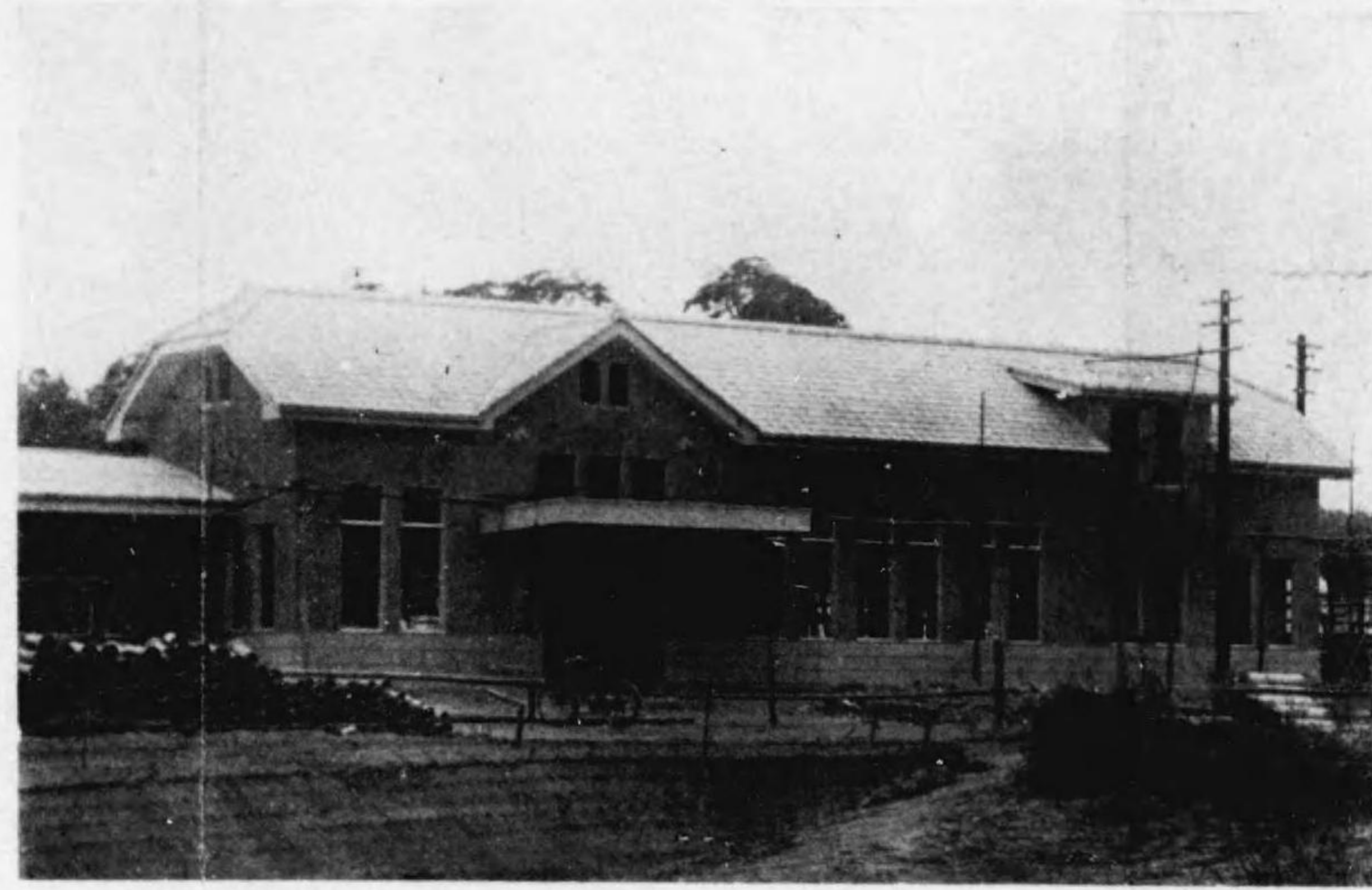
宮古日日新聞社



特230  
619



み望を港古宮りよ山後崎ヶ嶽



驛古宮

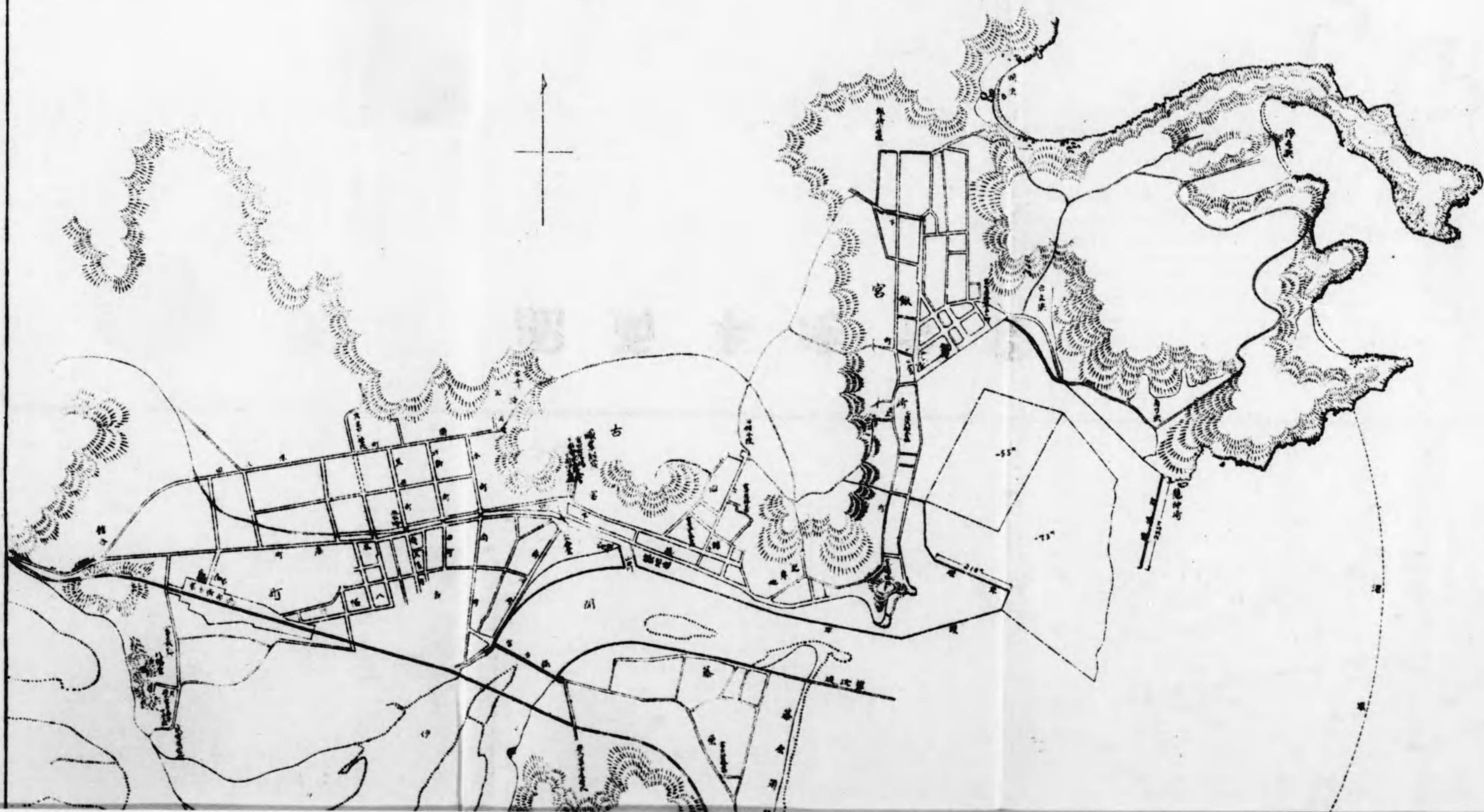


景全町古宮む望りよ合館

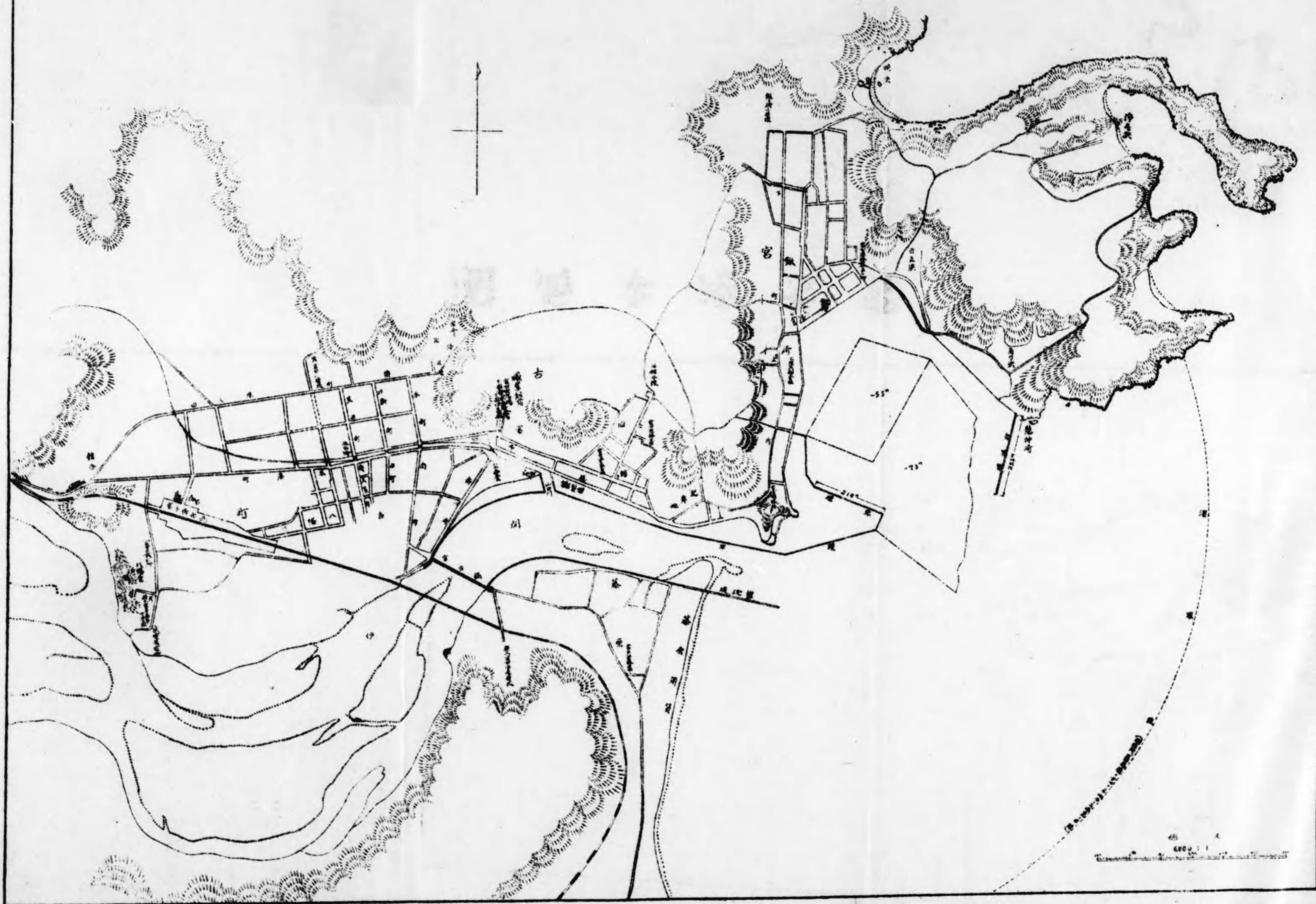
観光の資ともなりて地方充實進展に資する事を得は幸  
宮古日日新聞社



宮古港平面圖















長町古宮  
氏男一井松



所務事榮修港古宮  
氏雄行吹田任主



縣會議員  
元宮古町長  
關口松太郎氏



長町古宮元  
氏郎三源島中



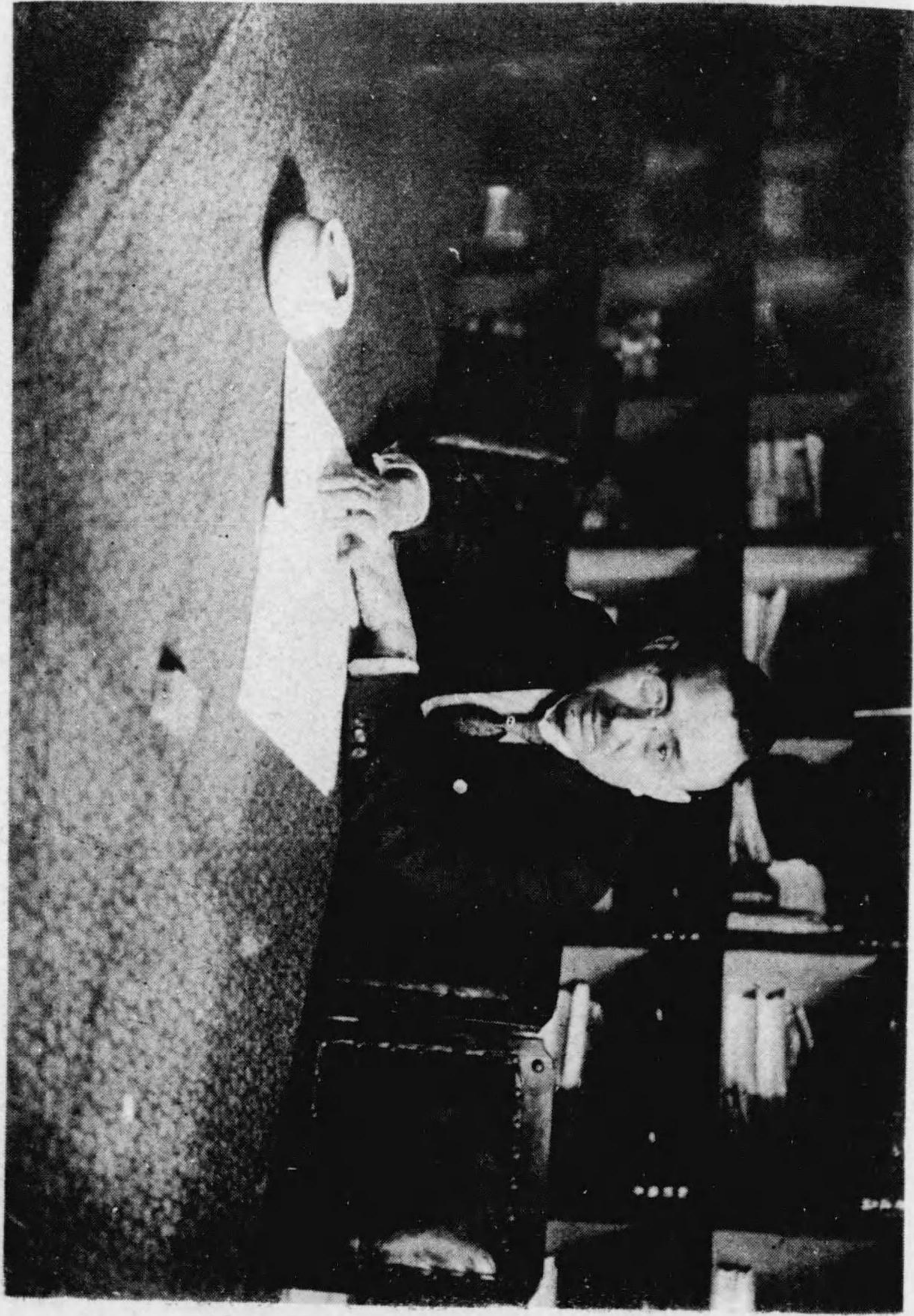
長町古宮前  
氏介元東伊





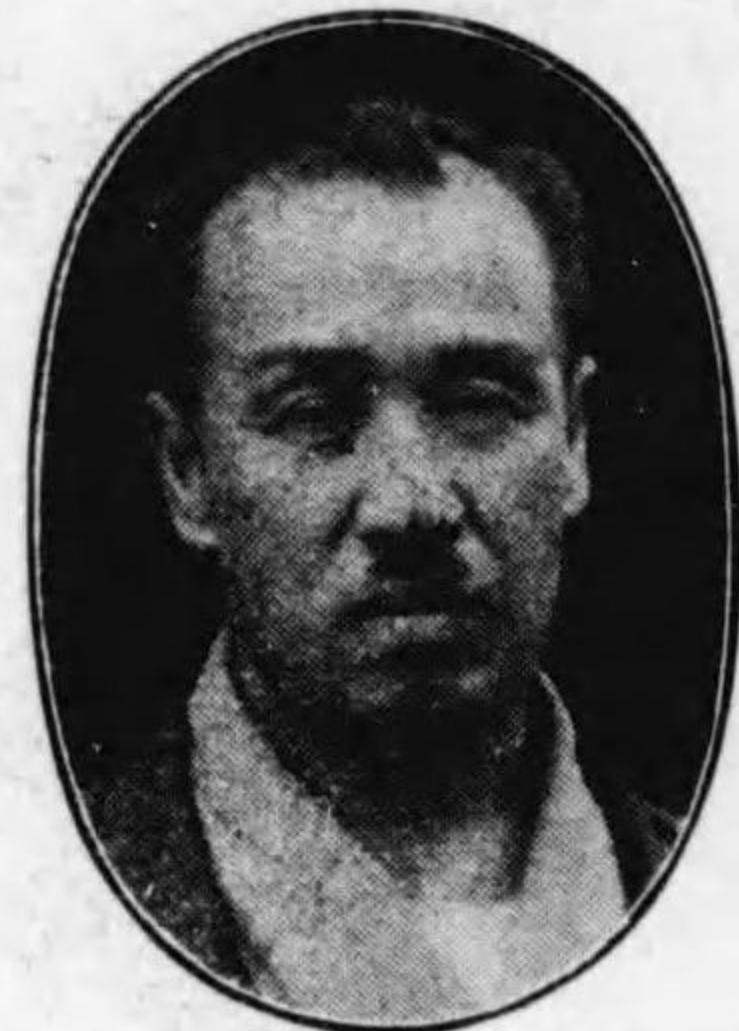


(者勞功設建線田山道鐵身出町古宮)氏門衛右長池菊 士議代故



(者勞功設建線田山道鐵身出町古宮)氏殿 谷 熊 士議代故





氏郎太菊 木 鈴



氏郎四善 崎 山



氏郎太佐 井 大



氏郎一文 原 菅



氏郎 嘉 口 蛇



氏定 米 石 箱

宮古町會議員 (二)



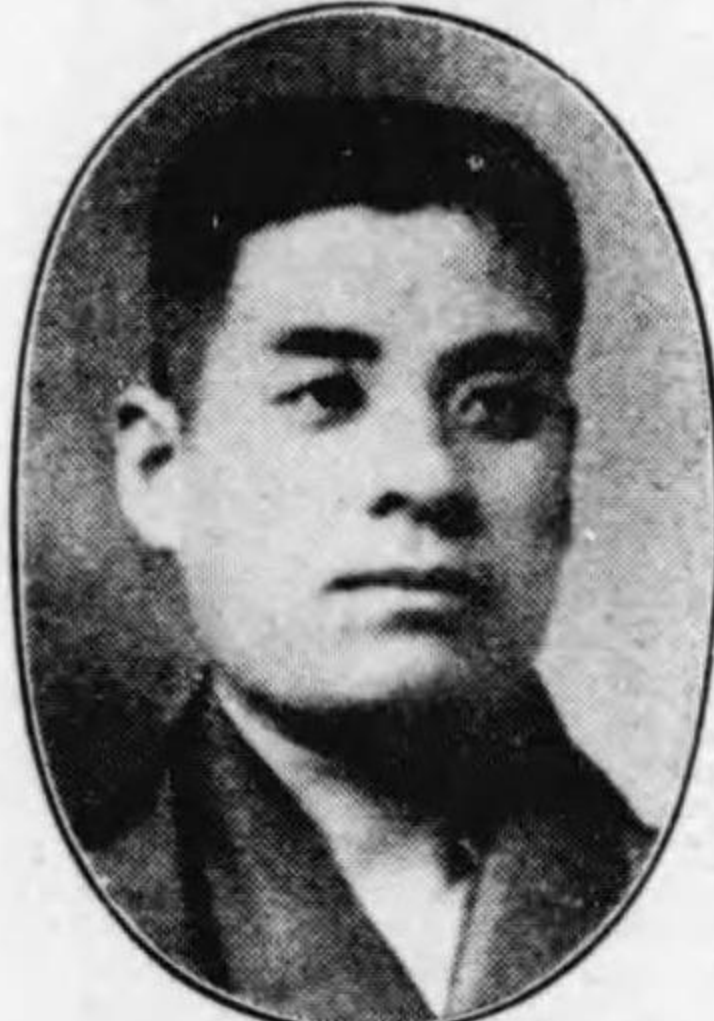
氏郎次直 香 島



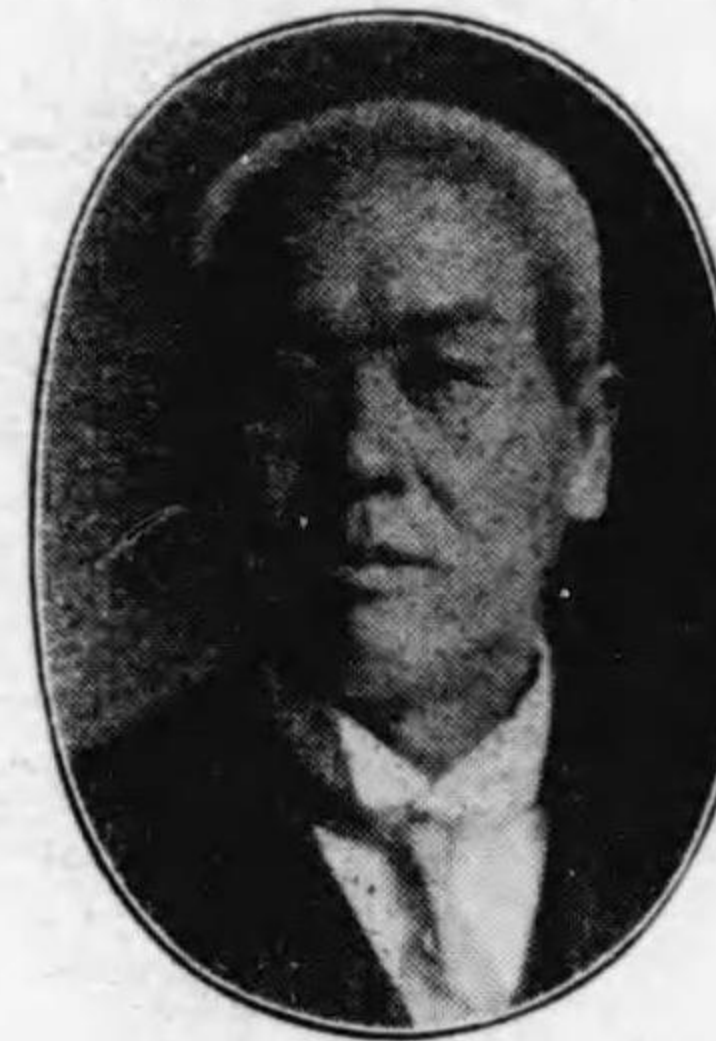
氏郎三平 藤 加



氏吉 米 田 篠



氏三 孝 原 笠小



氏助之民 野 早



氏郎太安 田 藤

宮古町會議員 (一)



氏登 部 阿





北三郎四事理



大越作右衛門事理

鎌ヶ崎町漁業組合  
役員



藤進事理



大田榮藏事理



鈴木定藏事理



大須賀之助事監

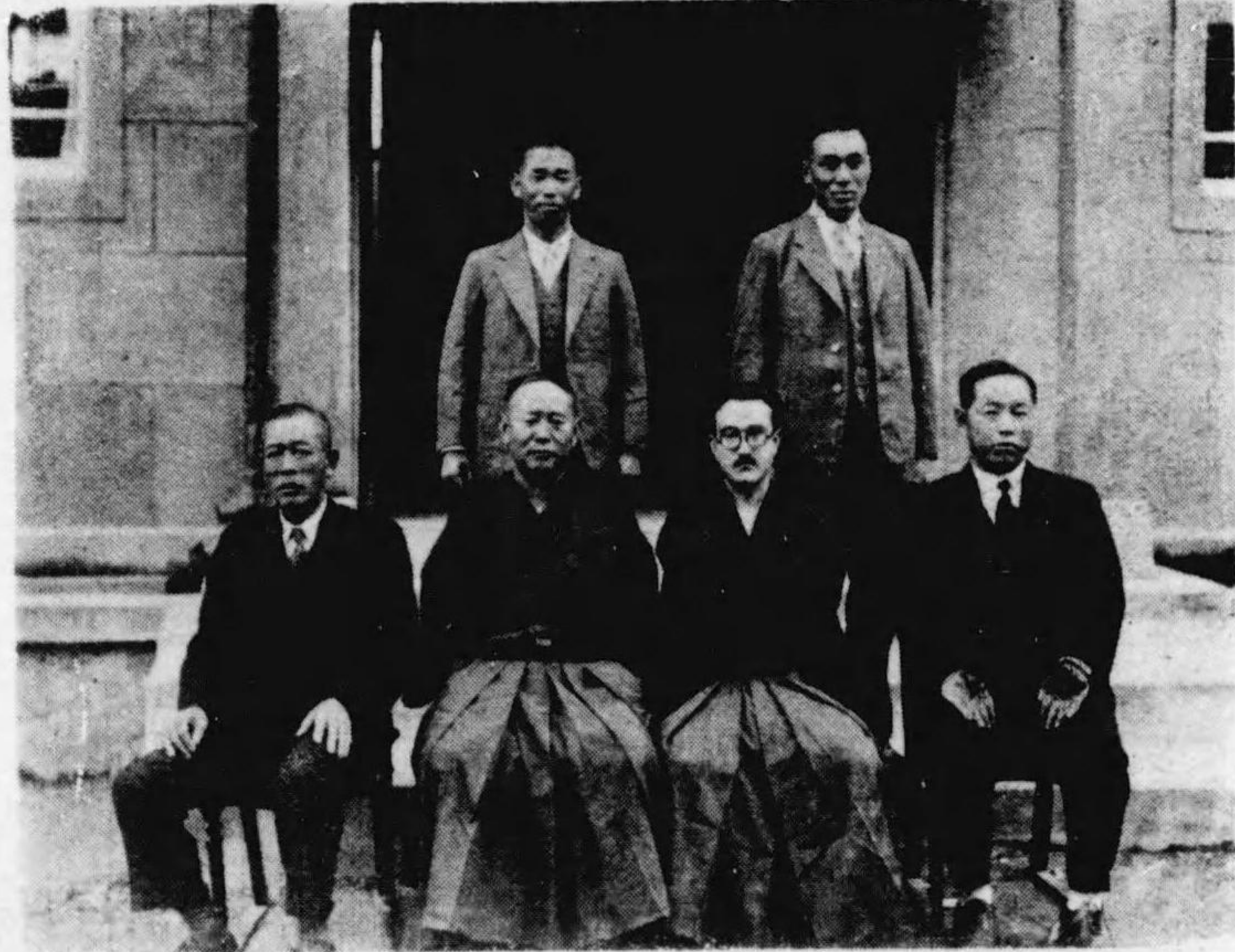


中川願問



瀨濱若太郎事監

宮古漁業組合役員  
前右列より山内仁右衛門事理、菊池長合組事理、地長右衛門、島香宗平  
事理、後右列より監事菊池金地、次郎、田松純一、吉田七郎



宮古漁業組合職員  
前右列より三權崎、小川直治、(菊池長合組)、大田三三、中列左より  
北山一五郎、坂直次郎諸氏





長院醫山青  
氏郎一五山青 士學醫



長院病古宮  
氏治松野松 士博學醫



長院醫山高  
氏柄正山高



道又醫院長  
道又源吾氏

宮古醫療  
界の人々



石川醫院長  
石川喜二郎氏



長院醫木々佐  
氏樹茂木々佐



院醫合盛  
氏之緩合盛問顧



長院醫野平  
氏藏福野平

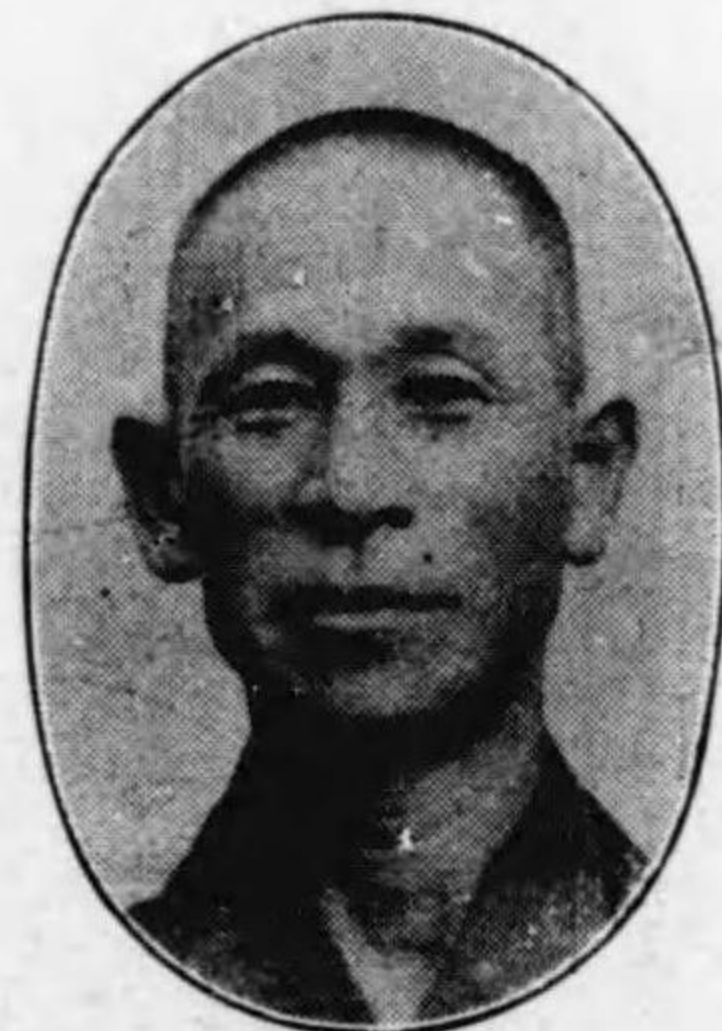
員役合組業漁浦山崎



事理  
氏吉春木々佐



長合組事理  
氏郎太熊崎千



事監  
氏郎太熊木々佐



事理  
氏郎三孫川前



宮古消防組幹部



氏吉倉崎山 頭小付組



氏郎太佐井大 頭組副



氏吉米田篠 頭組



氏門衛右仁内山 長部四第



氏治豐藤伊 長部一第



氏八興 島藤 長部三第



氏治熊川谷長 長部八第



氏郎五松浦三 長部七第



氏哉賢川早 長部六第

宮古港大觀と郷土の名所遺蹟

はしがき

我が三陸沿岸は長い間天與の惠澤資源を埋藏し乍ら敢て其の開拓を企てやうともせず、又敢て他の開拓を促すてもなく時に却つて之を隠蔽して未永く武陵桃源の夢を貪らうとする、退嬰姑息の風さへ見受けられぬではなかつた。然し先覺者や先輩の献身的努力によつて國費によつて盛山鐵道や宮古港の修築が完成を見んとする今日、過去の情勢に根本的な變化を與へ、三陸沿岸の富源は、今や鐵道が完成し港灣の修築が出来上つた宮古を中心として全日本的に解放されやうとしてゐる。

由來我等の郷土は宮古を中心に幾多の名所遺蹟が累々としてゐる、名所遺蹟は郷土文化の紀念塔であり、又郷土の詩集である。此の小冊子「宮古港大觀と郷土の名所遺蹟」は宮古港を中心に、よりよく、より廣く紹介宣傳せんがための吹奏曲であり、又詩集である。天與の富源を開拓し、觀光の資ともなつて、地方充實の手引とならば幸である。

郷社横山八幡宮（驛より西約五丁）

宮古停車場の西方近く老樹鬱蒼たる小丘が横たはつてゐる其の山上に品陀和氣命を御祭神とする素



朴な社殿がある、即ち當地方一郷の鎮守たる郷社横山八幡宮である。其の創建は遠く天武帝の白鳳年間に出て、所謂奥々風土記の「上古よりの御社なり」とて、蓋し奥羽有数の古社である。當社の南方山麓に猿丸太夫屋敷と云ふ所がある、傳説に依れば、元明帝の和銅年間に太夫勅勤を蒙り此地に配流せられし時、里人等請ふて宮守と爲し其の山麓に居住せしめた、小倉百人一首の「奥山にもみぢふみわけ



郷社横山八幡宮

鳴く鹿の聲聞くとときぞ秋はかなしき」の歌は其當時詠まれたものだと言ふ、後に其歌が遙かに叡聞に達し歸洛の勅許下り太夫は再び昇殿を許された。此の歌の奥山とは陸奥の横山と云ふ意で、即ち往古宮古村の原名たる横山の里の秋色寂寞の情を詠ぜられた歌であると云ふ。降つて大同年間田村將軍閉伊の蝦夷討伐の際、親しく此横山八幡に參籠し一夜兜の獸形を授かる神夢を感じて、其の首魁を東海の濱に射殺することを得た、爾來其の地

を稱して蹴ヶ崎と名づくと言ふ傳説もある。

後鳥羽天皇の文治年間源義經高館の難を避け其の從臣と共に此の地に潜みし際當社に參籠し其臣鈴木重三郎重家當社の別當となり正治元年三月十三日上洛し鳥丸家に依り當八幡宮及義經の事蹟を朝廷

に奏上した。又後土御門天皇の明應年間には千徳館の館主千徳義勝社殿を修理し南部家亦厚く崇敬して藩主利視公以來毎年の大祭には必ず當地の代官をして代拜せしめた。延享年間蹴ヶ崎の商人近藤茂左衛門は當時の祠官伊藤阿波守の代理として上洛し神祇管領吉田大藏卿兼雄に依り神璽を勸請し明治五年郷社に列せられた。古來當社は靈驗特に顯たかなる爲此の地方は勿論遠く四國沿岸の住民に至る迄厚く尊崇した。尙其の由來に就き次の如き傳説がある。

一條天皇の寛弘年間阿波の國鳴門の海荒れて鳴動甚しく怒濤天地を震撼して何時止むべしとも思はれなかつた、漁舟航海の船絶へ沿岸の住民恟々として業を廢し家財を移して避難するに至つた、時の朝廷大に之を憂ひ其の災殃を鎮めんとして天下に詔し有能の士を徴し給ふた、之を傳聞せし諸山の高僧有驗の行者等續々阿州に集り吾こそ先に之を鎮めんとて各々秘術を盡して海神を祭り鎮靜を祈つたが遂に何の効驗もなかつた、當時横山八幡宮の禰宜某一夜靈夢に依り一首の和歌を感得した、夢さめて謂らく此の歌を以て鳴門の鳴動を鎮めよとのお告げてあらう當社の靈告疑なし神慮之達せざるべからずと隨喜して直に阿州を指して出立した、聽て彼は鳴門の海岸に至り嚴かに其の御神歌を朗詠した山島につくりあらしのゑのこ草

阿波のなるとは誰かいふらん

然るに鳴動忽ち止み怒濤漸次鎮靜に歸した天皇之を聞召され叡感斜ならず親しく禰宜を召されて其の神徳を嘉賞せられ且つ汝の望む所のものを取らするであろうと仰せられた、禰宜は唯八幡の宮の古い事のみ奏上して更に何物をも望まなかつた。茲に於て天皇即ち宮古の二字を御染筆あらせられ之を禰宜に賜り「今より後は此地をばことなる鳥の跡つけて鄙まで同じ九重の名も通ふなり八重櫻花の宮



古と稱すべし」と宣はれ尙亦阿波守の官名をも許された之より横山の里は永く華洛と異字同訓なる宮古の地名を稱するに至つた。彌宜が朗詠せし御神歌は其の後石に録せられ境内の舊祠處に建てられてある、此の碑は文化年間駒井常爾の建てたものである。當時彌宜が阿州の災殃を鎮め神慮を達して歸國するに臨み同國より銀杏一枝を杖として

携へ來り八幡の山に登らんとするや其の山麓に之を挿して生活を誓つた、然るに木は活きて枝葉を生し益々繁茂した、爾來九百二十年の今日に至る迄彌榮へに榮へて四抱半の大木となつた、此の木は元枝葉倒生せし爲倒さ銀杏と稱し今宮古女學校々庭の西南隅にある大木は即ち是である、此の傳説は當地のみならず阿州淡州沿岸地方にも今猶同様の傳説を有し八幡宮の御神徳を尊崇する者多く徳川時代には彼の地の商船當地に入港すれば必ず船員皆八幡宮に參拜せしものなりと云ふ。

當社の祭禮は毎年舊八月十五日で其の祭日の四五日前には全町各戸總出にて參宮道路を普請し境内を掃除するを例とし祭日には昔は藩主代理として宮古代官行列を作つて參拜し絹の白幡一流を奉納するを慣例とした、神輿の渡御は御濱出でと稱して漁船三四十隻奉供し水保船と染めた青旗を立てし船

鳴動鎮靜の御神歌碑



大太鼓を打ちならしつ、先頭となり灣内を一週する光景は實に壯觀である、昔は街々より町印として屋臺若くは大幡を曳き町内を廻つたが明治三十年頃より漸次廢止せられ現今は諸種の舞踊山車物等に代りて出て其の殷賑なる事郡内第一である。

### 舊い宮古から新しい宮古へ

#### 鐵道港灣の出来るまで

岩手縣の沿岸孤南北四十里の丁度正中點にある我が宮古港は北方函館、室蘭、釧路諸港と、南方鹽釜港との中間にあつて、更に西方、盛山鐵道によつて遙かに秋田縣土崎、船川兩港に連り、天然の地形と相俟つて三陸沿岸に於ける要港である。

嘗つては三百年の昔、南部藩に於て商港兼軍港として軍艦を常置し不時に備へ一方交通運輸の便に供してから爾來船舟の往來輻輳し殊に北海渡航の避難港として其の名を著したが、陸上北上山脈の大障壁に遮斷せられ殆んど文化の示すべきものがなく、徒らに長夜の夢を貪り續けて來た。明治の文化が關東から北海道へ進展しても我等の郷土は没交渉な生活を脱却し得ず、僅かに三陸汽船によつて文明の餘澤を喫し、産業起らず、人材出でず、海産多きも漁村豊かならず、徒らに他を羨むの域を脱却し得なかつた。

併し天運はいつかは廻つて來た、故菊池長右工門氏（現長右工門氏父）は此の天涯無縁の様な郷土を見る時切齒扼腕誠に遺瀨なく思つてゐた、盛宮間に輕便鐵道の計畫もしたが意の如くならなかつた





宮古警察署

のも此の時であつた、恰も巨人原敬氏が時の首相となるや、氏は盛宮鐵道敷設は正に此の時であると觀取し私財を投じて東奔西走し其の郷土愛に燃ゆる氏の活動は誠に悲壯なるものがあつた、一方本線期成同盟會では大森堅藏、澤田末吉、上館市太郎、關口松太郎の諸氏猛烈な運動を起し此等の効あつて故原敬氏は大正九年の臨時議會に於いて盛岡市より宮古町を經て山田町に至る所謂盛山鐵道敷設を提案し貴族院に於いて猛烈な反對者もあつたが、時の鐵道大臣元田肇氏は食料問題の喧かましき折柄岩手縣の開發は最も急務であると陳辨之れ務め遂に兩院を通過し茲に今日ある端緒を致したのであつた、茲に元石丸鐵道次官や岩秋連絡を提唱したる秋田縣選出故榊田代議士の隠れた功績は没すべきで無い、爾來同鐵道工事は着工大正十一年度或は直轄、或は鐵道工業、或は鹿島組で工事を請負ひたるも豫算の關係上事業の進捗殆んど見るべきものがなかつたが、昭和二年初めて故熊谷巖氏代議士となつて活躍舞臺に入

るや、急速に進展し殊に氏は鐵道會議員の要職にあつて良く當局を動かし全國稀れに見る難工の本線も茲に漸く達成し昭和九年十一月六日を以て宮古驛開業の運びに至つたのである。



内務省宮古港修築事務所

伊郡を一區とする選舉區に於て地方人が重要港灣の指定と熊谷氏の代議士當選とを不離の關係において熱烈な競争をやつたのも此爲めてあつた、目出度同氏は當選し、宮古港は重要港灣の指定を受けることになり第一期工事は昭和四年度から八年度に至る五ヶ年の繼續事業となつたが、財政緊縮其の他



の事情で十一年度完成に延期せられ防波堤、突堤、護岸埋立、浚渫等の工事着々進捗し完成の域に近づきつゝある、斯くて我が宮古港は海陸共に相呼應して舊い宮古から新しい宮古となり町民長夜の夢も正に破れんとしてゐる。

星霜の移り變ると共に健忘性な人間の通弊として、時に先輩の辛苦奮闘の功を忘れようとする傾がある、今宮古測候所の丘上に立つて海陸兩玄關を觀望し榮え行く宮古港の將來を想ふ時、先人の犠牲的な努力の數々が、今更の如く想起せられ感謝感激の情に堪へざるものがある。

八

## 宮古町の發達と近き將來

宮古町の西方に南北に長く一小丘陵があり老樹鬱蒼として神々しい森をなしてゐる、こゝが郷社八幡宮の鎮座まします處で其の東方の山下が宮古發祥の地と稱せられてゐる、始めは横山の里、横山の郷等と稱し來たつたが一條天皇の御代に上東門院から都と異字同訓の宮古と御染筆を賜はりてより後横山の郷を改めて宮古と稱するに至つたといふ。爾來戸口増加し南部氏二十七代信濃守利直侯のときは戸數二百を超え慶長十六年には代官所を設けられ地方中樞の地となつた。

又當時現在の横町小澤の地に黒田村といふ所があつた、後奈良天皇の天文年間黒田判官頼母が黒田の谷地を開拓した所て當時黒田村の一部は千徳村千徳氏の地方所であつたが、後柏原天皇の文龜元年十月七日千徳氏四代の次郎善勝は南部氏に亡ぼされて天文二十一年櫻庭安房の支行所となり慶長十七年から御藏支配となつた。

・慶長十九年十月廿八日晝の八つ時南奥に大津浪あつた時、宮古の街は一戸も残らず流亡し黒田村は山脇五、六戸を残すのみで其の慘狀實に目もあてられなかつた、翌元和元年四月中旬南部利直侯は上下二百人の御供にて盛岡を出發し、大槌を経て宮古に御着になつたのが四月晦今の下閉伊支廳の所に御假家を造營し代官小本正吉の案内にて罹災地一帯を點檢し、滞留二十日、五月五日澤田町の後山に登り地形を遠望した、五月五日高橋に櫓を立て、之に登り四方を遠望し本町を割り付け定められた、之が慶長大津浪復興第一歩の宮古て之より十八年を経て寛永九年三月十八日代官小本正吉の設定によつて横町、新町、田町、向町の四町が出来た。

明治十三年に故篠民三氏は菊池長七(東屋)菊池理助(東理)氏外有志三十余名を糾合し宮古川左岸の埋立工事を興し明治十五年に竣工したが之れによつて向町裏、新川町、築地舊館の一部、光岸地、方面が出来、本工事に篠氏自ら一萬の巨資を投じ總工費實



宮古町役場

九







る斯ふして今や宮古の町は次第に膨脹建設せられ、三陸沿岸に於ける最も樞要な街となるべく明日を約束されてゐる。

## 賑ふ宮古町と水産

### 縣下一の好人氣地

宮古町は面積〇、四三方里、廣袤東西三十五丁、南北三十丁、閉伊川の河口に發達した町であるが、其の流域二十里全國稀有の廣大な背面地を有してゐる、宮古、鉦ヶ崎二大區に分かれ戸數昭和七年度末で三、四二〇、人口二萬八千有余、年生産力三百六十五萬圓、内水産關係二百二十八萬圓余になつてゐるから、如何に宮古町が水産に負ふ所多きかは明かである、従つて宮古町の發展策と云ふものは、其の根本をなすものは、矢張り水産關係の生産を増す事であつ



宮古川の口盛の観

て其の他は従たるものである、差し當つて考へらる、事は(一)地元水産業を盛んならしむること(二)水産加工製造業を隆昌ならしむること(三)廻來漁船を吸収し其の取引による商工業の繁榮策で、もう一つは(四)宮古町背面地産業の發達である併し斯ふした問題の研究は此の小冊子の目的ではないから其の詳論を省略するが、爲政者としての關心を要する事である。

宮古市街には町役場を初め

下閉伊支廳、宮古警察署、宮古測候所、内務省宮古港修築事務所、宮古區裁判所、宮古營林署下閉伊稅務署、宮古土木管區、宮古郵便局、鉦ヶ崎郵便局、宮古新町郵便局、岩手縣立水産學校、岩手縣立宮古高等女學校、宮古、鉦ヶ崎兩小學校、宮古商業專修學校、鉦ヶ崎水産補習學校、宮古木炭検査所、宮古職業紹介所、宮古町立宮古及鉦ヶ崎兩圖書館、宮古公益質屋、鹽專賣所、煙草元賣捌所、町立公會堂

宮古銀座街本町通

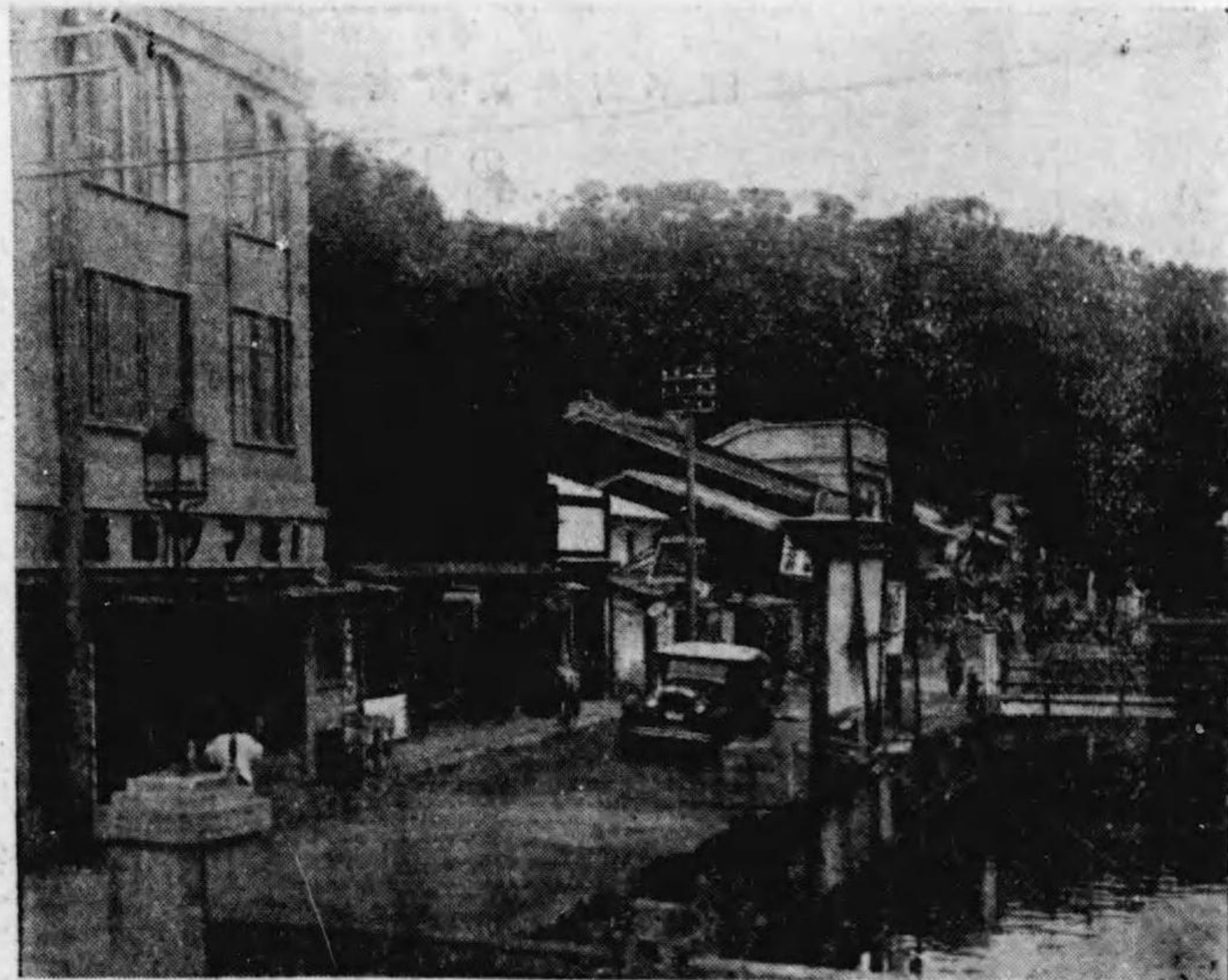




等の諸官公署があり

下閉伊水産會、宮古及鵜ヶ崎兩漁業組合並に共同販賣所、崎山浦漁業組合共同販賣所、岩手殖産銀行宮古支店、宮古信用組合、宮古物産倉庫、宮古海産物商業組合岩手無盡株式會社宮古支店、盛岡電燈宮古支店、三陸汽船會社宮古支店、日本食料工業株式會社宮古工場、三社自動車聯合事務所、宮古倉庫運送株式會社、宮古運輸株式會社、宮古合同運送株式會社、丸神運送店、高橋運送店等の法人組合や私立會社がある、更に宮古幼稚園、宮古商工會、宮古體育協會宮古日日新聞社、宮古新聞社、三陸タイムス社

等もあつて實に岩手沿岸の中樞の地である鐵道が来て更に港灣が出来たら人口も急テンポに増加し宮古市の出現も遠くはあるま



宮古銀行座街下町通

い、そこで市街計畫もずん／＼進展して最近出来上つた町も澤山あるし、今後も澤山計畫されてゐる、小學兒童の増加猛烈で既設備ではどうにも間に合はず、更に一校を立てることに確定してゐる、兎に角岩手縣下で尤も人氣のある好景氣地として、旅館は常に満員市中には新築家屋を立つる大工さん達の槌の音が終日響き渡つてゐる。

参考の爲めに町公職者の氏名をあげれば次の通りである。

### 町會議員

- 駒井才吉、早野民之助、中村喜兵衛、加藤平三郎、山崎善四郎、阿部登、菊地安兵衛、鈴木菊太郎、齋藤安次郎、坂本嘉右衛門、關口養隆、島香直次



産物倉庫

- 郎、山田庄助、箱石米定、蛇口嘉郎、北館三四郎、小笠原孝三、大井佐太郎、中野兼藏、伊藤勤、熊谷平助、菅原文一郎、篠田米吉、藤田安太郎



區長

一六

小本儀助、蛇口嘉郎、坂下又兵工、駒井倉吉、佐々木藤之丞、坂下清藏、伊藤長五郎、内藤準作、長谷川熊治、幾久金兵工、佐々木源太郎、駒井益助、得田善十郎、中村彌太郎、箱石米定、染谷代助、佐々木新六、岩船豐吉、山内仁右工門、坂下平八、釜石善五郎（以上宮古）



此の遺蹟は宮古町澤田上の山にあり慶長十九年の大津浪の際宮古代官小本正吉は其管内の被害状況を藩に上申した藩主利直侯は其翌年元和元年四月供勢

衛生組合長

高岩庄一、藤田與惣治、佐々木泰助、太田猪助、中村彌太郎、伊藤榮藏、大井富太郎、堀田熊次郎、攝待重次郎、菊地金次郎、坂下平八、佐々木泰樹、山田庄助、小本儀助、蛇口嘉郎、大久保米藏、上



田米吉氏事務所と倉庫

野友吉、佐々木藤之丞、坂下清藏、工藤清藏、大向茂八郎、村本文平、長谷川熊治（以上宮古）沼崎伴次郎、鈴木甚右工門、龜田新六、井原寅吉、坂下松治、大須賀熊之助、佐々木永太郎（以上鉾ヶ崎）

町吏員

町長 松井一男、助役 川原田正一、收入役 山内菊次郎、書記 吉田英造、川村留三郎、若狭市兵工、加藤藤吉郎、島山喜夫、佐々木宣祐、大久保市五郎、山口孝常、森一郎、鈴木與右工門、菊池喜一、鈴木禎七、釜石善右工門、公益質屋、川原田正一、山内菊次郎、職業紹介所、川原田正一、瀬川孝祐

町割石（驛より東北約六丁）

此の遺蹟は宮古町澤田上の山にあり慶長十九年の大津浪の際宮古代官小本正吉は其管内の被害状況を藩に上申した藩主利直侯は其翌年元和元年四月供勢

一七



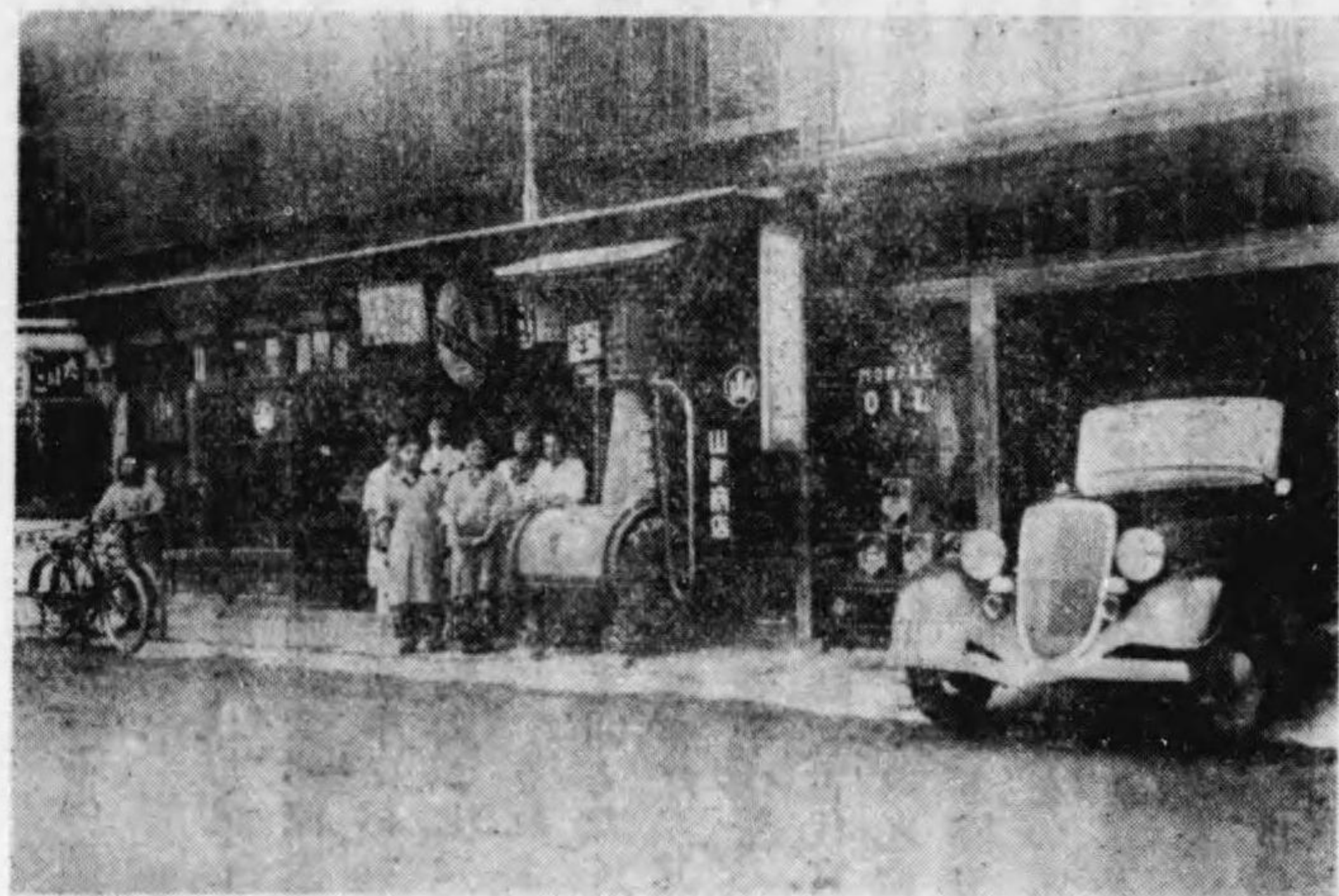
上下二百人にて盛岡を出發海岸通りを大槌を経て宮古に着いた、時恰も津浪上りの爲、侯の宿舎に充つべき家がなかつたので、今の支廳のある場所に御假屋を作り侯を犒ふた。後其場所を大官所に用ひたので、爾來三百有餘年の間、官所の名稱をも御假屋と稱するに至つた、當時宮古の街は津浪の爲一軒残らず流失したので新たに市街計劃を立てる必要があつた、依て利直侯は大官等と共に上の山に登り町割の指揮をせられた、其の基本の街を本町と命名せられた、即ち今の本町是である。

南部信濃守源利直公宮古へ元和元年四月晦日に御光來被遊候砌黒田之上の山の太石に御登り被遊五月三日場所御見分被遊同五日に水主丁の橋の上に御登り被遊市相立つ候ても不苦場所とて御杖にて御差圖本町と御割被遊候小本助兵工出でられ御挨拶申上候惣街町の間尺の書附は花坂傳左工門方に有之候（宮古由來記）

利直侯の登られた大石の前には今尙八尺廻りの傘狀の松が茂つてゐる、又其の岩石には猿と鳥の繪を刻んだ庚申塔がある、此の種の塔は郡内に稀である。



町割石



山 善 商 店

### 常安寺（驛より東北約八丁）

慶長年間代官小本正吉南部氏に仕へて三閉伊の郡代となり、其の政廳を宮古村に置いて以來神社佛閣を造營して大に士民の信仰を督勵した、即ち今の常安寺は其の造營に係かるものである。其の草創の年代詳かならざれども天正八年嶽翁嶺齋和尚が華嚴院第六世の三叟義門和尚を勸請して館合山麓に一字を建立せし時に始まるものと稱せられてゐる。

常安寺宮古山は華嚴院末にして曹洞宗此の寺横山の北にあり故に之を名づく、初其の何れの代に此地に移りしか知らざる也、洞元禪師以前の舊寺にて上代は天台宗、後に宗旨を改めし乎、未だ其の由來を詳にせず、報恩寺之を支配す（封内郷村志）、右舊記に依れば同寺は往古天台宗にして横山の北にあつたので寺號山號之に因むて付したと云ふ、當時横山八幡は同寺の守護社にて、即ち八幡觀音と稱へしも其の爲なる可く（豊間根舊記）、明治初年頃まで倒銀



杏の前にあつた観音堂は、往時舊常安寺の南方にあつたものと云ふ。

常安寺二世嶽翁嶺鷲和尚の慶長十九年十月二十八日晝八ツ時に津浪來襲して伽藍全部流失した、當時和尚は小山田澤の金右工門の法事に招れてゐたが沖の方に當り四、五度も大きな鳴動がしたので和尚も心元なく法事半にして歸山した、それより間もなく大津浪起り過去帳等も取り出す間もなく纒かに身を以て逃れ、後山から山口村に越へた、其後黒田村の永貞坊と稱する行者の隣地に寺を造營した、寛永二年五月第三世無角先牛和尚の時宮古代官小本助兵衛は其寺の狹隘なるを歎じ肝煎花坂内之助の持地の内の澤田打手ヶ澤を見立て、内之助と協力して其の澤を開き常安寺を再建した、即ち現在の常安寺は是である。其の後第七世靈鏡龍湖和尚が享保年間に本堂を改修し十五世螢道祖三和尚が庫裏を改築し十六世祖道悅秀和尚本堂を造營し第二十一世超三和尚に至り伽藍頽廢に傾ける爲檀家總代小成周藏、中谷



常安寺

興兵工、宇都宮吉太郎、花坂岩治、古館熊之助、坂下伊勢次郎等一同協議の上改築する事となり大正十年より起工し數年を経て本堂庫裏鐘樓等大伽藍を完成するに至つた當寺の本尊は釋迦如來で境内には閻魔堂、地藏堂、六地藏等があり檀徒約四千人を有してゐる。創草以來今日に至る迄三百五十年法運愈々旺にして現代は二十二世文雄師である當寺は古來多くの名僧智識を出した五世遠室龍浦七世靈鏡龍湖十八世大訥愚禪の三和尚は當時名僧として聞え高く殊に龍湖和尚は學徳共に高く檀徒の崇拜最も厚かつた藤原の觀音堂及點なし庚申塔、新墓、賽の河原、常安寺門前の地藏堂、上の山の釋迦堂等は即ち和尚の建立にして亦山門前の天満宮は護法神として和尚の創建せしもので現在の石廟は俳人岩間北溟の建設したものである。

當時の境内は老樹鬱蒼と茂り池塘清泉を湛へ定に閑雅幽邃の仙境である、公葬地には小本助兵工の墓及官軍の墓等あり寺寶としては親鸞上人御作佛像無銘幽靈の掛軸北條鉦の集古帖等を有し此の地方稀有の禪園である。

### 判官稻荷神社（驛より東約八丁）

文治年間源義經高館の難を遁れて此の地に來たり澤田の山に黒館を築き居ること數年にして再び北地を指して落ち延びた、今館の中腹にある判官稻荷は義經の靈を祀りしものである、慶長十一年二月當社の別當たりし源義時の識せる縁起がある其の中に

奥の宮古縣宮古街道の東に山あり黒館と云ふ登る事半にして平地僅かに方數丈奇樹怪木其側に生ず



祠あり判官稻荷と曰ふ稻荷の祠は萬國往々之有り然とも未だ判官を以て名を得る者を聞かず而して此祠特に之を得る所以の者は何んぞ昔源廷尉義経は兄頼朝と善からず京を去つて奥に來り身を秀衡に寄す、秀衡は深く舊を懐ひ主君の如く奉尊す秀衡の没後長子泰衡をむきて衣川館を圍み數々之を攻めて勝たず、勝たずと雖も兵日々止むなし廷尉謂へらく功成り名遂けて而して身を容れられざるはあ、命なるかな我は人の父に庇はれ又其の子と戦ひ人の民を苦しむいづくんぞ義ならんや不義にして戦ふは不義の人なり豈吾か志ならんや去るに若かさるなり遂に秀衡が錦囊の遺書を披いて之を讀むに蝦夷の路を得たりこゝに於て君臣感泣して意を決し中夜館を去り逃れて宮古に來り黒森の山中に館す各姓名を改めしもの、如し宮古の民廷尉の徳に服し辛いに其の甲冑を斯に埋め祠を立て、祭り判官稻荷の祠と曰ふ。云々

安永四年當地の人花坂與次門は山城國稻荷本宮の祠宮に神璽を請ひ社堂を修理したが天明二年に火災に遭ひ堂宇寶物共に焼失した、傳説に依れば寶物として緋威の鎧ありて義経の着用せしものなりと云ふ。當社の境内にお室と稱して白狐の住める穴がある信仰家は此の穴の前に鶏卵油揚鮮魚等を供へ祈願する風習がある、即ち白狐は稻荷の使番なるが故によく其の願望を傳達せしむると稱す當地の漁業家大漁祈願の爲參詣する者多く之が爲單なる無格社なれども參拜者の多き事他に其比を見ない。當社は昔小山田村にあつたものを移したと云ふ説もある、今其舊祠の跡が残つてゐる、又長澤村川戸山にも判官稻荷の祠があつて義経の石像を安置してゐる、小澤の山奥に籠石とて一個の石が平らに重りたる方二間位の大岩石がある、昔義経が黒森神社に參詣せし際從臣と共に此石に休み地理を點檢せし所て即ち掛石なりと云ふ。黒館は又九郎館、宮古館とも稱し建久年間より閉伊頼基の一族が據りし

所にして天正十九年淺野長政が九戸政實討伐の歸途宮古に宿營し親しく宮古館を點檢した記録がある館の跡は宮古市街を眼下に臨み山海の眺望甚だ佳し今射的場の設備がある。

## 宮古灣の全貌

宮古灣は西姉ヶ崎、東閉伊崎間の灣口から南方遙に赤前に達する十一軒餘に亘る細長き灣である。灣の東方に南から北に突出して永劫防波堤の役目を果して居るものは重茂半島である、灣に臨んで斷崖をなす僅かに白濱川、堀内川の溪流によつて穿たれた峽谷により東方重茂諸部落との交通が開かれてゐる。

西岸は北は姉ヶ崎より南は鉏ヶ崎、鏡岩、に至る迄は岩礁海岸で、百米にも達せざる海蝕台地は直に海に迫り直立した海蝕崖を現出してゐる、海岸に變化を與へるものは先づ北に日出島あり、南に臼木半島が峭の濱地峽に括れて東方に突出せるあり、臼木半島の南面には龍神島、袴嶋等の離れ小島あつて沿岸に美觀を添へ、館ヶ崎を廻れば八戸穴は眼前にあつて小舟數艘を入ることが出来る、更に進むと名勝地淨土ヶ濱である、淨土ヶ濱の美觀は更に潮掛の鼻をかはして外洋より北面の海蝕崖を眺めた處にある、更に沿岸を船にて進めば礫岩層の海蝕崖で、之に石英粗面岩の砂子島の孤嶋を配したるは峭の濱の景觀である、兩々相俟つて一層の美觀を發揮する。

此處で少しく地質的の考察を加へて見よう、鉏ヶ崎灣西岸鏡岩から西方斷崖を経て北方熊野神社、峭の濱更に日出嶋部の沿岸地方にかけて礫岩層が存在してゐる、最近まで鉏ヶ崎東岸に大島、小島等





榜

島

と稱する礫岩からなる顯礁が存在してゐた、以上の事實から推定して北は日出島と日出島部落の間をかけて南方蛸の濱灣、鉾ヶ崎灣に至る一體は礫岩層で其の東が日出島、白木半島の兩古生層、石英粗面岩等が存在した、而して北方蛸の濱、南方鉾ヶ崎の礫岩層は石英粗面岩や古生層の堅岩に比して組織が軟弱であるから容易に海蝕をうけて北の方では蛸の濱灣となり南方では鉾ヶ崎の灣を形成し蛸の濱地峽の礫岩層によつて僅に兩灣を隔てるものと思はれる。

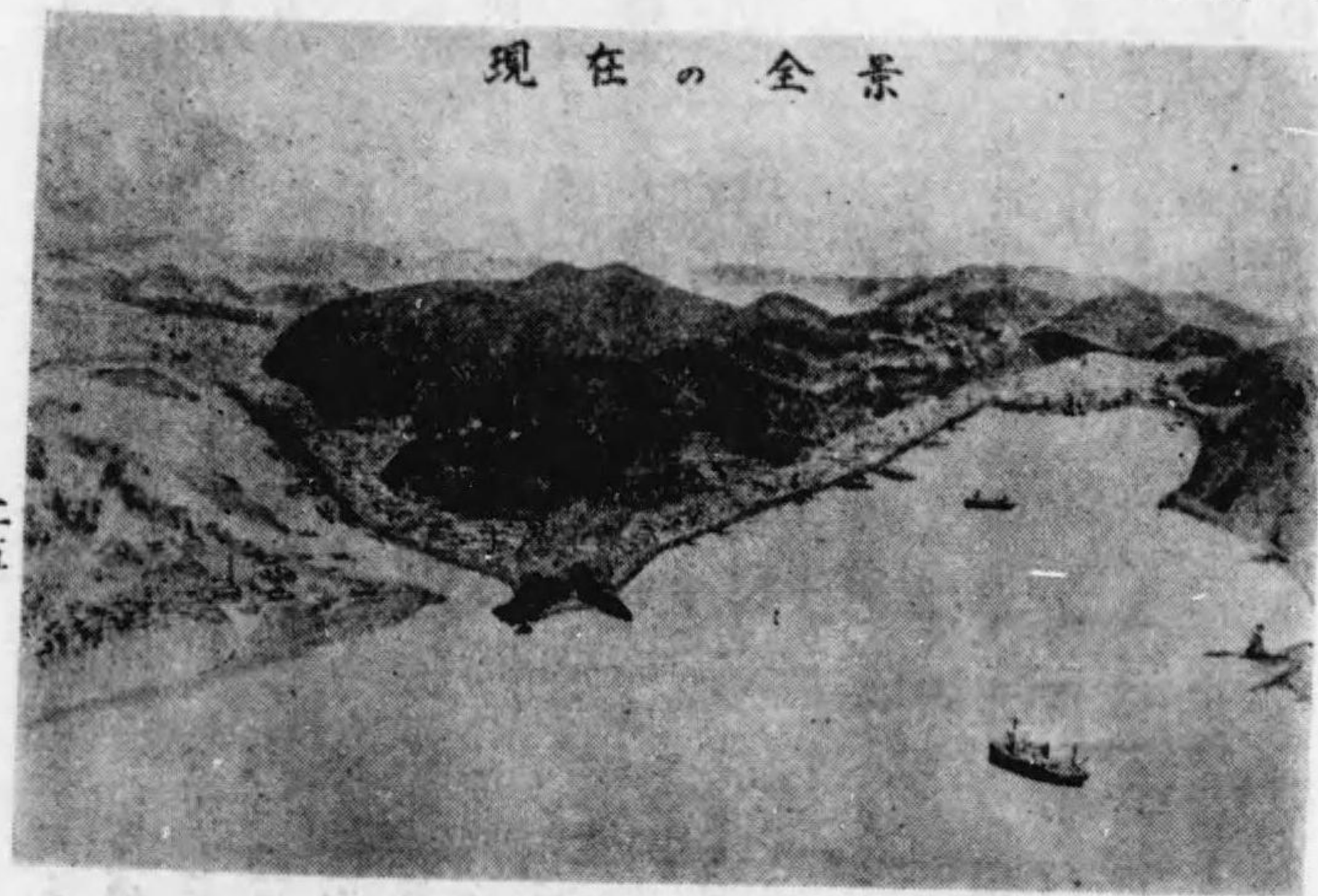
日出島が本陸から離れて現在するのは嘗ては白木半島と同一の經路をたどり、日出島の古生層の古生層と本陸との間に存在せし礫岩層は南北から海蝕が進み終に地峽部を失ひて現在の日出島となりたるものだらう。

宮古川以南は前者と趣を異にし砂濱海岸であつて其の間に金鷄山（越田山）高濱峠、真下の岩礁が海波に曝されて單調を破つてゐる、磯鷄、藤原の松原は金鷄山の北端から宮古川口に至る千二百米の弓弦狀の砂濱海岸、所謂長汀にして老松林立風景絶佳、彼の淨土ヶ濱、蛸の濱等の岩礁海岸に對し風景好一對をなしてゐる。

此の如き砂濱海岸の生ずるには、海底が非常に遠淺であつた處に宮古川から搬出する土砂、灣内各岩壁が破壊されて生じた砂礫等が、波浪の爲めに沿岸近く打寄り海底の砂土を動かして山をなして沈積する、土砂の供給が大なれば水上に露はれ陸地から内海をへだて砂洲が現はれる。斯くて内海は内部からの土砂の流出に因つて次第に狭められ終に沼澤地を生じて植物が成長し、僅に潟として存する、神林の浮島の沼は此の種の潟の殘存せるものである。

高濱峠の南端を基點として南に砂嘴が突出してゐる、之に松があれば丹後の天橋立、伯耆の由井濱そ

現在の全景



築港の前宮古港



将来の全景



築港完成後の宮古港

つくりである、どうしてそんなものが出来たらうか、高濱の東端は海蝕崖を宮古灣に向けてゐる、過去に於ては其の岩角は東方遙かに宮古灣に突出してゐたものであらうが、幾多の星霜の間受けた海蝕によつて後退し、其の海蝕崖面から落下した砂土は海岸線に沿つて南方に向く沿岸漂流の爲めに、現在の地に南へくと延長し、高濱の砂嘴を生じたものである、古老の談によれば昔は現在よりはずつと大面積で樹木が繁り狐狸の徘徊した處であつたといふ。

宮古港修築計畫

宮古港の地位

自然の良港に着目した政府は地方先覺者の熱意と相俟つて更に人工を加へて之れが完璧を期すべく昭和二年十一月重要港灣の指定をなし總工費二百二十萬圓（内百二萬五千圓國庫補助）昭和四年度から工を起したが偶々財政緊縮其他の事情で再度工費を削

減せられ昭和八年度に工費百五十八萬餘圓（内七十三萬餘圓國庫補助）に減額され昭和十一年度に完成する事になつてゐる。計畫圖は附屬圖面で大體参照されたい。

現今宮古港が東北各港中如何なる地位にあるか、東北六縣の内重要商港は宮古、青森、鹽釜、船川、土崎、酒田、小名濱の七港である。昭和七年の調査によると輸出入貨物噸數は右七港の内青森が第一位で宮古は第二位になつてゐる。昭和三年には僅かに十五萬噸であつたものが、八年には四十七萬噸に昇り六ヶ年間に三倍以上になる躍進ぶりである。築港完成の暁には百萬噸の貨物吞吐も遠い事ではあるまい。

山田線鐵道工事の  
主役者

山田線鐵道工事に最も關係の深かつた鹿島組や、鐵道工事の事を一應記述し置くのも鐵道開通記念に



内務省宮古修築工事現場全景



は徒爾ではない。

……鹿島組……

鹿島組の創立は今より約九十年前天保年間先々代鹿島岩吉氏によつてなされ主として外國商館等の建築請負をやつてゐたが、逐年業績をあげて明治十三年三月始めて鹿島組の商號を掲げるに至つた。



鹿島組  
鹿波 氏

内地に於ける初期鐵道建設工事は鹿島組が初舞台であつた。明治三十三年七月には京城仁川間の日本人として最初の廣軌鐵道工事を遂行し又台灣、北海道、滿洲にも進出した。明治四十二年宇治川電力の第一期工事を請負ひ、同四十五年二月に至つて先代岩藏氏長逝するや現社長精一氏之を繼承したものである。昭和五年二月二十二日組織を變更して株式會社とし精一氏社長に就任してゐる、山田線では第

十一、十六、十七、十八工區を工事してゐる、同氏は現職の外に東京商工會議所議員、日本土木建築請負業聯合會長、東京土木建築組合長、土木業協會理事、帝國鐵道協會理事等の要職にある、株式會社鹿島組の幹部は次の如くである。

株式會社鹿島組(東京市京橋區横町二ノ三)(社長)鹿島精一、(專務取締役)鹿島新吉、(取締役)鹿島龍藏、菅野忠五郎、永淵清介、眞田三千藏、高石庫治、湖松茂吉、(監査役)櫻井金作、山田虎之助、森田震治

……鐵道工業……

鐵道工業はもと鐵道工業株式會社と稱し明治四十年五月の創立資本金二百萬圓であつたが、昭和八年六月組織を變更して鐵道工業株式會社とした(事務所は東京市京橋區銀座西六丁目) 工事經歷は明治四十年四月富山直江津間の富山口第三工區を皮切に昭和九年六月までに請負區二百四十二區に亘り、山田線に關係せるは第二工區を初めとし、第三工區の一部、第四、六工區、大志田停車場、第七、八、九、十二、十三、十五、十七、二十工區を



鐵道工業  
飯田清太 氏

請負ひ、其他地方關係の工事としては小本、宮古線道路、茂師船溜、宮古川導流堤、田野畑道路、田ノ濱住宅地造成、山田町耕地震災復舊、釜石町矢の浦橋修築等の諸工事を請負ひ、鐵道院、鐵道大臣、復興局、工事施行各縣知事、諸會社等より賞狀感謝狀等表旌せられたものが多數に上つてゐる。同會社代表取締役は專務取締役として古川常次郎氏

であるが、北海道、東北營業主任技師は彼の丹奈トンネル工事で八日間生理めされた飯田清太氏であつて同氏は山田線工事中屢々當地方に往來工事監督をなしてゐる。當同社の重役は次の如くである。  
〔常務取締役〕田中惠、同松村松五郎、〔取締役〕鈴木理平、同菅原通濟、同田中仙太郎〔常任監査役〕古川馬次郎、〔監査役〕有賀定吉、同石川鼎



## 宮古灣戰蹟碑

(驛より東約十丁)



宮古灣戰蹟碑

此碑は明治維新の際徳川方の軍艦と官軍の軍艦とが宮古灣に於て激戦したる事蹟を録し大正六年三月故菊池長右工門氏が其別邸嶽ヶ崎の對鏡閣に建てしもので碑の額は東郷大將の書である、當時大將は官軍の一士官として従軍し此海戦に參加せられしと云ふ。

明治二年三月廿四日薄暮崎山村の海岸に一隻の黒船が現はれた、聽て其れから一艘のバツテラー(ボート)が矢の如く海岸に漕ぎ寄せた、上陸した四、五人の人々は和服姿の浪人武士であつた、彼等は夜分密かに嶽ヶ崎に至り鮪の濱で二三の漁夫を捕へて金を與へ街々の案内を乞ふた、時恰も官軍の軍艦甲鐵以下七隻が函館五稜廓を討伐の爲宮古灣に寄港日和を待つてゐた時であつた、殊に一部の艦員は上陸して遊興中の者もあつた、彼等は軍艦の動靜を内偵してふいと還つてしまつた。

此の情報に接した五稜廓の榎本武揚は直に諸將を集めて官軍撃退の軍議を開いた、時に甲賀源吾策を獻じて曰く、空しく守勢を取つて敵を待たんよりは、寧ろ進んで敵を撃破するに如かず、彼の甲鐵

は最も堅銳なれば、先づ之を襲ひ取つて我が用に爲さん、不肖源吾二艦を以て彼甲鐵を挾撃し、一艦は他の敵艦に當つたならば、必ずしも成らざる事あらんやと云ふのであつた、幸に此の獻策は容れられた、甲賀は即ち軍艦回天に搭乘し蟠龍、高雄の二艦を卒ひて宮古灣に向つた。

會々起つた颯の爲蟠龍は流され高雄は機關に故障を生じたので回天と行動を共にすることが出来なかつた、時に甲賀隊長奮然として曰く宜し我が一艦と雖も敵を破るに足るべしと即ち檣頭高く米國旗を掲げ曉霧に乗じて宮古灣に侵入し官軍の軍艦甲鐵に迫まつた、聽て米國旗を下して日章旗を掲げた、始て敵艦め官軍は米國船が入港するものと思ひ其の運轉の有様を眺めてゐたが、茲に至りて始めなるを知り一方ならず狼狽した、此の時回天は甲鐵の左舷を衝いて發砲を命じた、官軍又之に應じて一齋に發砲し猛烈なる戦闘が始まつた、然るに回天の舷高は甲鐵より丈余も高かつたので流石徳川方の抜刀隊組も容易に甲鐵に乗り移る事が出来なかつた、其時甲賀隊長及荒井郁之助は劍を抜いて叱咤し突撃を命じた、士官大塚波次郎は刀を振つて眞先に甲鐵に飛込み諸兵も亦之に續いて飛込んだ、甲鐵の艦員多くは其の勢に恐れ甲板下に遁げ込み成は右舷より海中に投ずる者が多かつた、然し官軍の砲撃愈々猛烈にして甲鐵を奪取することは不可能であつた、其の中に甲賀隊長飛彈の爲め胸部を貫通せられて戦死し外人教師ニコールも亦左股に負傷した、荒井郁之助は甲賀に替りて指揮を取つたが甲鐵打取りは最早や困難なりと見て直に後進を命じた、回天は兩舷から發砲しつゝ、港外に退き北方を指して疾走した、官軍之を追撃したが遂に及ばなかつた、回天は航行中蟠龍に遇ひ相俱に函館に還つた、高雄は羅賀浦の海岸に乗り上げ自ら艦に火を放つて上陸し艦員九十六人普代の山中に潜伏せしも後、出て、降伏した此の海戦は僅か三十分許りの間であつたが、兩軍の死傷頗る多く回天最も慘烈を



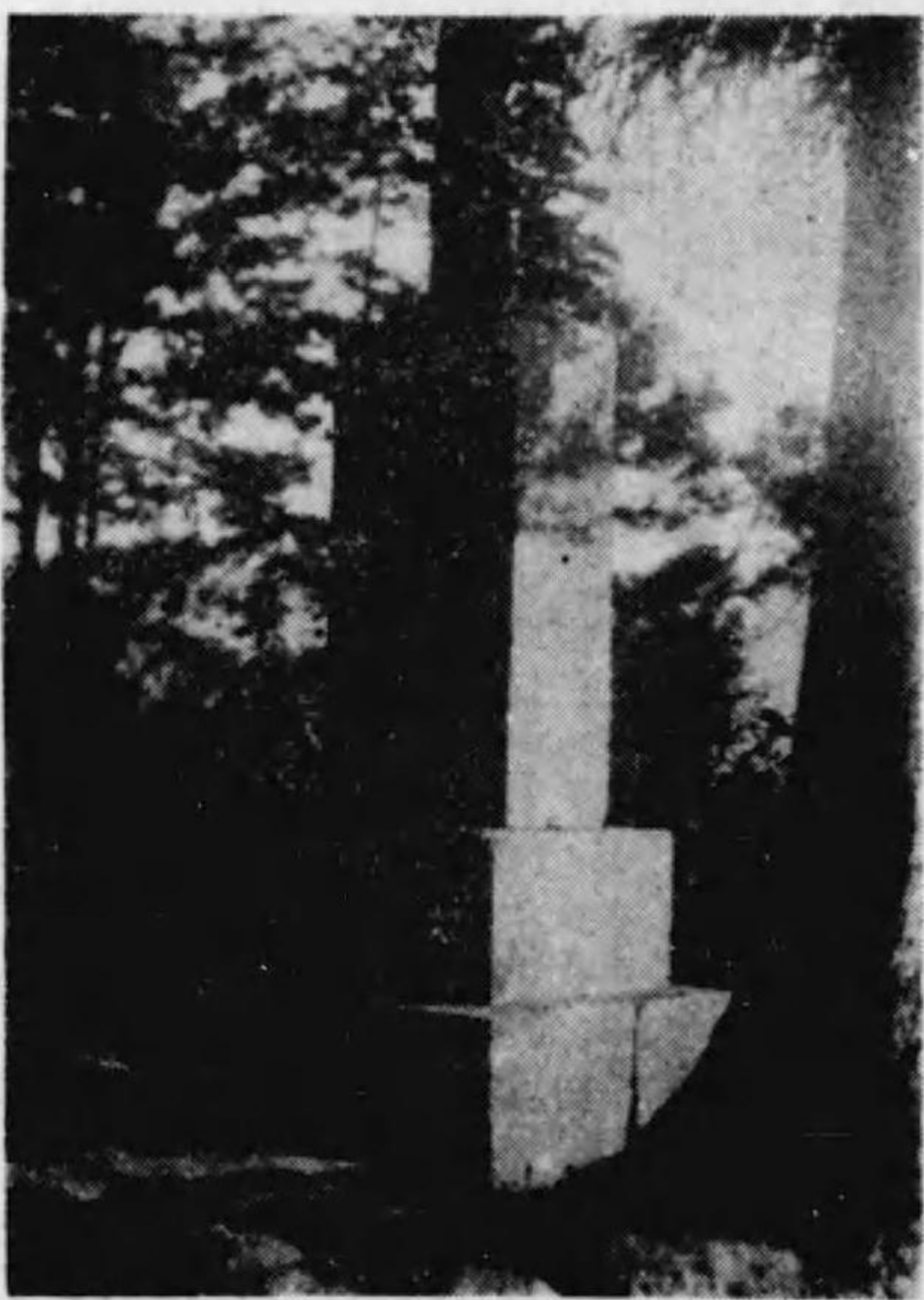
極めた、其の犠牲者は死者十九名、傷者三十四名であつた。(甲賀源吾傳參照)

## 官軍墓

(驛より東北約十三丁)

明治維新の際函館五稜廓討伐の官軍三千餘人海路山田に上陸、其れより海岸通りを陸行し笛太鼓等にて「兵隊進め」の調練音頭面白く明治元年十一月宮古の街に練り込んだ、其兵士の中には十四五才の若年もあり草鞋にて足を傷め跛行する者あり、筒袖の衣薄く初冬の寒さに震へるもありて見る者皆同情せざるはなかつた、此の一行は二三日宮古に滞在野邊地に向つて出發した、當時其隊中にあつた岡山藩士小西光信が其の宿所常安寺で病死したので宮古及岡山の役人等が協議の上常安寺に埋葬した、碑は同寺西側の公葬地にある、法名誠心義慮居士行年四十二。

又宮古灣の海戦の際戦歿せし官軍の勇士を埋葬せし墓が澤田の公葬地にある、其碑面には表面に各法名を録し側面には長州梅田梅之丞二十二歳、阿州甚吉四十七歳、阿州六助五十六歳、阿州銀次郎三十

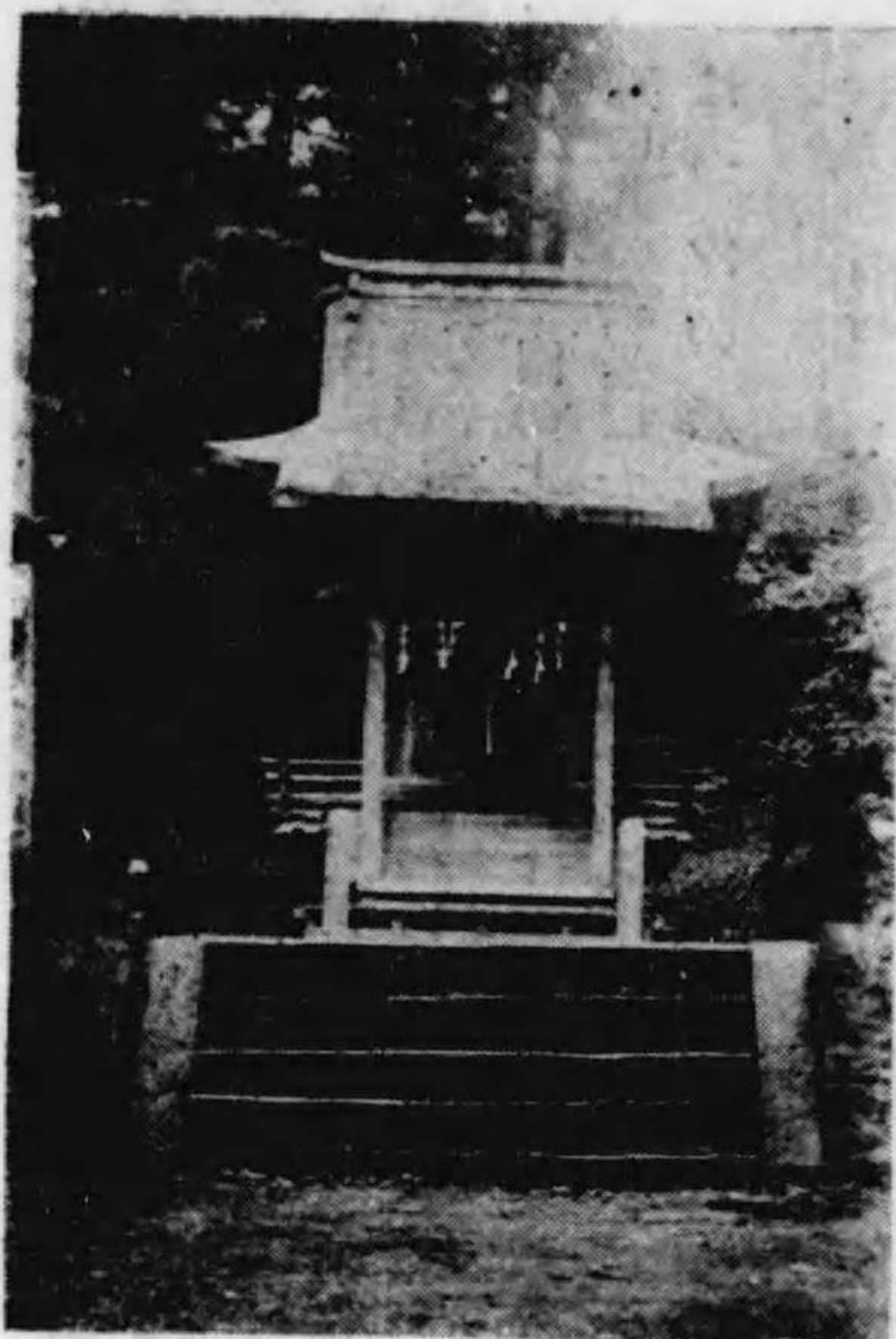


官軍墓

六歳、明治二巳年三月廿五日各討死と記してある。以上二個所の墓は何れも其保存費として年々縣より若干金を下附せられてゐる、又當時徳川方の戦死者は概ね函に納めて灣外に水葬された、其の後屢々海岸に打上げられた戦死者の遺骸は各所に葬られた、藤原觀音堂の後に忠岳義劍居士明治二年三月廿五日軍人と記した碑がある、之は徳川方の戦死者が藤原の海岸に揚つたのを埋葬したものだと言ふ。

## 熊野神社

(驛より東北約十六丁)



熊野神社

社殿は鉾ヶ崎の北方丘上にあり御祭神は伊邪册命て村社である、境内には稻荷堂、惠美須堂、牛頭天皇等の末社がある、常社は元其南方山腹にあり山根氏の氏神であつた、山根氏は紀州の人にて元龜年間早稻橋より鉾ヶ崎に移住し山根三十郎始て當社の神主となつたのが元和二年であるから其創建は蓋し三百四、五十年前であらう、天保五年火災に罹り舊記神具等全部焼失せし爲め其詳細を知ることが出来ない、現在の社殿は嘉永五年の建立で黒森神社を造築せし名工仙之助の作である、俗説には



葛木澤の金勢神（祭神伊邪諾命）と當社とは御夫婦にて即ち男女結縁の神であると、要するに昔時修現道流行の當時此の兩社を金胎兩部に配して拜んだものであらう。

藩政時代南部の歛ヶ崎とて領内第一の港女で繁昌してきた街だけに、今猶當時の思想風習を存してゐる、當社の祭日は六月十一日で、近在よりも參詣の男女雜沓して甚だ賑かである、殊に神輿の海上渡御の際は多少の漁船數十艘色とり／＼フライ旗を飾り雁行して内灣を一週する光景は頗る壯觀である。當社は高き岡の上にある爲め眼下に街を見下し前面に鏡の如き宮古灣を展開して眺望絶佳である、殊に其の夜景は一段の情趣がある。

はつ汐の船とめてけり歛ヶ崎

重 厚

### 鴨墳の碑（驛より東北約十丁）

此の碑は歛ヶ崎上町金比羅神社の境内にあり、元夏保峠に建てられたのが轉々して現在の場所に移された、碑は高さ四尺余幅一尺三四寸粗面岩の自然石に芭蕉の俳句

海暮れて鴨の聲ほのかに白し

翁

と草書體に刻んでゐる、此の碑の由来に就て一説には天明癸卯の年盛岡の俳人素郷が建てたものとも又素郷の筆蹟なりとも傳へてゐる、又他の一説には素郷は宮古に來遊せしことなるべく從て其碑は里川の建てたものだと云ふのである。

「みやこじま」と題する小冊子がある、此の本には素郷の序文もあれども是は物外舎里川の著て里

川が夏保峠に鴨墳の碑を建てたる記念に作つたものである、里川は會て蕉翁の句碑を建てんとする志願があつたが偶々宮古に旅行し夏保峠に上り都島を一望するに當り、そゞろに蕉翁の「鴨の聲ほのかに白し」の句を思ひ合せ、向來千載の下此峠を鴨墳と呼ばしめんと欲して地方の同志の贊助を得て、天明癸卯の卯月此の句碑を建てたものである、それより盛岡に出て其月の廿五日に素郷の別墅望春亭に供養俳諧千句興業の催をなし「ほとゝぎす」を題として社中社外を集めて各詠み出でたる句中の若干を梓に鏤らせ併て雲嶺房東芽に宮古の全景を眺めた圖を畫かせ、之を前に掲げて一冊子となせるは即ち「みやこじま」と云ふ小冊子である、此の本には宮古の句は一つもない（以上新戸邊非佛氏説）。要



鴨墳の碑

するに此地方に傳はる鴨墳集上と書いてある本は即ち「みやこじま」のことなるべく其筆頭にある「大空にたちばな句へ杜宇」は即ち里川の句である、里川は其通稱不明であるが、多分津輕石村の人なるべしと云ふ。

尙此本の口繪にある南部宮古夏保峠の圖は今より百四十四、五年頃の宮古と歛ヶ崎の一部を寫生したるもので、郷土地理歴史研究上貴重なる圖である。



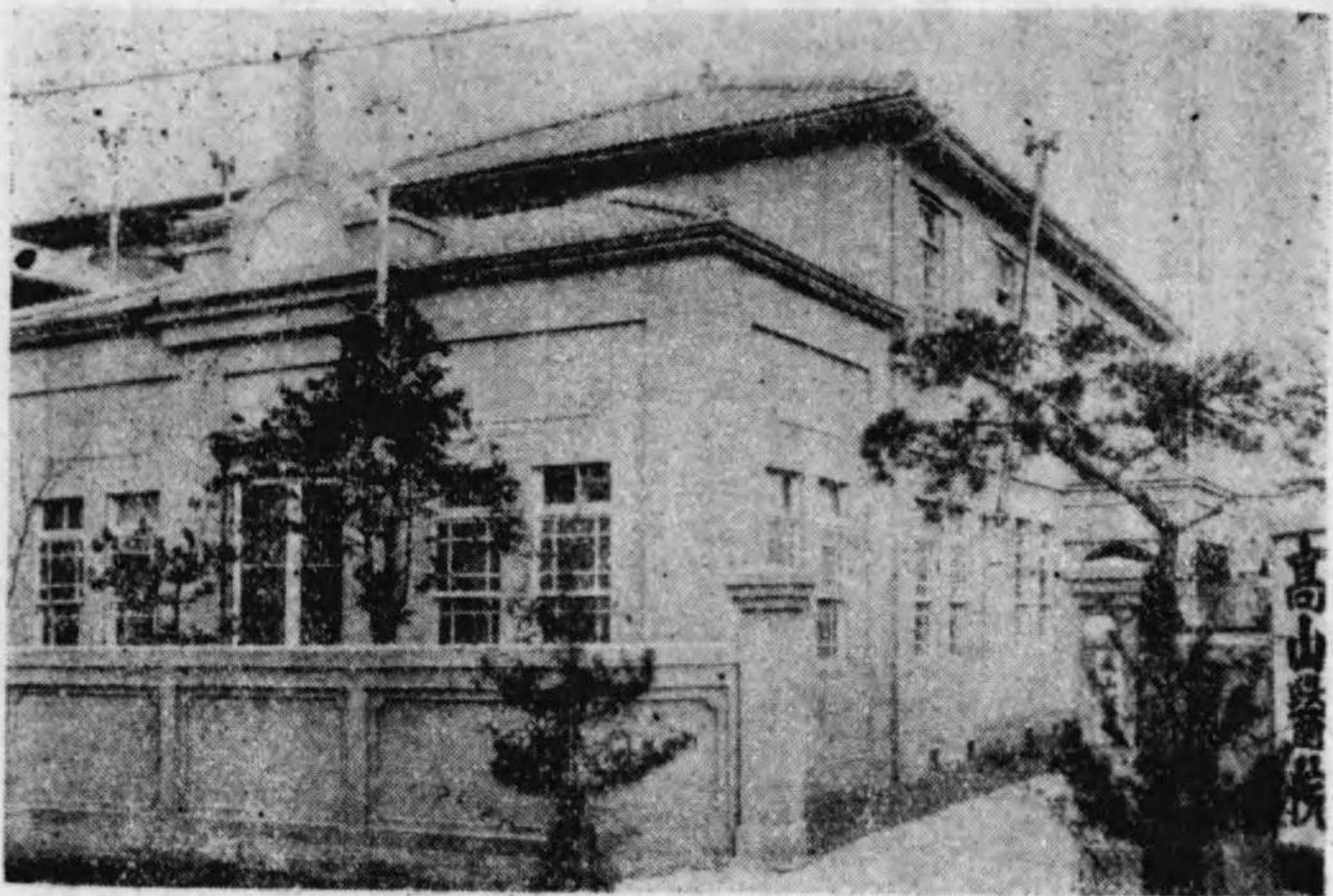
## 歴應の碑

(驛より東北約十六丁)

此碑は鉞ヶ崎小學校の學校園内にあり其の形狀は所謂板碑形にして高さ四尺巾一尺六寸乃至二尺一寸厚さ四五寸にして乳灰色の粗面岩である、碑面の大半は梵字一字を大きく刻り其の刻り方は平刻にして綿の中央綾を爲してゐる、其の基底部には歴應三<sup>七月</sup>十五日と小さく刻つてゐる、其の刻方は所謂昔時の刀刻りである、此碑は大正元年五月中太田玉次郎氏が郷土の史蹟調査の爲め各所の墓碑等探索せし折偶々地藏鼻の下なる小流の徑側にて之を發見せられたもので其後の場所に移したものである、曾て豊川光清氏は此碑の拓本を取り帝大史料編纂部の鷺尾敬順博士に示して説明を請ひしに「此碑に記せる梵字は金剛界の大日如來を意味する梵字にして五百八、九十年前已に其の地方に天台眞言の密教が流布せられし好個の史料である」と評せられた、此梵字の書き振りは恰も支那古代文字の風姿を有し一見して密教的幽玄の妙趣を感じる、



歴應の碑



館舎の経塚の碑と共に此の地方の南北朝時代の歴史に關係あるものとして研究せられてゐる。

## 宮古町の社會施設

宮古町の社會施設として(一)宮古職業紹介所、(二)宮古公益質屋、(三)圖書館、及(四)備荒倉庫がある。

宮古職業紹介所 は宮古町役場内に事務所を設け昭和四年二月一日事務開始し主任一人を置いてゐる試みに事務開始以來の成績を見ると次の如くである

院	求人数	求職者	就職者
昭和四年度	一六三	一一六	二六
昭和五年度	一五一	一五二	四一
昭和六年度	二七〇	三一六	一四〇
昭和七年度	三七二	四七六	二七三
昭和八年度	七六三	四九一	三九一

表によつても見る如く年々其の成績が高上してゐる

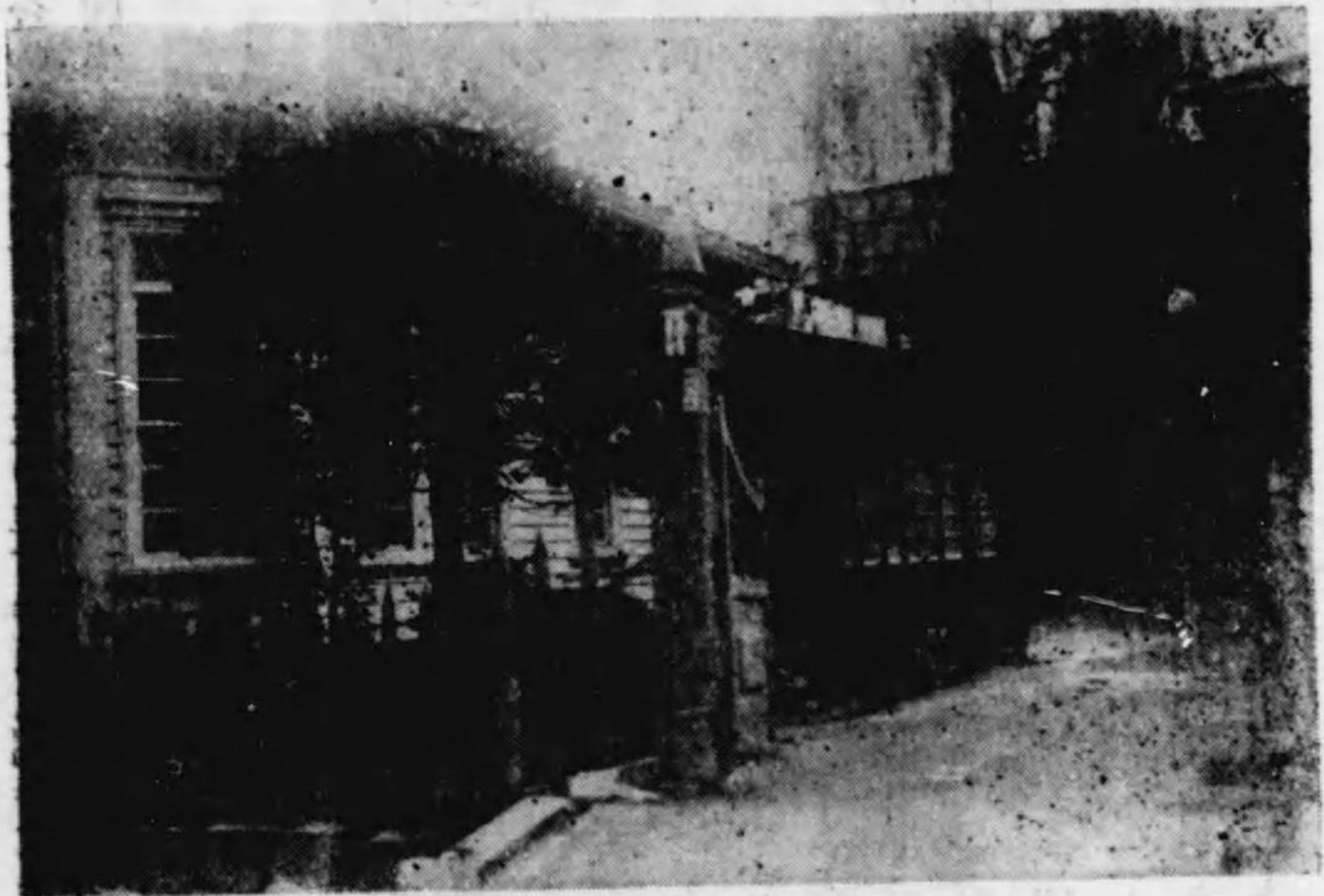


宮古公益質屋 は昭和四年八月一日から舊館の事務所で營業を開始し年々其の利用者が増加してゐる、倉庫も今の處質入物で常に満員と言ふので近く尙一棟を設置することになつてゐるが、其の成績は次の様になつてゐる。

昭和四年八月創立宮古町公益質屋年度別統計

年 度	貸付状況		辨済状況	
	口数	金額	口数	金額
昭和四年度	九五	五、七五、二五〇	三九二	三、二二、六〇〇
同 五年度	四〇七	一九、六三、七五〇	二八四	一四、八四、九〇〇
同 六年度	六八〇	二五、五〇、六〇〇	六九二	三三、九三、一〇〇
同 七年度	八七五	三〇、三〇、二五〇	八九三	二五、六三、一〇〇
同 八年度	七九〇	二五、六一、〇〇〇	八七一	二二、二七、三五〇
同 九年度	四二七	一三、三三、九〇〇	三四五	一〇、四〇、〇〇〇

昭和九年八月末現在在庫貸付高壹萬九百二十二圓八十錢、倉庫は間口五間、奥行三間半總二階建一棟  
**圖書館** は宮古町立宮古圖書館及宮古町立鉾ヶ崎圖書館の二つである、夫々小學校長を館長とし創立



宮古病院

年月日其の他は次表の如くである。

宮古圖書館

創立年月日 大正十三年九月一日

圖書數 千四百四十二部(昭和九年三月一日現在)

閱覽延人員 六百二十四人(昭和八年度)

鉾ヶ崎圖書館

創立年月日 大正十三年十月廿三日

圖書數 三百七十二部(昭和九年四月一日現在)

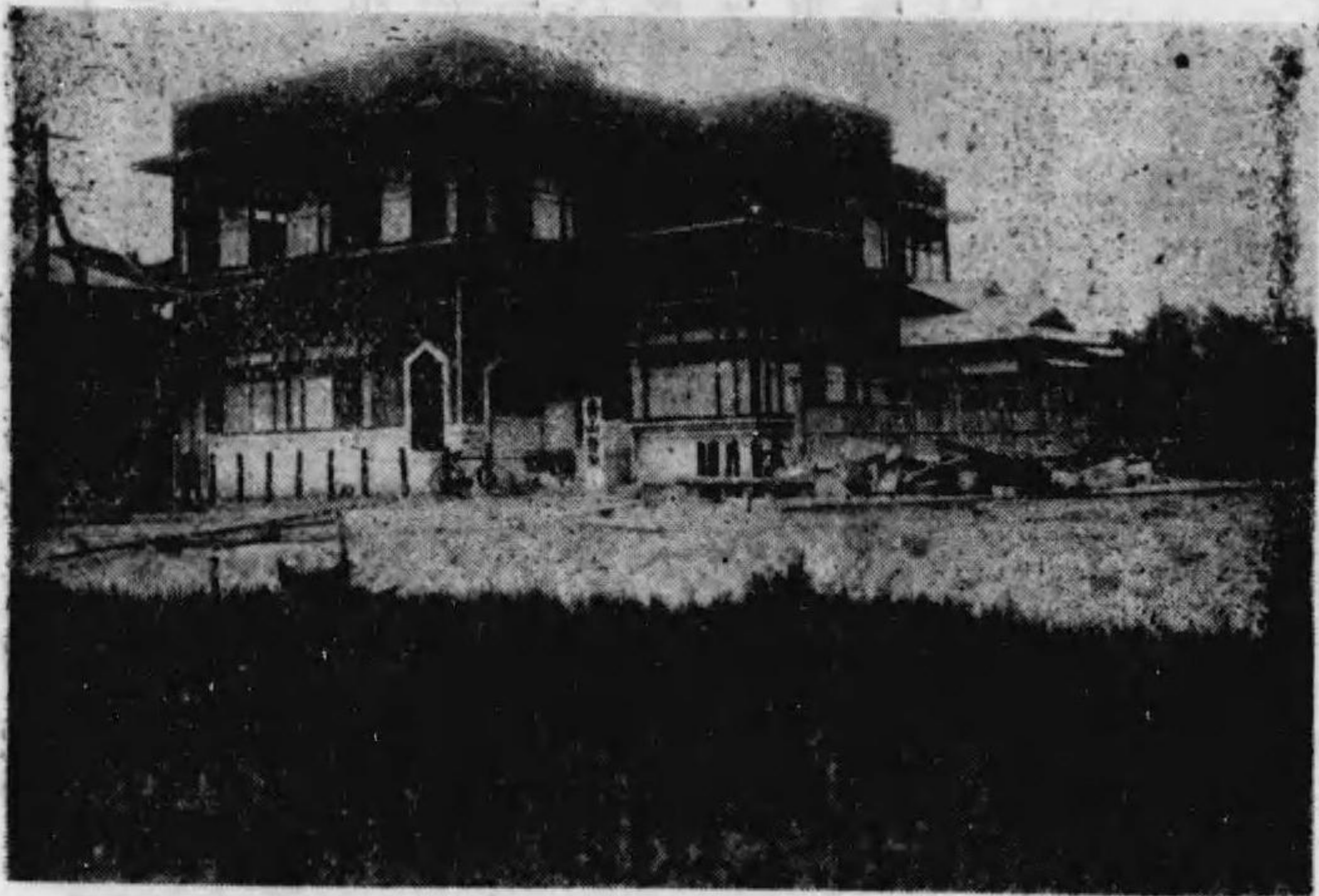
閱覽延人員 七百九十四人(昭和八年度)

備荒倉庫 は昨年三月の大震災災見舞金の一部を

以て宮古役場敷地内に設立中て木造坪數九坪本年一杯に竣工の予定になつてゐる。

火防・衛生・醫療

宮古町の火防設備は、近時急速に充實されて來た





消防組は八部に分かれ第一部第五部、第六部に自動車ポンプが有り、他は腕用ポンプである、各部約四十名の部員が常備されてゐる、街の中央の山口川には数箇所に貯水池が設けられ、篠田米吉氏、大井佐太郎氏正副組頭として一致團結晝夜警防の任に當つてゐる火防思想の普及には宮古警察署では消防組と協力して不  
断の活動を續け、見るべきものが多い。

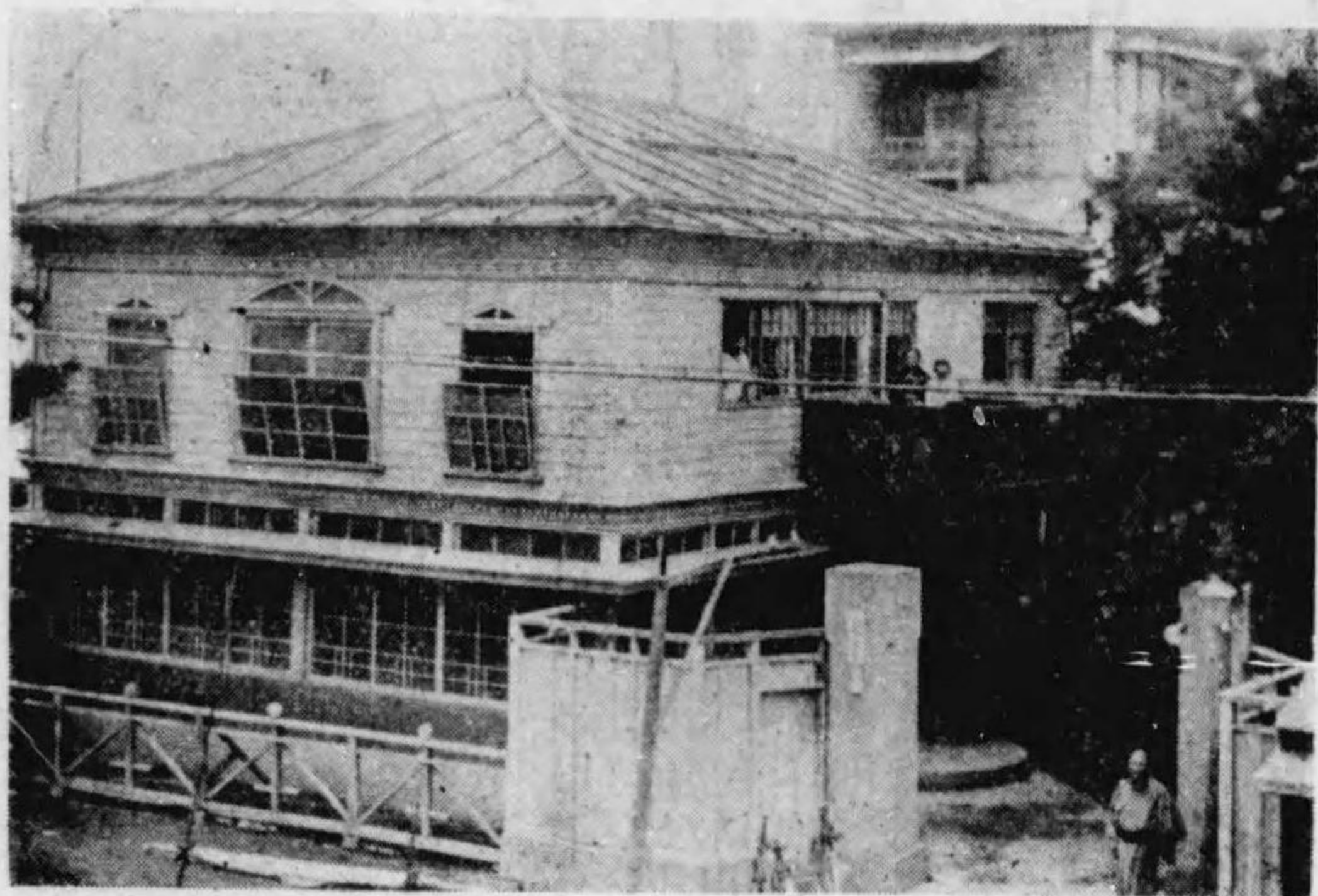
尙消防組幹部は前記正副組頭の外次の人々から成つてゐる。

〔組付小頭〕山崎倉助、〔第一部長〕伊藤豊治、〔二〕坂下平介、〔三〕藤島與八、〔四〕山内仁右工門、〔五〕鈴木勇三郎、〔六〕早川賢哉、〔七〕三浦松五郎、〔八〕長谷川熊治

季節的傳染病の豫防については町役場、警察署、衛生組合が相協力して萬全を期して居り、館合には町設避病舎が設置されて居る。腸チフスの豫防注射、石油乳劑の戸毎消毒も衛生組合の手で遺憾な



石川醫院



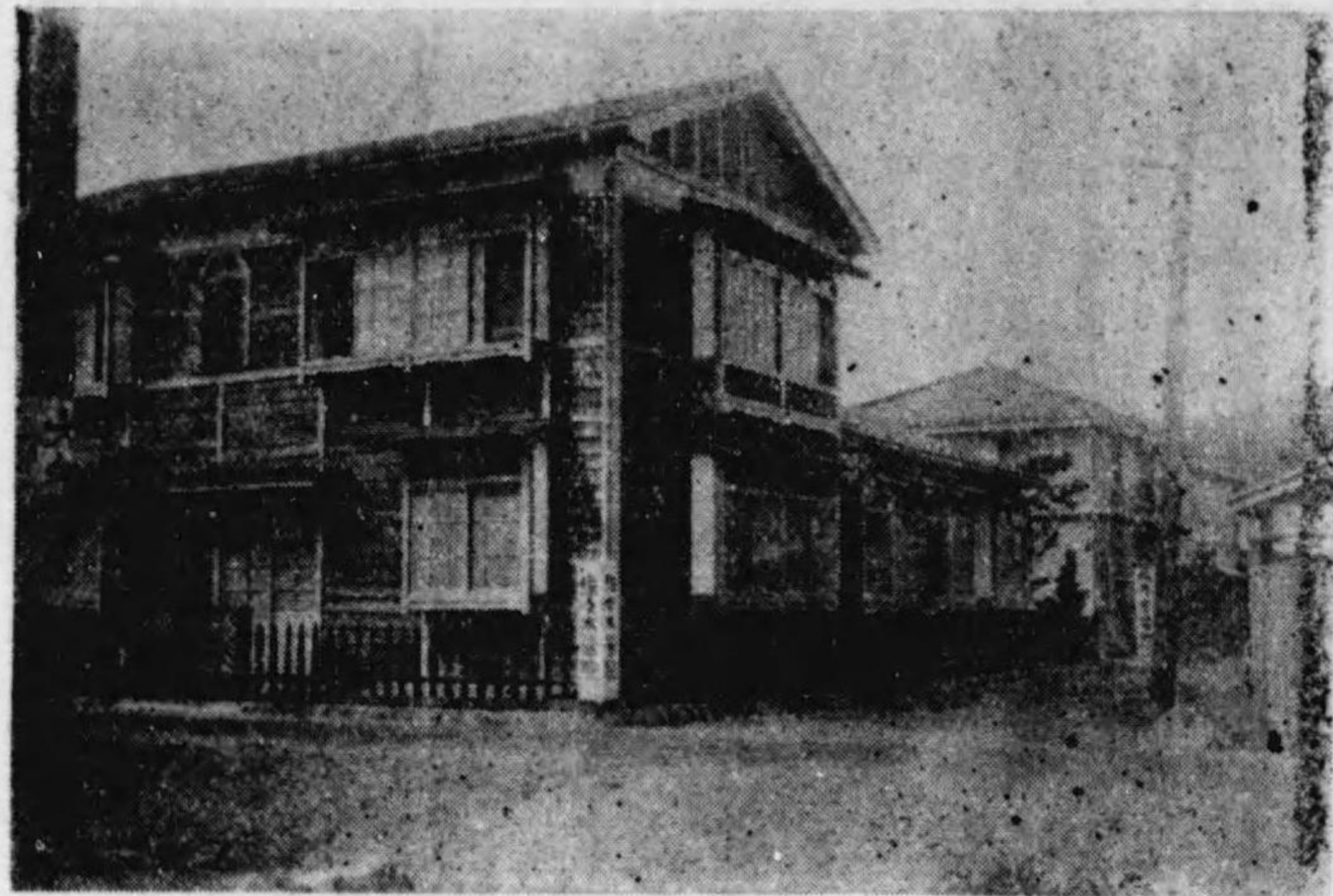
く勵行され、町役場に塵芥馬車があつて街々を巡回してゐる、市中には五軒の湯屋と、二十五軒の理髪店と五、六軒の薬店とがある。  
醫療機關としては宮古病院、高山醫院、石川醫院、道又醫院、青山醫院、盛合醫院、佐々木醫院、平野醫院等醫療には誠に恵まれて居る、其の外齒科醫院としては五軒、産婆、按摩等の機關も備はつてゐる

### 帝國水難救濟會

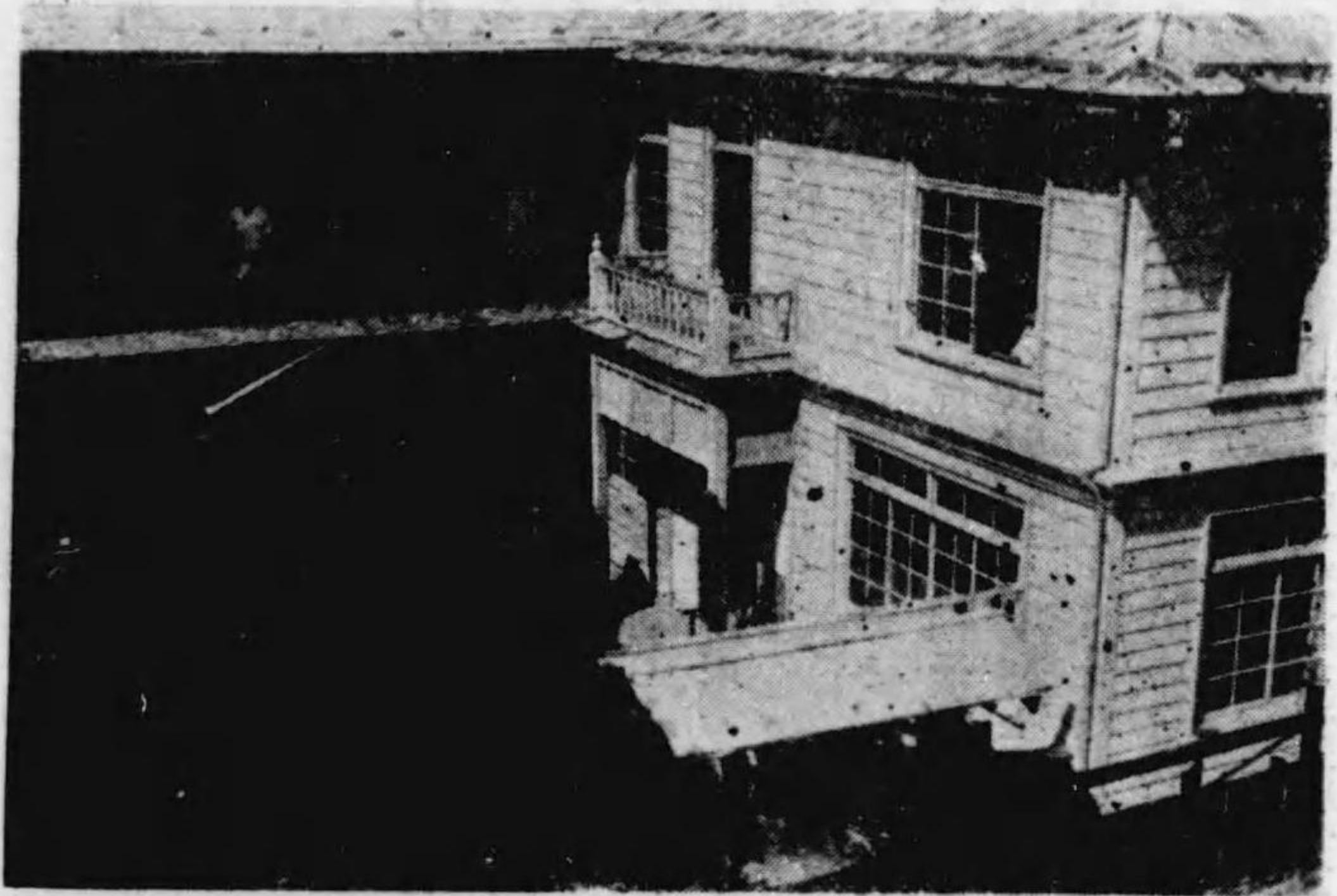
### 宮古救難所

帝國水難救濟會宮古救難所は宮古警察署内に事務所を有し、救助艇「ひので」を本春完成し、救命銃其他一切の救助器具を有し海の守りとして海難救護に遺漏なきを期してゐる、昨年三月三日の三陸大津浪に際して不眠不休眞に涙ぐましい献身的努力を續け其の功によつて名譽所旗を伏見總裁宮殿下より親しく下賜せられたるは餘りに人の知る所である。





院 醫 木 々 佐



院 醫 野 平

四三



から成つてゐる。

長 署 察 古 宮  
氏 七 壽 星

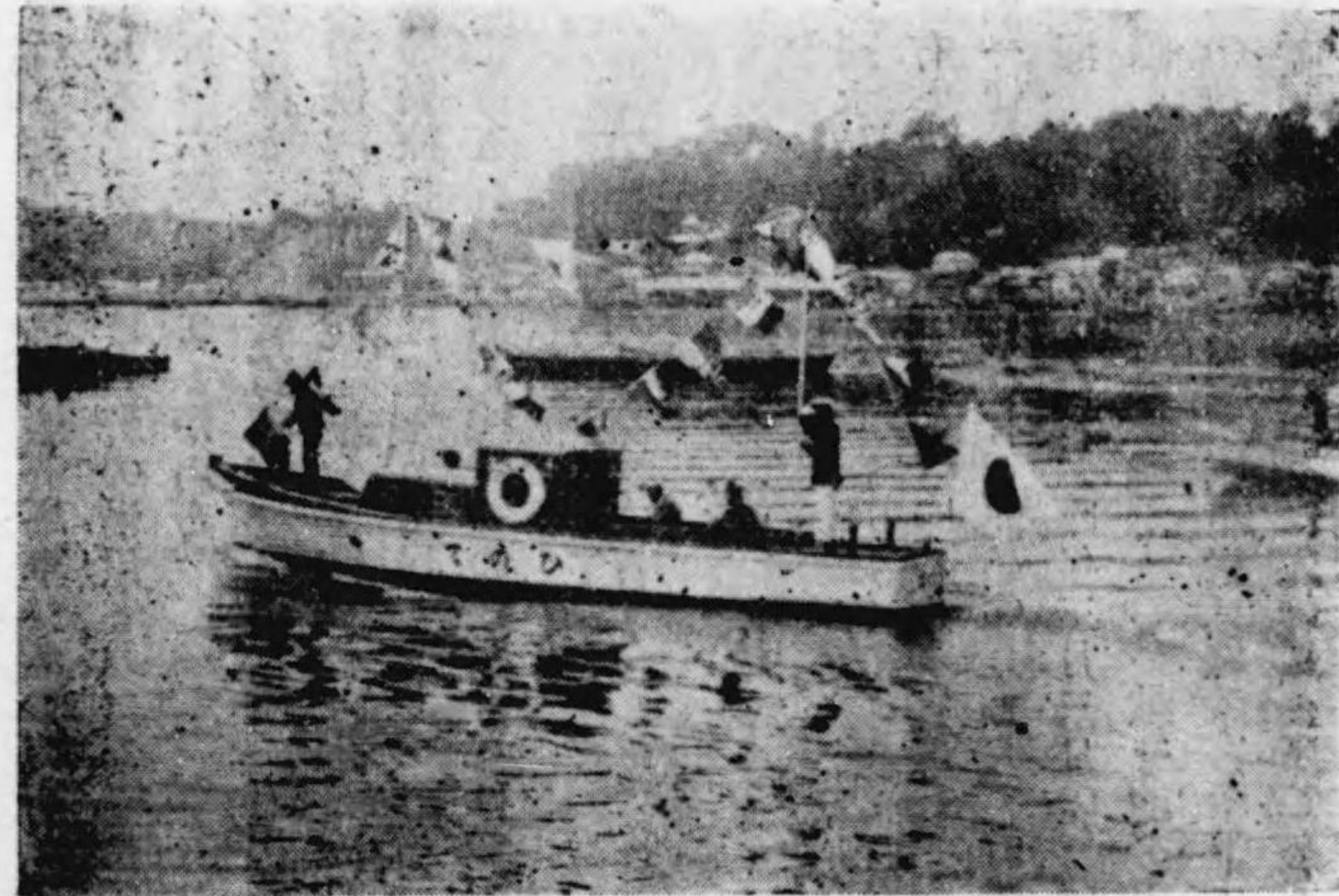
山田町、  
田老村及田  
野畑村には  
夫々支部が  
ある。幹部  
は次の諸氏

〔監督〕星宮古警察署長、〔所長〕篠田米吉、〔救助  
長〕小笠原孝三、徳江安太郎、〔看守長〕大井佐太  
郎〔組長〕八木平助、三浦竹次郎、濱木由次郎、  
北館三四郎、早野凌一、外に所員七十四名

田 老 村  
〔支所長〕山本嘉兵衛、〔組長〕赤沼萬藏、外に所  
員三十名

山 田 町  
〔支所長〕太田五郎助、〔組長〕佐藤榮助、外に所  
員五十三名

田 野 畑 村



〔で の ひ〕 艇 助 救

四二





〔支所長〕大澤予次郎、〔組長〕大澤文太郎、外に所員二十一名

### 諸會社、組合、商店等

道 由來宮古は水産の地であつて商工業の地ではない然し多年希ひ憧れた鐵道が開通汽笛一聲高鳴る響を聞くにつけ、又三千噸の汽船が岸壁に横付さる、様になつたら桃源の夢も醒めずに居られまい、宮古驛と波止場を海陸の兩玄關として將來の商工業も一段の殷振をもたらすであらう。

院 今、海の玄關口から覗いて見ると、宮古港に廻來の漁船で宮古漁業組合の宮古共同販賣所を知らぬものはあるまい、其の取引高が年々高上して昨八年度は約百萬圓に垂々としてゐる、鉞ヶ崎共同販賣所も今や大越新組合長の手で着々其の功を收めんとしてゐる、崎山浦漁業組合の共同販賣所も一昨年鉞ヶ崎浦に進出し組合員の漁獲品や豊富な海藻類を取扱ひ

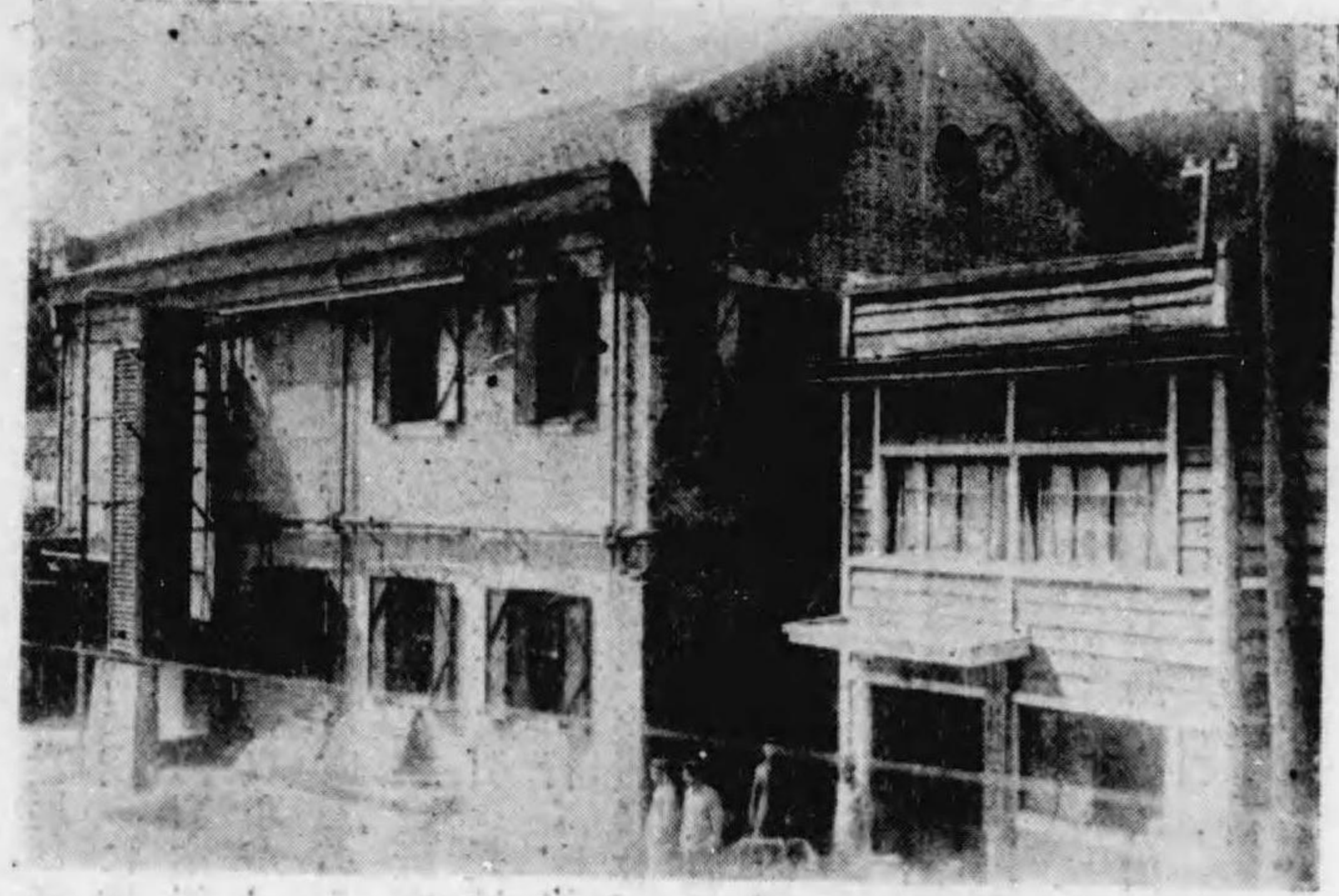
成績見るべきものが多い、物産倉庫の發展は産業組合として誠に異常な發展で創立日尚ほ淺きに拘らず縣からも折紙付きのものである、海産物商業組合は創立早々で未だ目醒しい仕事はして居らぬが、其の將來性に富んだ點は衆人齋しく認むる處である、御馴染の三陸水産冷蔵は最近日本食料工業會社宮古工場と改めて冷蔵冷凍魚の取扱を一手に引き受け其の製品は米國其の他の海外まで賣られて行く、漁船に無くてはならぬ油槽所に龜井商店、鹽釜商會、三井重油があり、最近全購聯て宮古油槽所を設置せんと目論見中であるから重油界も戦線異狀ありの觀を免れない。

鉞ヶ崎浦に大きな存在の一として三陸汽船宮古支店がある、過去幾十年の間交通不便の三陸沿岸に唯一の文化輸入機關の重責を擔ひ來つたものである、鐵道が開通した今日昔日程の俵が無くとも尚且つ海の重鎮として其の職能は宗高なるものがある、翻つて陸の方面はどうか、半官半民の岩手殖産銀



宮古漁業組合共同販賣所





本日食料工業業社會宮古工場

行は築地通りに宮古支店を張り銀行其の物の信用回復のために堅實な營業振りを見せてゐる、而して宮古の金融界に今や王座の地位を占めんとするものに宮古信用組合がある、齋藤組合長以下幹部の堅實方針は銀行バニツク時代を見事に突破して其の信用正に百パーセントである、庶民金融機關として岩手無盡會社の存在も見逃せない、宮古に於ける盛岡電燈宮古支店の存在は餘に大きい、築地通に巍然たる彼の姿は宮古の建築界に一エボツクを革したものであり、夜の燈明界に王座するは勿論、電力の供給によつて工業界に寄與した功績は大きい、漁業が發展し鮮魚輸送のトラックや冷蔵船が輻輳する時代になつた今日なくてはならぬものに産業組合組織の泉製氷組合がある、當港製氷界の重鎮として漁業界に一役を果してゐる。

参考までに町内大通り筋店舗の營業別大要を示せば次の様である、勿論全町偶々に亘つての調査でない事を御ことはりしておく。(活狐内は電話番号)

- 日用雜貨洋品 佐々木長七(三四三)、小松庄治郎(三二七)、松井喜八(一四一)、菅原勝兵工(二〇二)、高岩庄一(一七〇)、佐々木長之助(二四三)、ミマツ商店(一五)、大村四郎(三〇五)、島屋商店(二五八)、菅原東助(一九)、菅原東吉(三二六)、沼崎伴治郎(六七)、岩徳商店(一四五)
- 菓子商 菅田吉太郎(二二六)、澤田市郎(三八)、石田喜野(三〇二)、花坂權兵工(三三四)、古館長藏(三二〇)、工藤七之助(三二八)
- 食料品 中川清一郎  
相澤源兵工(一〇二)、うまい屋、鈴木徳兵工、鈴木清五郎(二六五)  
野邊地典、鳴海貞八(二二一)、熊谷吉次、坂本商店、齋藤安次郎  
果實商 佐々木安太郎(二二〇)、大村果物店(二四二)  
藤原平彌(三三五)、鈴木清藏、鈴木直右工門
- 船具、漁具商 花坂岩治(五八)、藤田與惣治(一六五)、太平洋商會(二〇六)、名取船具店(二四七)



盛岡電燈社會宮古支店



金物店 五味金物店(六一)、名取金物品(一二二)、中屋徳三(三二七)  
 履物店 藤芳履物店、荒川伊右工門(三二六)、いづみ屋(三三五)、榮松屋、佐藤履物店、



元盛電宮古支店長 岩田源吾氏

山松商店(三〇三)

藥種商 熊谷藥舗(二一九)、船越賢太郎(三二九)、

山田庄助(六)、菊屋(宮古)、菊屋(鉾ヶ崎)

時計店 石原保太郎(三四八)、松橋時計店、芳川時

計店、駒井時計店、佐々木時計店(四〇八)、門屋時計店

呉服店 龜屋(一二五)、齋藤徳右工門(六二)、松屋

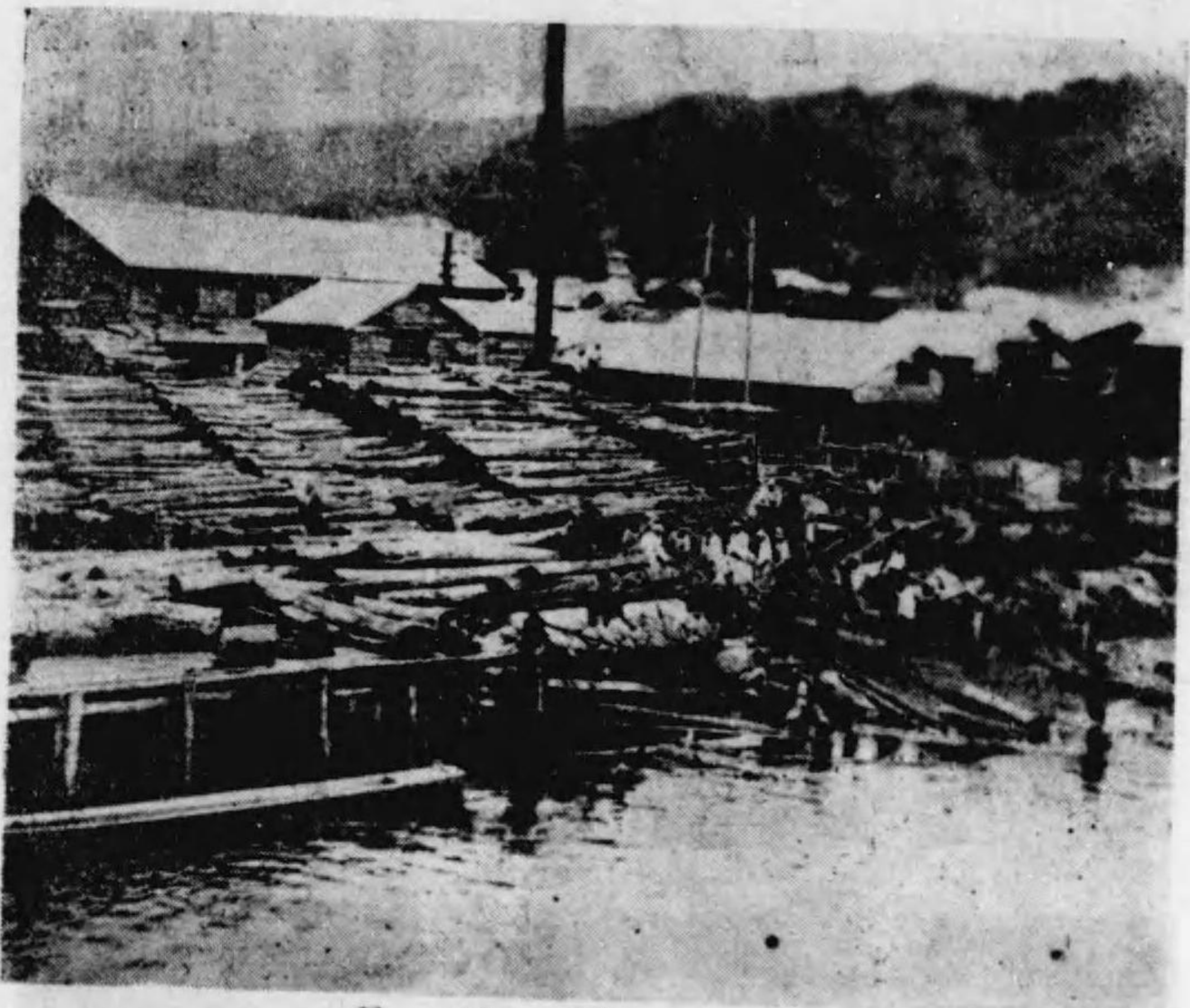
鐵道枕木商

篠田米吉氏

明治五年九月廿四日生



僅々十數年にして全國枕木商界の第一人者となり其の優秀な製品は鐵道省、三井物産其他各私鐵などに販賣し遠く臺灣にも輸出するに至り日本金満家列傳に座するに至つた一事で氏が如何に理財家であり奮闘家であるかを物語るものである。  
 宮古町會議員、帝永宮古救難所長、宮古消防組頭、下閉伊木材同業組合長、宮古運輸株式會社社長など公私共に席の暖まるを知らざる活動を續けてゐる。



(一六一)、岩江屋(三六〇)、マルイ(三三六)、  
 高橋京三(二〇一)、中村屋、王木屋(二五六)、  
 佐藤與兵工、佐藤與助(三三〇)  
 酒店、酒問屋 東屋酒造店(二)、三浦松  
 五郎(二二)、盛合酒造店(津輕石村)、澤田千  
 代吉(三四五)、三浦丑太郎(一五二)、鈴木清五  
 郎(二六五)、鈴木酒店(三一五)、中澤徳兵工  
 田(四)、中野酒店  
 洋服店 梁川大吉(六六)、八木洋  
 服店、齋藤洋服店、浦邊洋服店、關川洋裁研  
 究所  
 家具商 鈴木嘉三(三三七)、田子  
 兄弟商會、荒川商店、辻家具店  
 電氣器具 佐々木電氣店(三四〇)、堀  
 合金太郎(三四〇)、鈴木勇三郎  
 書籍商 伊藤治助(一四四)、小成徳  
 三郎(三三八)  
 材木商 篠田米吉(一〇一)、村田





店 服 吳 屋 龜

米 穀 商 藤島彌助(一七五)、佐藤惣太郎(一一〇)、澤田林太郎(三一八)、伊藤長五郎(一四八) 坂下庄兵工(四七)、中屋傳七(四〇二)、松田徳太郎(二〇八)、佐々木源太郎、箱石來定(七三)、岩田徳右工門、吉田安次郎(一五四)、古館儀助(一五七)、越傳米穀店

海 産 物 商 小笠原孝三(一一五)、島香直次郎(二四)、熊谷善四郎(二八)、貫洞義郎(一二三)、佐々木新六(一四二)、野崎徳助(三三三)、齋藤與助(一五六)、小笠原理三(二三五)、小笠原忠三(一四六)、藤田榮太郎(四六)、中島磯太郎(四八)、裴地忠平(二四六)、中野喜代治、伊藤安二郎(一三八)、小笠原直三(五五)、三浦永藏(三七)、北村要藏(二三六)、坂本嘉兵工(一七三)、鈴木徳次郎(七二)、早川若次郎(一五八) 若山寅次郎(二一八)、吉田儀七(二〇三)、大井佐太郎(一一一)、徳江安太郎(四九)

理 髮 店 黒田(キクヤ町)、盛久、田中、大森、釜石、及川、福川、遠藤、山口、八木、佐野、

善一郎(一一二、三二一)、染谷代助(二五)、山崎善四郎(一五)、伊藤豊治(二〇九)、大森三太長谷川熊治(二三二)、伊藤源吾、島山トミ(二五九)

製 氷 販 賣 業 泉製氷組合、坂下八郎、濱田忠平

肥 料 商 藤田榮太郎(四六)、坂下清藏、

海 漕 業 横坂回漕店(一八)、鈴木長兵(一二)、大澤得次郎(二〇)、共和運送店(三三)

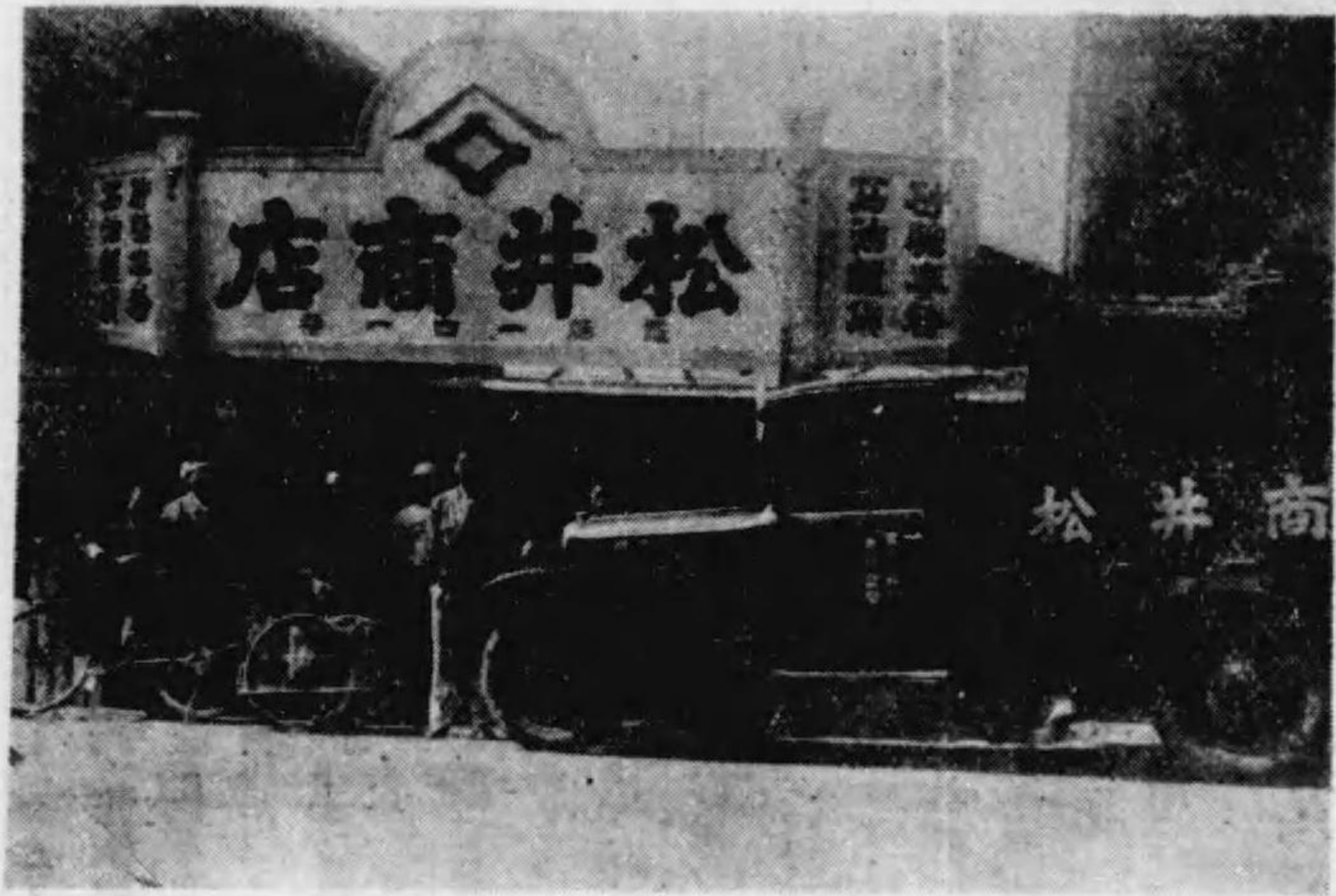
湯 屋 辨天湯、瀧の湯、上の湯 島屋(二五八)、福島湯、福助湯、得田湯

瀬 戸 物 商 尾張屋瀬戸物店(四〇七)

書 畫 骨 薰 商 伊香彌七

寫 眞 業 駒井寫眞研究所、内藤(一四三)、青田(三五二)、城内、佐々木、小原

印 刷 業 熊野屋印刷所(二〇八)、花坂與市、坂下平八、末廣印刷所



五〇

店 商 井 松

常駐主理川式木瓦器生器用便エシのデジエシと力製しなと製材一區劃  
をたしな元産類のラツ販買を等當の老舗あめ



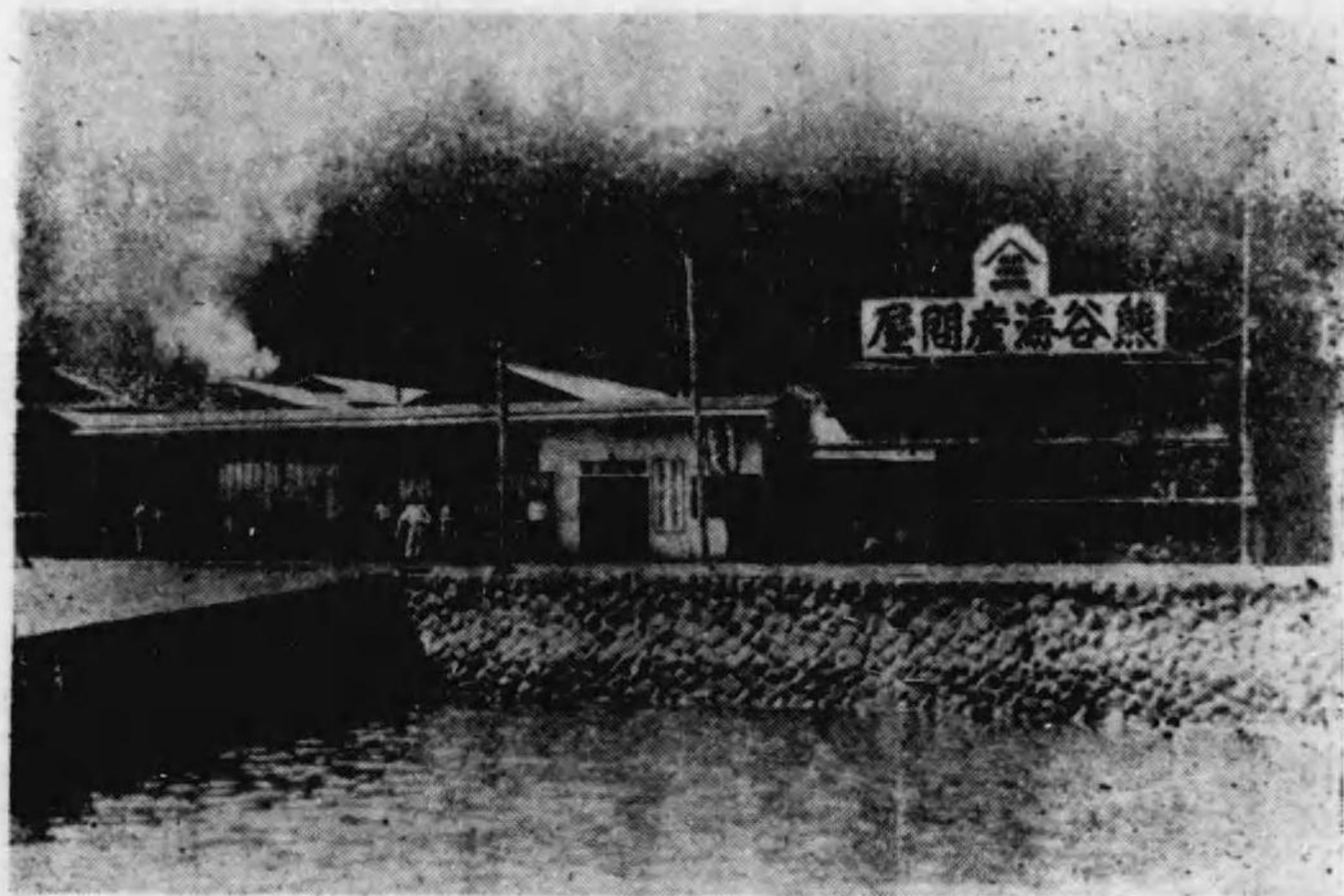
清水 鮮 魚 商 早忠、花淺、八兵工や(三三四)  
花徳、小可孝(三〇六)、高平(三二二)、槻川原、魚  
正、魚勇、山口、古館、及び(三六八)、佐々由、  
齋與(一五六)、坂田、坂忠、坂常、佐々菊、齋留、  
鈴木



長校學小崎ヶ嶽  
氏吉堅林海東



長校學小古宮  
氏一耕川石



部産海谷熊

五二

## 教 育 機 關

### (イ) 國民教育と補習教育

國民教育機關として(一)宮古小學校(二)嶽ヶ崎小學校、補習教育機關として(三)宮古商業專修學校(四)嶽ヶ崎水産補習學校がある、(一)と(三)とは宮古區にありて校長は石川耕一氏、(二)と(四)とは嶽ヶ崎區にありて校長は東海林堅吉氏、共に高等官待遇の名校長揃ひである、兒童の信頼は勿論、町民の信用厚く以上の諸校が何れも今日の令名を致したるは兩氏に負ふ所が多い。



製材業  
村田製材所主

村 田 善 一 郎 氏

明治廿一年一月十日生

宮古木材製材界の麒麟兒として氏の盛名は鮮かである、事に當つて單刀直入其裁決誠に竹を割つた様な快感を興へる、頭腦明哲、談論風發、而かも事業經營の才幹に至つては、氏率先郡下に唯一と稱せらる高速度エンジンを設備し製材界に一新を劃したるによつても判かる今や製材界の第一人者として自他共に認むる處。而かも總て來らんとする宮古の轉換機に巨大な足跡を印すべき素質を多分に藏してゐる熱情家である。

五三



(ロ)中等教育

(一)岩手縣立水産學校



村田製作所高速エンジン

宮古川の南岸、宮古橋の稍上流にある本校は元明治卅一年七月に郡立簡易水産學校と呼ばれたが、卅四年六月縣立となつて以來、卒業生も昭和八年までに六百餘名を出し、今では縣外からも入學志望者が集まる程全国的に有名な長い歴史を持つ學校となつた。昭和八年からは縣立六原青年道場の分場として海洋青年道場

が併置されて製造場も大擴張され練習船宮古丸(七三、六七噸百五十馬力)と共に此の種の學校として名實共に全國一を誇る設備となり海の開拓に輝かしい理想と不斷の努力を續けてゐる、高等小學校卒業者を入學させて四年科程、三年からは水産科、漁撈科の二科に分かれてゐる、現校長は徳望高き龜井順一氏である。

(二)岩手縣立宮古高等女學校



宮古伊藤岩手縣立高等女學校校長 伊藤重藏氏

本校は昭和四年八月に縣立となり、八幡の森、大銀杏の側、閉伊川清流の邊りに位置し、未だ歲月を閲すること少なきも、沿岸唯一の縣立女學校として漸次に其の内容の充實を期してゐる、現校長は伊藤重藏氏である。本校々風の質實なるは、郷土教育會の耆宿八重樫七兵衛の初代校長として其の高脱愴懐なる人格に負ふ所多きは、周人の齊しく認むる處である。

熊谷海産部主人

熊谷善四郎氏

明治十九年五月 生



先代平助氏の三男に生れた氏は父業を繼いで海産問屋を營み、兼ねて魚肥、魚油、其他海産製造業と漁業を經營し、熊谷海産部の名によつて之を統制してゐる。東京高商出身の逸足で其の透徹した經濟眼識は衆庶の傾聽する處である、現に保證責任宮古海産物商業組合理事長、保證責任岩手縣水産販賣利用組合監事、岩手商工協會理事等の要職にあり、温厚寡言紛飾なく、而かも其學歷と云ひ其の環境と云ひ、當然地方をリードすべき第一線の人物である。因に宮古音頭は氏の作になれるものである。



鐵道開通たら

鐵道が開通したら、差當りどんな工場や、仕事が出来たらうか、今話題に上つてゐるものを拾つて見ると……

縣の水産販利組合では、フキツシユミール工場を宮古に建設することは既定の事實で、本年中には出來上る事になつてゐる。

宮古驛と宮古港とを繋ぐ臨港鐵道が無かつたら運搬能率上今までと大した向上も無かるが、當然之は無くしてはならぬものだ。官設、私設、半官半民を問ふ所ではない。ミナト宮古の發展に伴隨して人造製氷事業も時代ものだらう。製糸工場は縣是製糸でも、組合製糸でも、宮古に分工場を建てる設計は出來上つてゐると云ふ。

押角峠が開通すれば岩泉町の煉乳會社は宮古分工場を建てることは、岩泉工場長の言明せる處である。

山林國下閉伊になくしてはならぬ木材防腐工場も話題に上つてゐる。

無限と云つてもよい豊富な魚油の固体化計畫、魚粕や鰯の機械的乾燥法、一般水産加工場や、土産品の副業的工場等々……

是等は何れも鐵道開通直後の差當つての事業で是等に要する人員も相當の多數に上る事では有らう

(ハ) 特殊教育

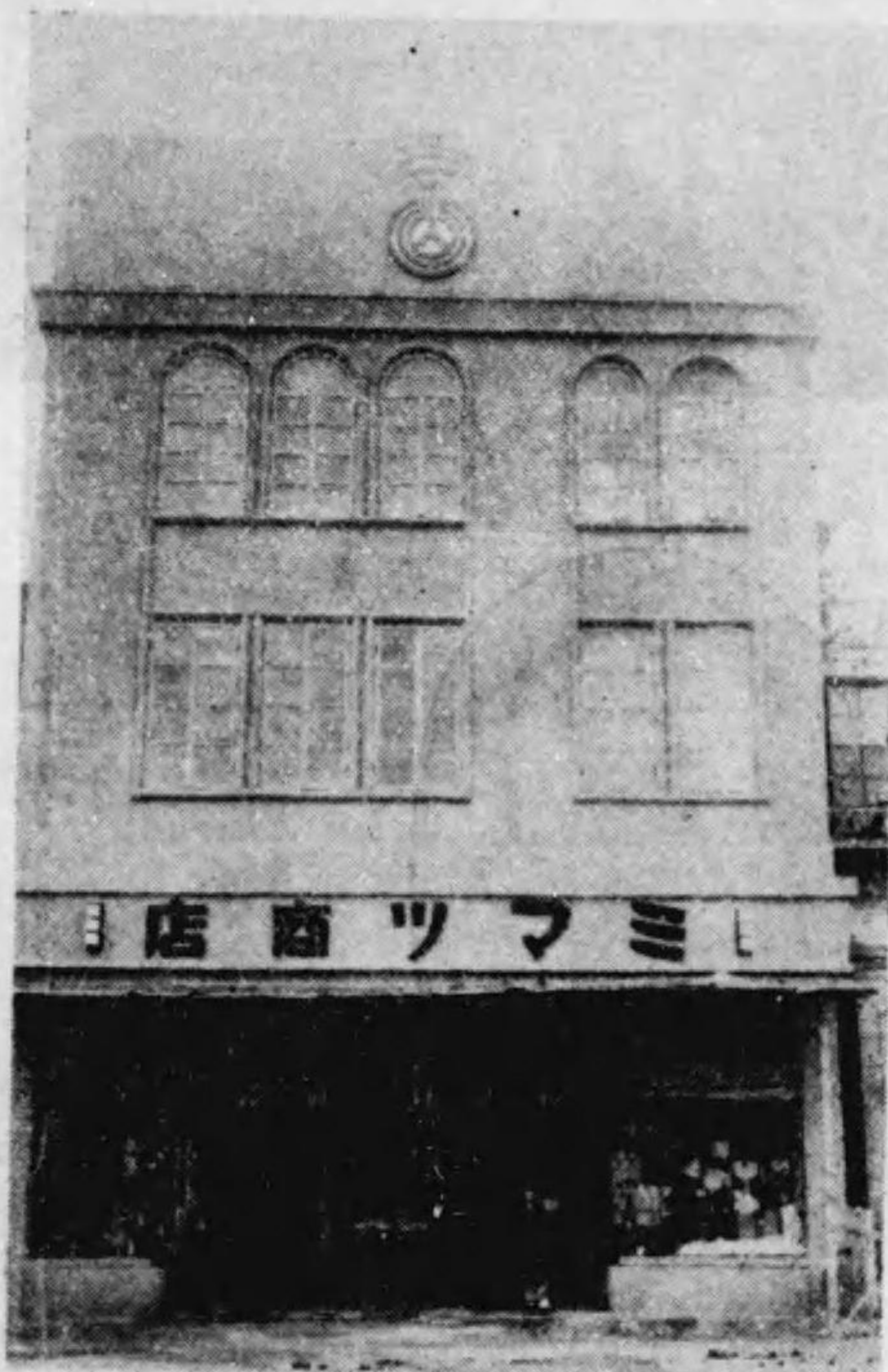
(一) 青年訓練所

宮古と楸ヶ崎とに夫々青年訓練所があつて所定の訓育をやつてゐる事は勿論で、主事二名、指導員十三名、訓練生百四五十名である。

(二) 六原青年道場分場海洋道場

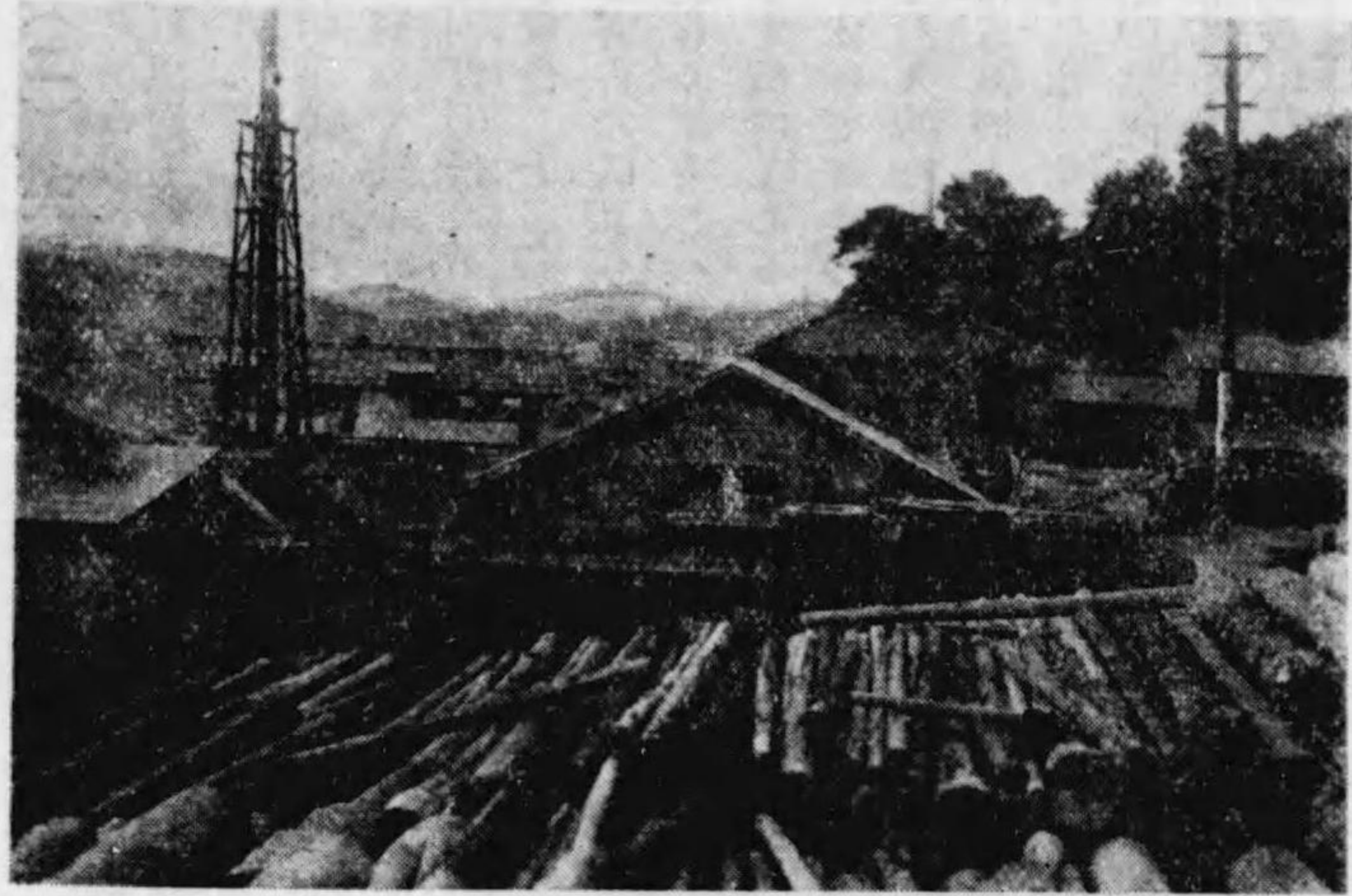
石黒岩手縣知事は赴任以來岩手の更生は青年岩手の建設にありとの信條で縣立六原青年道場を昭和七年九月二日建立したが、更に沿岸更生のため分場として海洋道場を岩手縣立水産學校内に置き、天與の富源海洋開拓に不撓不屈の信念と實力ある青年の養成に乗り出すことになり、昭和八年八月十八日初めて三十一名の青年を收容し初めたのであつた。爾來數回の男女修練生を出し、本年は非常時兒童訓育の任にある郡下小學校長二十二名をも收容し宮古丸により龜井校長親しく便乗して海洋訓練まで行つてゐる。

本縣では此の海洋道場を恒久的施設にするために五萬圓を投じ水産學校内に水産物製造工場其の他の施設を大規模に計畫し其の工將に竣工せんとする現狀である、本道場



店商ツマミ  
式新最建階三り取陣に角町本きべ云もと角座原の古宮  
に階二し業營を品洋の用供子人輪御方殿で店なトーマス  
るあもけの室憩休は





染谷製材工場

が宮古町に存在することは正に宮古町の大きな誇りの一つである。

五八

### 水産物検査機関



岩手縣立水産學校校長 龜井 一 氏

水産物の

検査機関は

水産物の製

品統一、品

質向上を計

る爲に、下

閉伊水産會

があつて郡内の水産加工品の検査を行つてゐる、本部は宮古町にあり山田町に出張所がある。

水産會長堀田熊次郎氏、同氏の下に主事石原善五郎氏、事務天坂幸三、伊々木宣行、阿部儀兵衛の諸氏、検査員山本安兵衛、藤田稔平、工藤孝二郎、北館幸一郎の諸氏で山田出張所には主事細川梅吉氏の下に

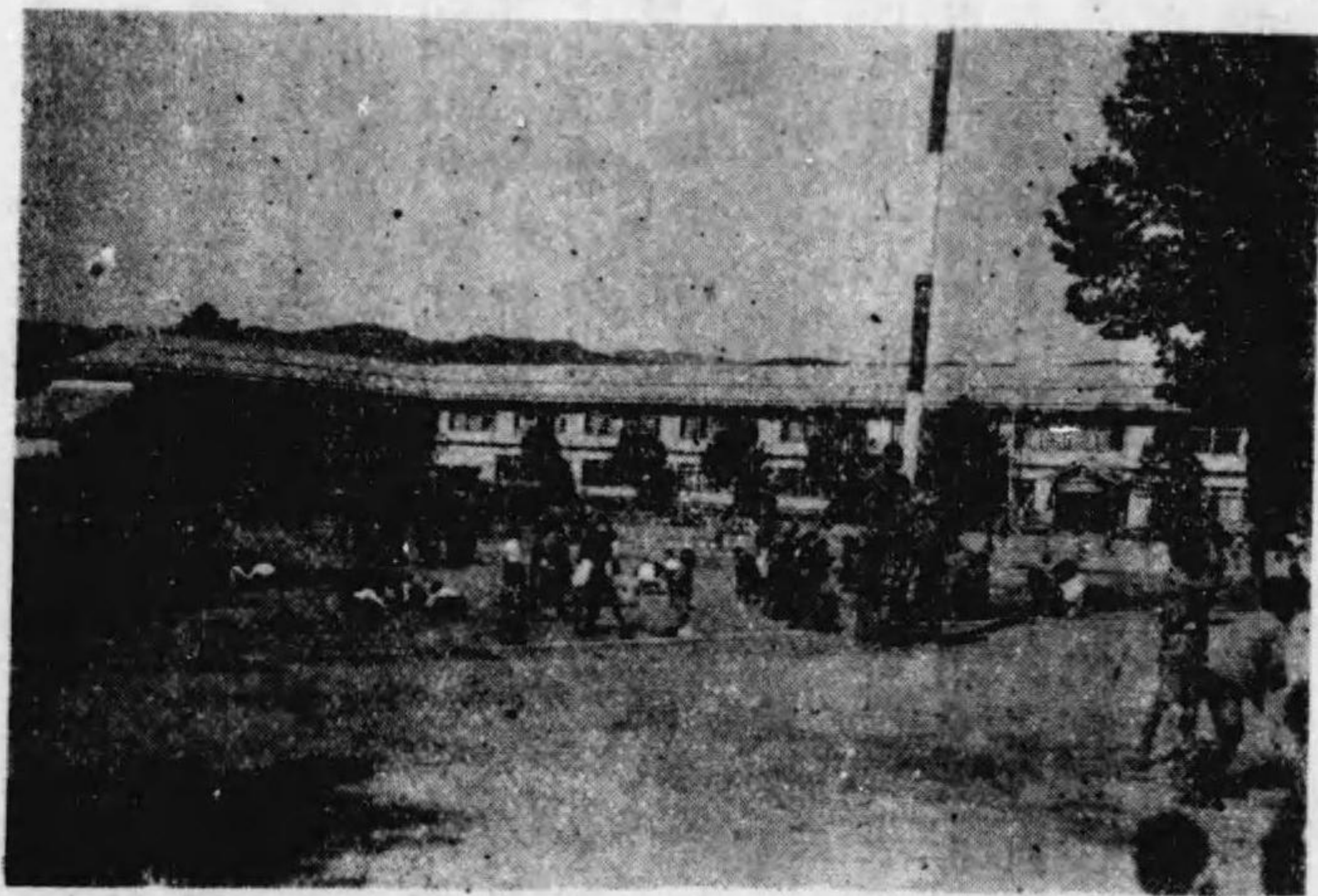
検査員阿部榮一、竹内明治郎、佐々木三枝、佐藤源之助の諸氏が駐在し夫々製品の改善に鋭意精勵してゐる。

### 宮古漁業組名

#### 沿革概要

明治卅四年漁業法が發布されてから前の住民團體を解散し新たに同三十五年十月十六日創立許可、同二十七日閉伊川鮭留地曳網漁場免許、同三十六年八月廿六日追切一丁目より五丁目まで共有漁場免許、同三十九年十二月創立當時の理事三名を五名に變更認可、同四十一年十一月初めて總代會を設け總代員數三十一名、同四十五年三月十三日鰯地曳網漁場免許、昭和四年總代員二十二名に變更認可、同七年十六名に變更認可されたもので現在宮古區一圓を地區とし組合員數專業者二百五十一名を擁してゐる。

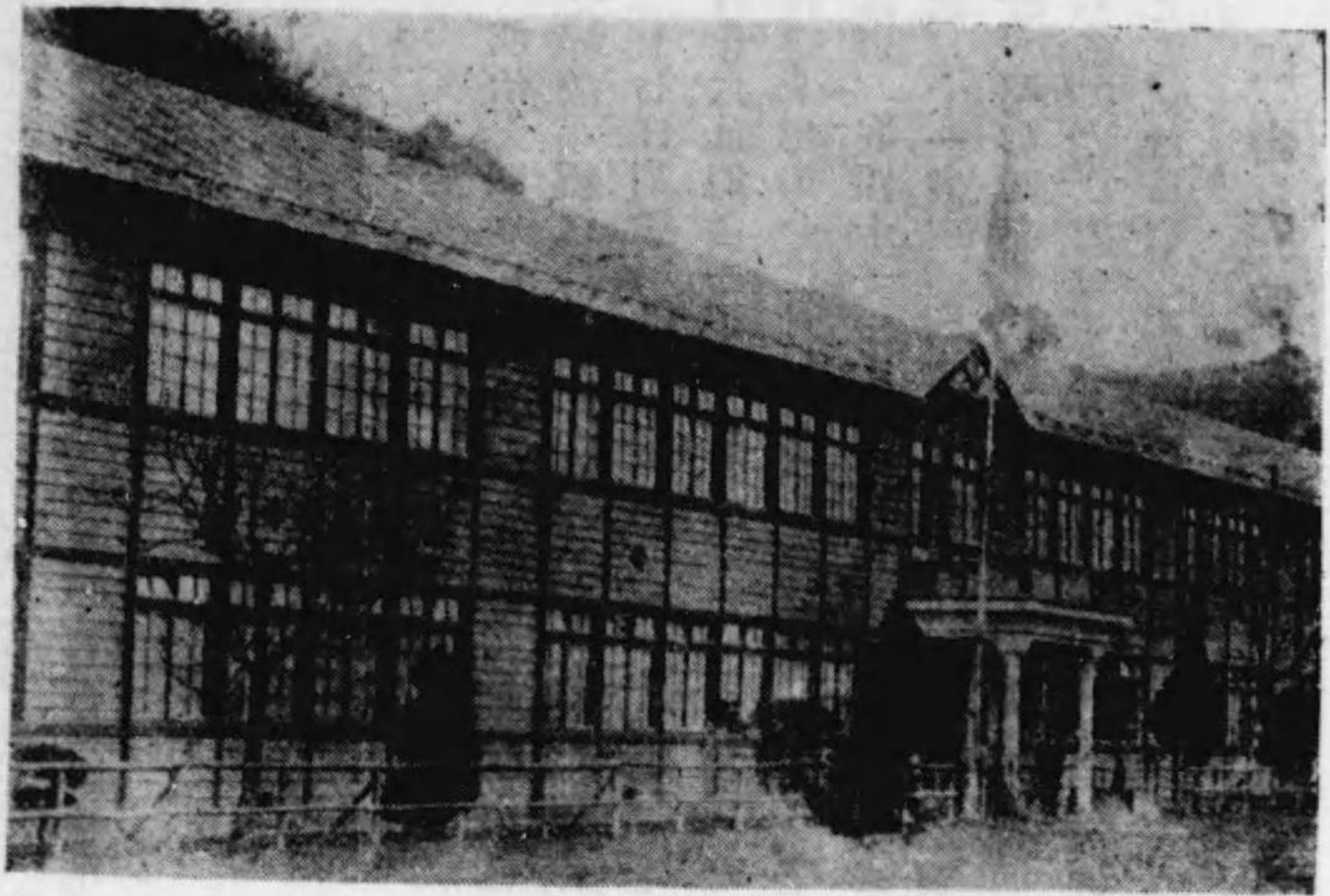
#### 組合の機關



宮古小學校

五九





イ、役員

〔組合長〕菊池長右衛門、同〔會計〕山内仁右衛門  
同横山金兵工、同吉田儀七、同島香宗平、〔監事〕菊  
池金次郎、同松田純一郎

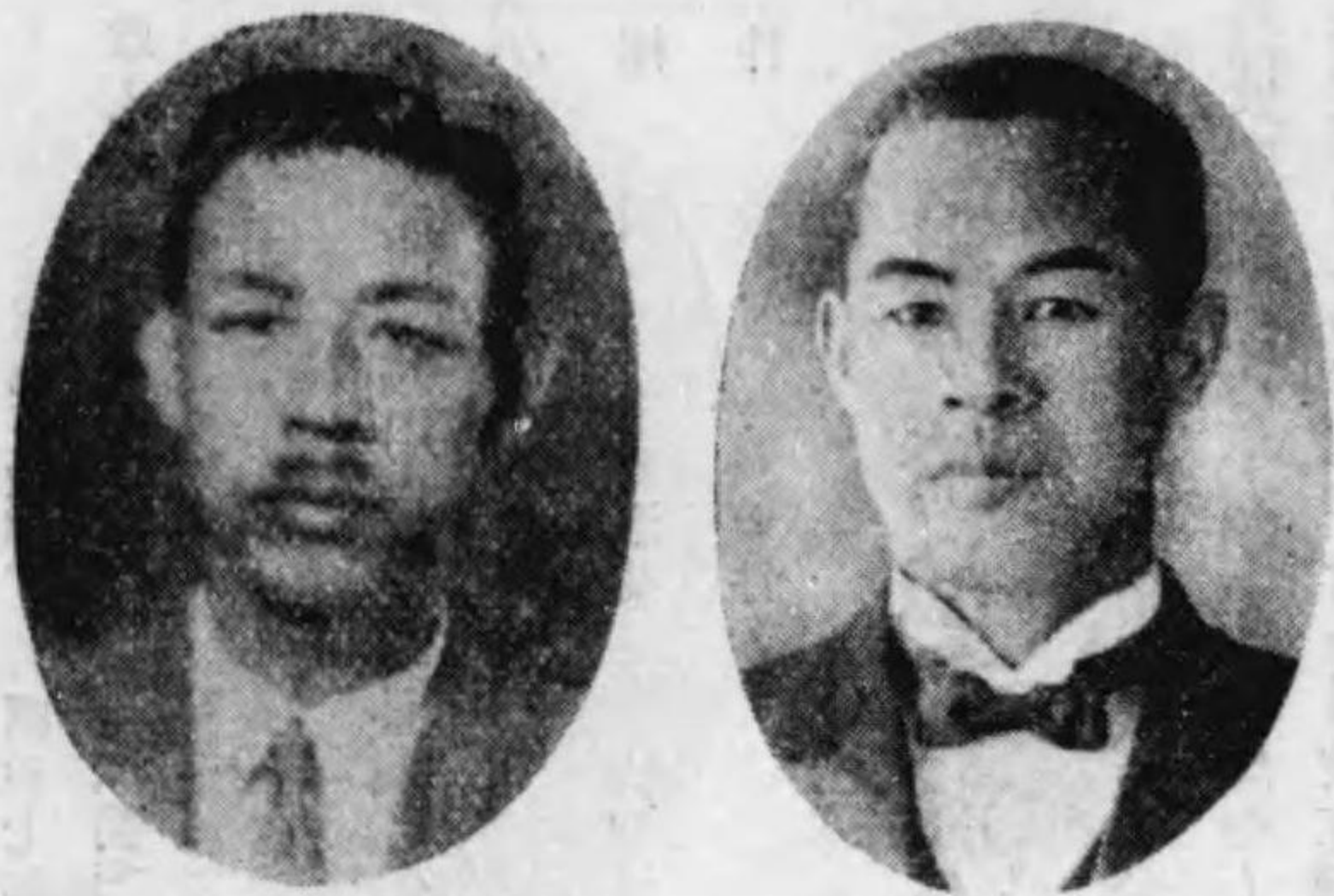
ロ、總代員

山内貞助、坂下留吉、徳江安太郎、佐々木泰助、  
大井佐太郎、三浦竹次郎、金澤重太郎、小笠原孝三  
坂下惣右衛門、横山仁助、太田猪助、大井喜治、高  
濱豊吉、蛇口嘉郎、鳥居文平（一名缺員）

ハ、職員

〔總務部書記〕小川直治、〔書記〕山崎權三、〔鮭鱒  
人口孵化場技手〕北山一五郎、〔共同購買事業書記〕  
山内誠一、〔共同販賣事業主事〕太田長三、〔書記〕水  
上忠太郎、同金澤仁三郎、同坂下直次郎、同竹野徳  
衛、同篠亮〔漁業資金貸付其他の事業兼務〕小川直  
治、同山崎權三

組合の事業



下閉伊水産會主事 石原善五郎氏  
下閉伊支應技手 三浦油等氏

事業は多岐に亘り（イ）鮭鱒人口孵化事業のため宮古町宮古小澤に孵化場を設備し同魚族の蕃殖保  
護を行つてゐる、毎年の孵化放流稚魚數七、八十萬尾に達してゐる、（ロ）共同購買事業のため資本金  
二萬圓（特別會計）で日用必需品又は漁業上の必要物資の購買配給をやつてゐるが、昨年の如きは白  
米千二百四十石を配給してゐる、（ハ）共同販賣事業は本組合事業中最も有力な事業で資本金五萬圓

（特別會計）で組合員及其他の漁獲物の共同販賣であるが、昭  
和三年四月島香前組合長之れを創立し現小川書記良く協力之  
を完成せるもので爾來今日の隆昌を來たし、八年度の如きは  
八十四萬余圓を取扱ひ、宮古港繁榮のパロメーターたるに至  
つたもので、其の間販賣所主事として太田長三氏の直接經營  
苦心又特筆に値するものがある。其他の事業として（ニ）漁  
業資金貸付（ホ）水産業復舊（ヘ）遭難救恤（ト）共濟（チ）獎  
勵（リ）常夜燈の諸事業を行つてゐる。

本組合收入

本組合の收入は漁業權貸付料、貸地、貸家料、事業純收入  
金及雜收入である。  
最近三ヶ年間の收入金



昭和六年度 昭和七年度 昭和八年度  
 収入金 三五、七五、八四 二四、五七、七三 三三、五六、五〇

漁業權

専用二件、共用六件の漁業權を有し種類別にせば次の如くである。

種類	定置漁業	特別漁業	地先水面 専用漁業
件数	六件	一件	一件

銚ヶ崎漁業組合

同組合は明治三十五年漁業法公布に基き、専用及其他の漁業權を享有し組合員をして安全に漁業を営ましむるため、同年十一月設立認可を得たものであるが、組合役員は創立當時は理事三名監事二名であつたが、明治四十三年十月に理事五名に増員され明治四十四年總代会を設け組合地區を五選舉區とし、定員を二十名とし、同年四月施行の漁業組合法によ



岩手縣立水産學校と海濱道場

つて(一)共同販賣(二)共同購買(三)漁業資金貸付の諸事業を行ひ(一)遭難救恤(二)漁業獎勵(三)奨學の諸事業を實行し大正六年四月より組合共同販賣所を設置した、現在享有の漁業權は専用漁業二、定置漁業五、特別漁業一の八個で、所屬組合員は五百四人、組合員所有の漁船は約サツバ三百隻、發動機船二十六隻である。昭和九年七月改選の組合幹部は次の様になつておる。組合事業共同販賣所賣上高は昨年度約三十五萬圓に達してゐる。

〔理事組合長〕大越作右工門、〔理事〕北館三四郎、同太田榮藏、同鈴木定藏、同進藤一、〔監事〕大須賀熊之助、同瀬浪若太郎

總代員



下閉伊郡  
水産會長

堀田

熊次郎氏  
 明治十六年二月二十八日生

大正七年縣立水産學校教諭を勇退し堀田水産研究所にありて此處に没頭すること多年、其の實際的で、而も卓越せる識見は殆んど水産界の羅針盤の如き觀がある。多年下閉伊郡水産會々長を勤め、水産會の今日あるは氏の盡力に負ふ所甚大なるものがある。

岩手縣水産會副會長、大日本水産會評議員、宮古小學校教育獎勵會長、宮古灣遠洋漁業協會顧問、岩手森林會議員等の重職にある以外、私財を投じて公私の爲に盡瘁の功枚舉に遑あらず、資性濃厚眞に典型的郷土の好紳士である。



高崎松五郎、山本與助、鈴木彌五郎、高田榮次郎、中澤若藏、平山源三郎、館洞榮次郎、佐々木榮次郎、山根三郎、佐々木福太郎、山林榮太郎、阿部仲太郎、中田鐵之助、山根重吉、山崎七太郎、上田福右工門、村上圓吉、小木喜三郎、佐々木仁兵衛、野澤寅松

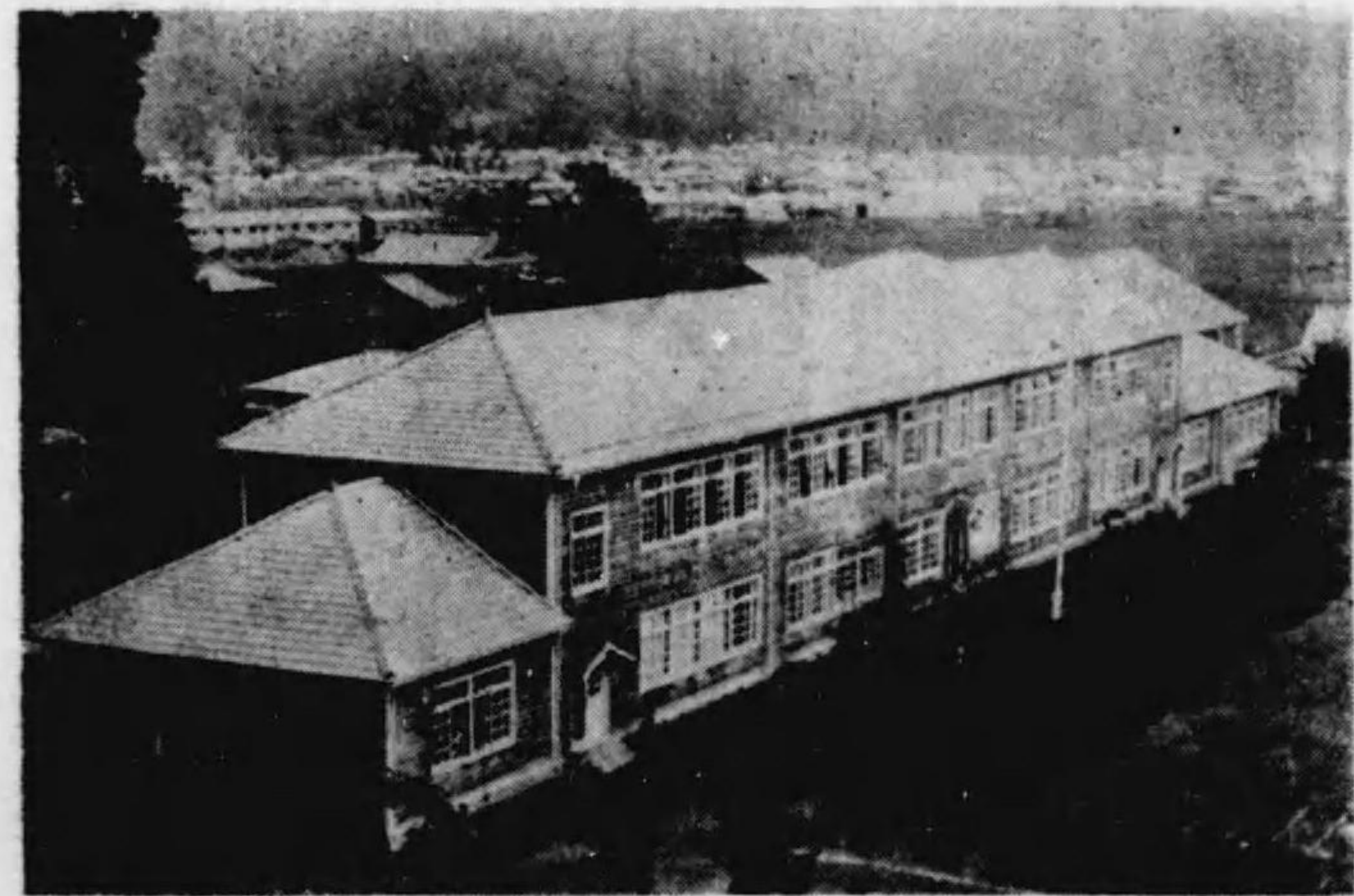
職員

乳井清勝、植村太郎、淺沼貞男、鳥居友司、高崎直勇、加藤米次郎、鈴木嘉三、信夫芳郎、金澤秀雄、島山善三郎、武田龜五郎

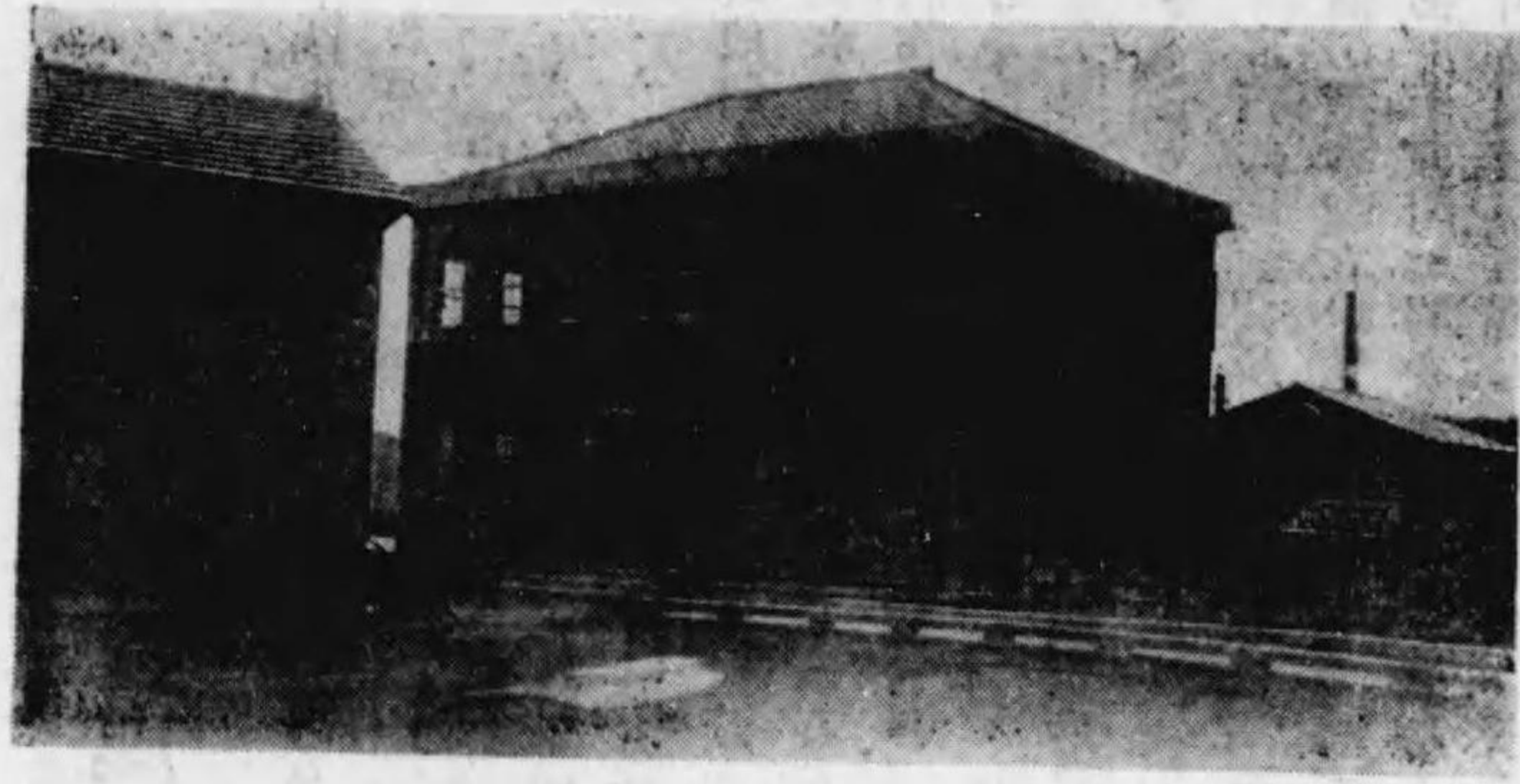
現在事務所兼共同販賣所は昭和七年四月三十日落成、總二階四百四坪余の大建築で二階には大ホールを擁し數百人を收容することが出来る。

崎山浦漁業組合

本組合地區崎山村は元崎山、崎嶽ヶ崎二ヶ村であ



岩手縣立宮古高等女學校



宮古漁業組合事務所

つたが、明治維新に至り二村合併して崎山村となつた、漁業者團體(住民組合と稱した)も元村單位であつたが、明治卅五年八月二十四日全村一圓とし百壹名の組合員を以て漁業組合を組織し同年十月二十七日縣知事の許可を受け設置したものであるが、爾來圓滿に發達し今日に及んでゐる。殊に崎山村長たりし千崎熊太郎氏は衆望によつて昭和二年組合長に就任し一層良く組合員の統制を計り昭和七年度には隣町宮古町嶽ヶ崎區内海岸に面し共同販賣所を設け、組合員漁獲物の販賣漁業物資の購買等を経営し組合員の福利増進に努力してゐる。現在組合員數は百七十一名あり組合幹部は次の如くである  
役員、〔理事〕組合長千崎熊太郎、〔理事〕前川孫太郎、同佐々木春吉、〔監事〕佐々木熊太郎、〔總代員〕山崎七郎、佐々木初太郎、前川福吉、島山榮八、佐々木伊勢藏、佐々木吉太郎、前川丑太郎、山下辰次郎、佐々木福三、田代深松〔職員〕事務所書記千崎酉松、共同販賣所書記佐々木重太郎  
組合所有の漁業權は定置漁業として夏場所、日出島、中細、秋場所として乙井戸尻、鴨島、姉ヶ崎沖、中、岸の三漁場等あり。



## 漁獲物の販賣處理

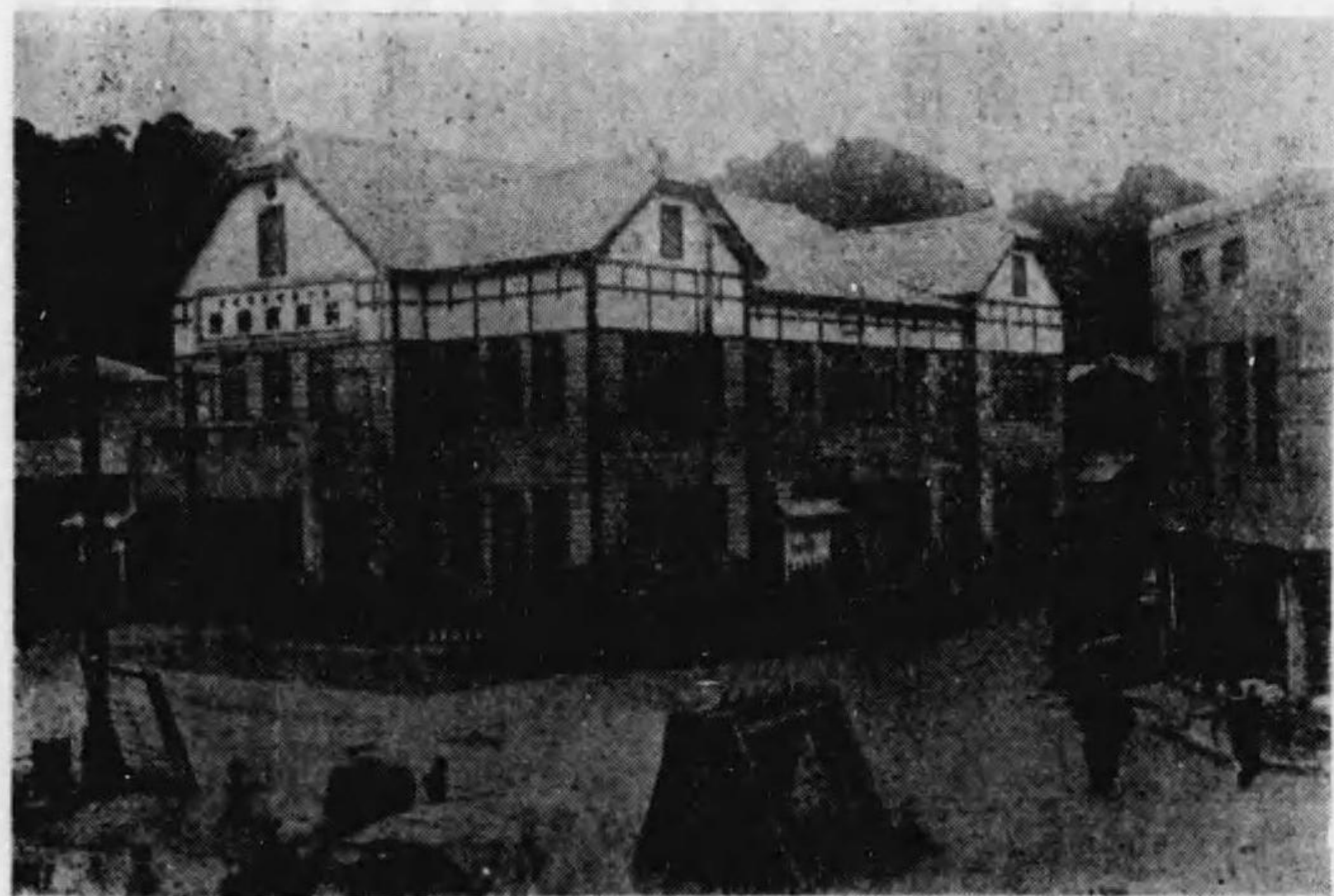
宮古港漁獲物販賣機關は次の様な機關が設けられてゐる。

- 一、宮古共同販賣所 (宮古漁業組合共同施設)
  - 一、嶽ヶ崎共同販賣所 (嶽ヶ崎漁業組合共同施設)
  - 一、崎山共同販賣所 (崎山浦漁業組合共同施設)
- 其他個人委託販賣店及廻船問屋若干。

水産加工品處理を主としてゐるものに保証責任宮古物産倉庫があつて干錫、鰯、粕、魚油並に繩、筵等を取扱つてゐる。

今販賣の様を宮古共同販賣所に例を採つて説明することにする。

宮古共同販賣所は今年の春に築地通りから嶽ヶ崎浦の築港埋立岸壁に地をトシ臨時ではあるが、其建物三十五間七間を建て直ぐに隣接して泉製氷部や日用品問屋が出張してゐる。組合員漁獲物の外、廻來



嶽ヶ崎漁業組合事務所

船漁獲物も取扱ふ、宮古港を根據に三陸沖合の漁場に出漁する大分、高知、三重、愛知、静岡、千葉諸縣からの漁船数は近年益々多數に上り、其の漁獲物の殆んど全部は此處に出荷され、所屬の仲買人に入札制度で敏速安全に取引され、仲買人に移つた鮮魚は、或は全國的に最も信用ある冷蔵船に移されて京阪地方に移出され、或は氷詰の上トラックで内陸方面に向けられる、取扱手数料に就て規定によれば

「組合員漁獲物は百分の三以内、以外の漁業者の漁獲物は百分の七以内、但し廻船宿の紹介により販賣をなしたるものは賣人より徴收したる手数料の内百分の四以内を組合の收入とし残り百分の三以内を當該廻船宿に交附す。」



宮古漁業組合長

菊地長右工門氏

明治三十四年一月十六日生

地方切つての富豪菊地の曹子に生れ資性豪邁多くを語らざれど良く衆を統制す。

先年推されて宮古漁業組合長となる、又郡下各漁業組合理事會長となつて昨年三月大震災後の復舊事業に献身的の努力を拂ひ金壹千圓を送られ其の功を表彰せらるゝ等公私の美譽枚舉に違あらず。蓋し宮古町の將來に巨大な足跡を印すべき一人である。

現に沿岸定置漁業三ヶ統を經營し水産製造業を營み、宮古合同運送會社、盛宮自動車株式會社々長、所得税調査委員である。









崎山浦漁業組合長

千崎

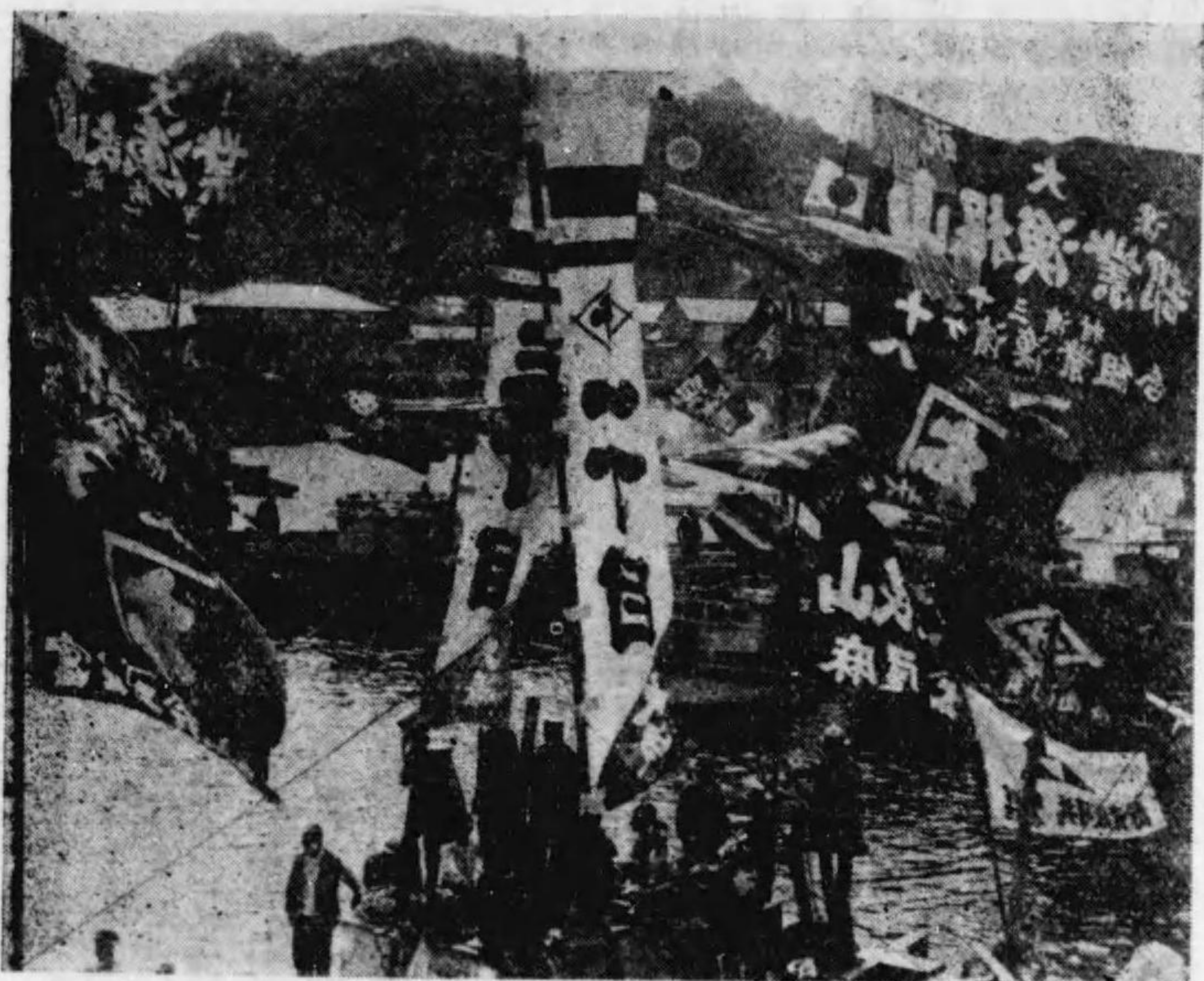
熊太郎氏

明治廿九年一月廿四日生

大正十四年崎山村長に就任以來今日に至る千崎村長の村治績は、今更喋々を要せず、模範村を形成して村民の信望は彌が上にも厚く、昭和二年崎山浦漁業組合長に就任し、其の共同販賣所を嶽ヶ崎浦に設けて、魚貝海藻業の發展に寄與すること頗る甚大、一方村農會長として又産業組合長として、此等の方面にも其の餘力を盡くし行く處として可ならざるは無く、人格圓滿、識見卓絶、稀れに見る好紳士で亦代表的名望家である。

### 港大杉神社（驛より東約十丁）

漁港宮古町の祭りとして最も相應しいものは「あんば祭」である。今より百七十八年前當港と銚子平潟方面との船舶の交通頻繁なりし頃嶽ヶ崎藤井儀平の先代が銚子（或は鹿島とも云ふ）の「あんば」様を勧請し、鏡岩砲台の下に石のお堂を建て兩町の漁業家等と共に漁神様として崇拜したのが其の始りである。祭典は其頃洞船の積立金を以て行ひ藤井家及大井家（藤原石崎）は代るく祭祀の世話役を擔當した後兩町の五十集連中之を引き受け各戸交替に世話役をすること、なつた之を「ねぎうち」（彌宜屋か）と稱し其の年の祭りの家元となり御神體を納めた小さなお堂を其家に移し祭祀萬端の別當



港大杉神社祭典



宮古共同販賣所主事 太田長三氏

役を勤め又一般の信仰者にも拜ましめ酒肴を調へて饗應する慣例であつた、當社の御祭神は常陸坊海藏（お姿は白狐に乗つた天狗）て其の御神體として大杉又は網の「あば」を祭つたものと云ふ、其の御神璽を授けた日が恰も盆の十六日であつたので其の翌日急にお祭りをすることとなり漁師や五十集の若衆連中が赤い頭巾や青い手拭を被つて無禮講式に踊つたのが抑も此の夜祭りの發端である。明治十二、三年頃の鮪大漁の時宮古浦建網



宮古漁業組合  
書記長 小川直治氏



氏は本郡花輪村の産、縣立水産學校卒業後、同村役場、小學校、母校及試験場に勤務し、宮古操帆界にも進出した。宮古物産市場の創立に参劃し取締役兼支配人となる。昭和二年現組合に入り共同販賣事業其の他事業の創設、鮑、鰯の前後策、三陸震嘯災復舊等に幾多の功績を顯はした。

氏は是々非々主義は、徹底的で事に當つて斷行力あり、宮古漁業組合の今日ある蓋し理事者を援助した氏の努力の半面を看過する事は出来ぬ。

の旦那等醜金して京都より神輿を下し始めて街々を渡御することになった。昔よりあつた「あんば踊」は京都祇園祭の踊に範を取り之を地方化したもので祭日には今の支廳の前に集合して一々代官の觀覽に供したものだと言ふ。

「ヘチヤン

宮古港は 名高い浦よ

網をおろせば 黄金が湧くよ

釣りをさげれば カケ聲「船揃ひ

聲を張りあげ オヒ唄ひこむ……ウ

(前歌)

港でるときや 笑ひて勇む

福船のり出せや 二階から招く

オーイ船頭さんよてごんせ 戻りに鰹を

釣つてごんせ よらさんせ……い

(裏歌)

此は明治卅年頃の「あんば踊」の唄である。地方的港情緒が躍如として現れてゐる。又其の當時は町印として街々競ふて大きな萬燈を作り踊りと一緒に市内を廻つたが明治三十年頃より漸次廢止された「あんば祭」は此の地方に於て最も賑かな夜祭りて、近郷近在は勿論遠く盛岡邊よりも種々踊りの團體入り込む爲之を見物する男女の雜鬧すること他に其の比を見ない。當社は昭和五年八月舊館より

山根漁業部 山根三右工門氏



明治廿五年四月八日生

淺草觀世音の神圖に「青天上に矢を射るが如し」と當ることあつて外づることなきを知つた氏は茲に定置漁業を志し同志と共に經營自ら其の主範となり三陸沿岸漁業界に雄飛して令名眞に雷の如し、本年經營箇所は秋夏網合して十一ヶ所に達し三陸の名漁場と謳はれた氣仙郡小壁、上閉伊郡釜石沖網及佐須、下閉伊郡宮古三丁目、及同郡黒崎等を初め悉く其の掌中に委せられてゐる。氏は口、手共に八丁、頭腦亦明哲で良く事業のコツを辨へ遺憾なきものがある。本郡津輕石村字赤前に生れ現に津輕石漁業組合の理事所得稅調査委員である。



町會 議員  
三陸汽船宮古支店長

早野民之助氏

元治元年三月廿五日生



三陸沿岸に横暴を逞ふした東京灣汽船會社を驅逐し現三陸汽船會社を興すに當り樽俎の間に折衝良く務めた氏の功勞は余りにも顯著である、鐵ヶ崎海岸通りの埋立に異論を排して致て之れを斷行し今日あるを致したるは全く氏の不朽の功績と云ふべきである。  
昭和八年八月廿五日横濱沖特別大演習觀艦式御親閲の後軍艦高雄にて賜饌の光榮に浴したるは蓋し之等の功によるべきか、現町議の外三陸汽船の宮古支店長である。

今の切り通しの山に移轉した此所は宮古浦を前に控へ兩町を眼下に見、風光頗る宜しい境内には明治三十七八年戰役の忠魂碑がある。又其の前には藩政時代砲台の古砲及宮古灣海戰の際羅賀浦に乗り揚げし徳川方の軍艦高雄の主砲がある。

### 篠原良平の墓 (驛より北西約十五丁)

篠原良平は本名小笠原善平で元山口村村長小笠原喜代助君の二男である。幼年より穎悟にして郷黨の間に自ら異彩を放つてゐた。十六才の時雄志を抱きて仙臺に出て乃木將軍に請ふて其學生となり士官學校を卒業して尉官に進み、日露の役に出征して戰功あり旭川に凱旋して後病魔に犯かされ遂に其

雄志を伸ぶることを得ず郷里山口村に歸りて永眠した。

曾て彼が士官學校時代文豪徳富蘆花氏を青山原宿に訪問し恩人乃木將軍の爲に一編の小説を著作せられんことを懇請した、蘆花氏は善平の死後遙々其の生家を訪ひて墓參をなし後名著「寄生木」を執筆した。其の序文の一節に、

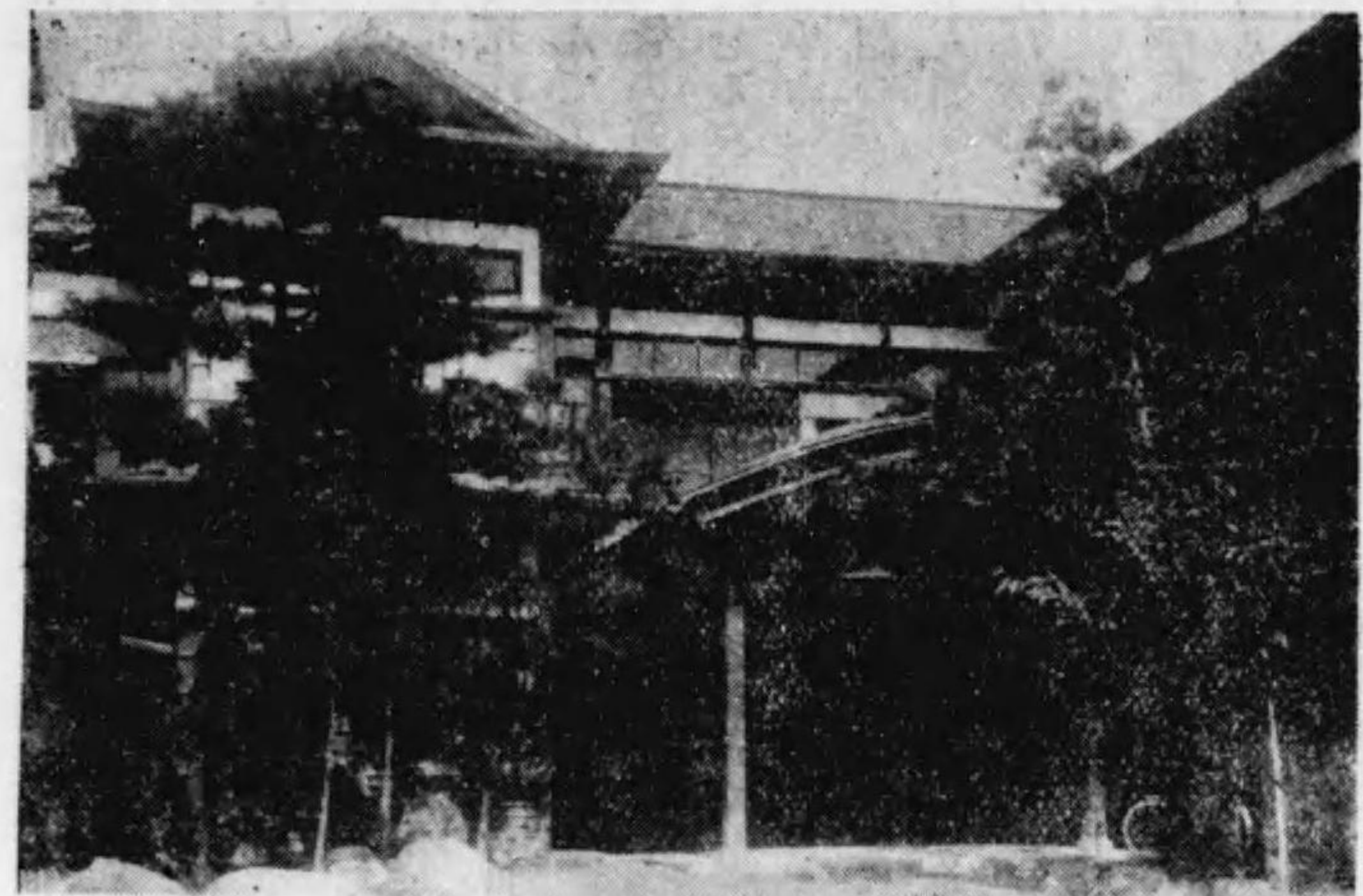
然しながら人は皮相を見エホバは心を知る、篠原良平の生涯は無益であり其の死は無意味であるとは著者は決して想はぬ、彼は生くべく死んだのである彼は死んで恩人に詫び、死んで戀人を恨み、死んで父兄を諫め、死んで「寄生木」を世に遺した彼は情の人琢磨せる詩人であつた。彼は音を好んでよく尺八を吹いた、彼れ其者が一管の笛である、彼の一生其ものが斷續せる哀音である、一篇の寄生木は彼が生命の氣を吹き込んだ長恨の曲であると謂つてゐる、彼の葬禮の日に郷黨男女軍人團等六百參列して心から其の死を惜んだ墓は同村慈眼寺の公葬地にある。墓表の銘は乃木將軍の筆で碑文は當時の下閉伊郡長三鬼鑑太郎氏の書かれたものである、其の全文は左の通りである。

小笠原善平君ハ喜代助君ノ二男ナリ明



篠原良平の墓





熊 安 旅 館

治十四年六月山口村ニ生ル幼ニシテ頓悟學ヲ好ミ居常軍人タランコトヲ期ス年十六奮然郷關ヲ辭シ乃木第二師團長ノ家庭ニ學生タリ日夕將軍ノ高風ニ親炙シ深ク其ノ感化ヲ受ク臺灣臺北ニアリテ英佛語ヲ修メ陸軍中央幼年學校士官學校ヲ卒業シ三十七年三月歩兵少尉ニ任ジ正八位ニ叙セララル時ニ年僅ニ二十四偶々日露戰役ニ際會シ第七師團ニ屬シテ武勇能ク戰ヒ忠實衆ニ超ユ奉天會戰ニ於テ敵彈ニ傷キ後送療養シ恩賜ノ繻帶ヲ拜受ス已ニシテ瘡痍エ復軍務ニ鞅掌シ陸軍歩兵中尉ニ昇任シ從七位ニ叙セラレ三十九年三月旭川歩兵第二十七聯隊ニ凱旋ス功ニ依リ功五級金鷄勳章並ニ年金參百圓及勳六等單光旭日章ヲ賜ル會々二豎ノ犯ス所トナリ軍務ニ堪ヘズ休職加療ニカムト雖藥石効ナク明治四十一年九月二十日溘焉永眠ス時ニ年二十有八君前途有望ノ資ヲ抱キ以テ大ニ爲ス所アランドス然ルニ天之ニ年ヲ假サス豈痛惜ニ勝ユベケンヤ陸軍大將乃木伯爵深ク其死ヲ悼ミ墓表ヲ自書シテ賜フ君餘榮アリ以テ嘆スベキナリ明治四十

二年九月二十日正七位勳七等三鬼鑑識

### 交通・運輸・旅館

鞭牛和尚が閉伊川二十七里の山道を開鑿した宮古陸上交通史上の大思人のことは後段に譲ることとして、徒歩時代…、馬車時代…、軍用自動車時代…から現在の乗合自動車時代に至る其の變遷

土 産 品	主 要 産 物 と 土 産 品
鮭節、干鰯、鱈味淋乾、雲舟鹽辛、烏賊鹽辛、乾海苔、海苔罐詰、乾松藻、松藻罐詰、鮭粕漬、鮭切込鹽辛、刻昆布、若布、いか煎餅、宮古羊羹、三色最中、鯛せんべい、だるませんべい、貝細工、桐下駄	各種鮮魚類(鮭、鱈、鱈、鮎、鰯、鱈、鱈、鰯、鰯、棍木、秋刀魚、目扱其他の磯魚) 鰯、若布、昆布、天草等
	鮭節、干鰯、鹽鮭、鹽鱈、鹽鰯、干鰯、竹輪、蒲鉾、魚肥、魚油
	栗枕木、松材、杉材、木炭、桐材、バット材、松、杉板類、雜木板、桐板、桐下駄材
	桐算笥、家具及各種木工品、雜木ブロック
	牛、馬、繭、松茸、天然水

は宮古の文化史の重要な一面を埋めて居る、最後に鐵道が開けて自動車の活動區域が反比例的に短縮される時機になつたとは言へ、附近町村との自動車道路も追々完成する事であらうから乗合自動車よ



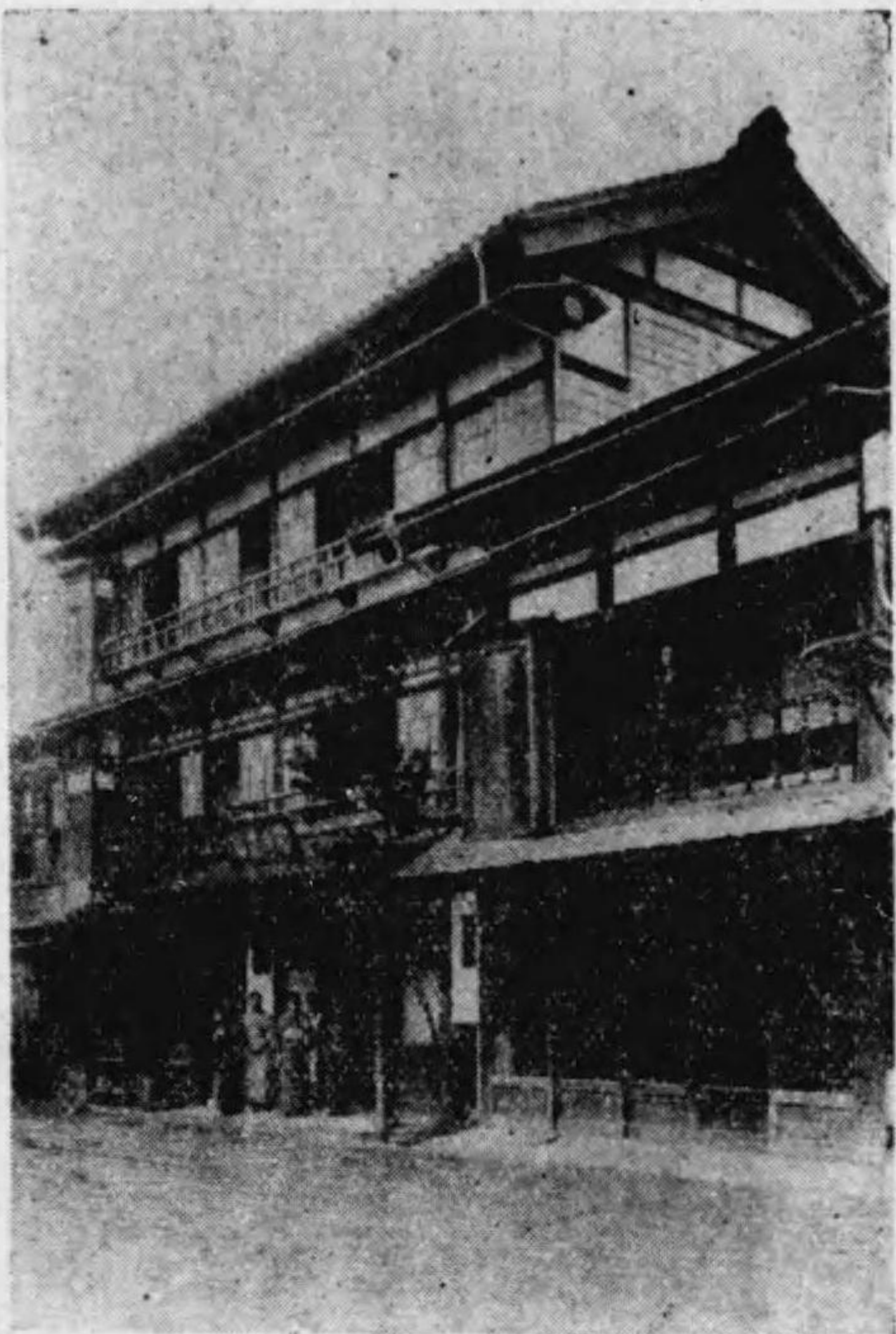
何處に行く！などと氣を揉むのは早計であらう。

現在自動車會社として宮古町に盛宮自動車株式會社（社長菊池長右衛門氏）宮古自動車合資會社（社長松本西吉氏）がある外に刈屋村の刈屋自動車商會（社長小山田舜治氏）と合して聯合事務所を宮古町新町に設け客車十臺を擁し専ら客用に供し閉伊川筋に最も手擴く營業して居事務局長藤島與八氏以下四人の事務員がある。

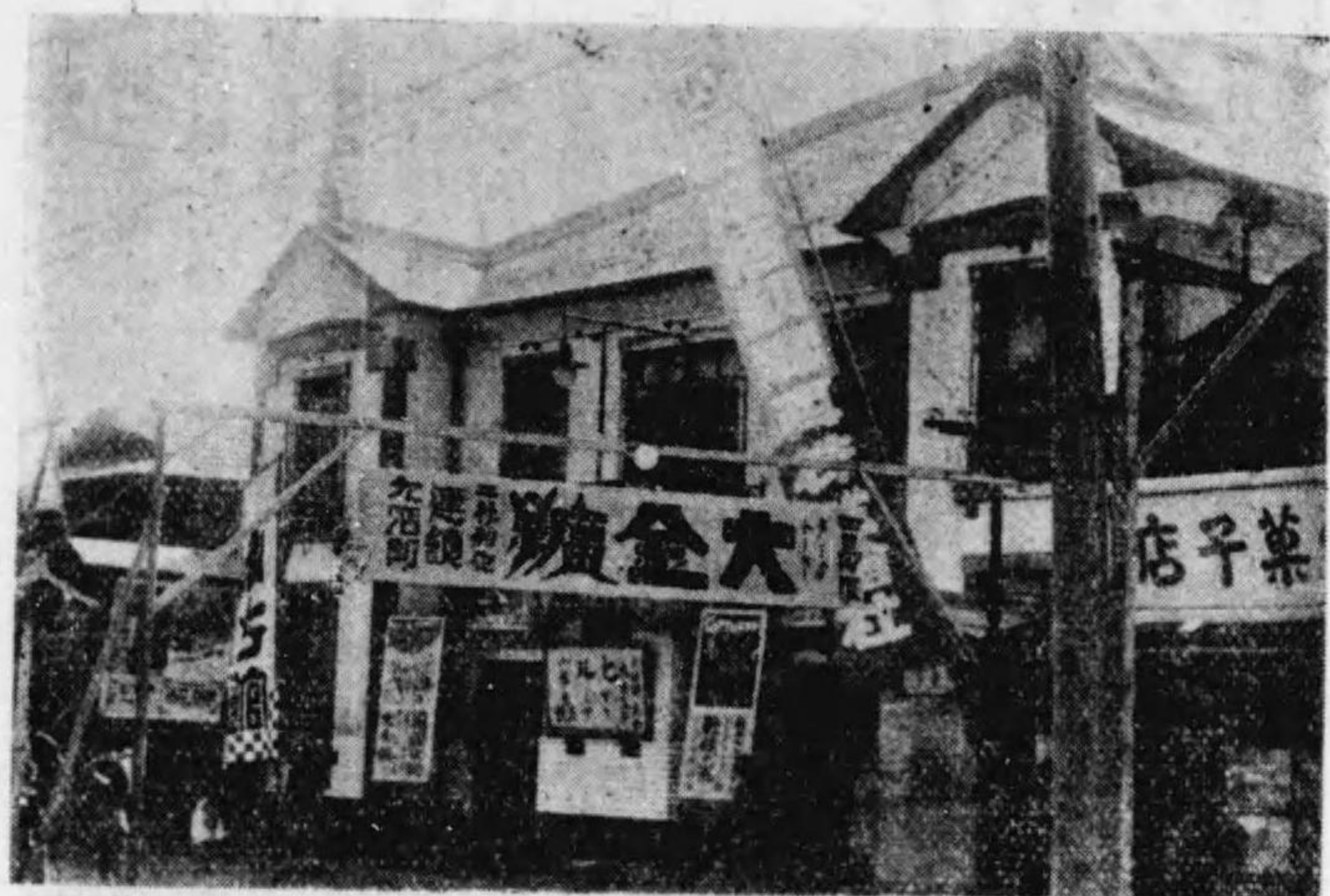
山田町を根據とする山田自動車合資會社、尾半自動車部の兩社は宮古町に取扱店を出し、宮古、山田間の客用に供する外沿岸筋の大槌町、釜石町にまで運轉連絡を行つてゐる。

前川自動車會社は遠野町を根據に宮古、川井、遠野間を運轉し、宮古に其の支店を出してゐる。

市内タクシーは吉田、富士屋、多摩川、宮古、バンザイ各タクシーあり、市外貸切にも應じてゐる。市内乗合には三社聯合の乗合自動車があつて隣村の千徳村、花輪村にまで毎日運轉してゐる。



澤田屋旅館



トラック輸送は盛宮自動車株式會社で六台のトラックで貨物部を設け其他岩手川貨物自動車、佐々充貨物自動車などあつて盛岡、花巻方面の内陸地に鮮魚の輸送をやつてゐる。

運送會社 は篠田米吉氏社長の宮古運輸、菊池長右衛門氏を社長の宮古合同の兩會社の外に高橋運送店とが宮古驛前に各事務所と倉庫を擁し何れも顧客本位に従業してゐる（神戸市に本店を有する運送店の宮古支店設置説がある）

旅館 館 一流旅館として熊安旅館、澤田屋旅館、松本旅館がある、何れも市内目抜き場所に陣取つてサービスも行届いてゐる。次いで昭和館、菊清、茂七屋、若山旅館等あり、鍬ヶ崎浦に面した處では丸福、横阪旅館等がある。又最近名勝地浄土ヶ濱にホテルが新築される計あつて團體旅行者や一般旅客用として特色のあるサービスで經營される筈である

### 娛樂機關と花柳街



一般向な娛樂機關として活動常設館に官古館と第一、第二常盤座がある官古館は日活系で常盤座は松竹系に屬してゐる、常盤座では其の一を以て映畫の合間にはレビューや芝居を上場配合してゐる。

玉突場三軒、今流行の麻雀クラブ一軒、野外運動場の無いのは遺憾だが官古體育協會では切角心配しておるから何れは出来る事であらう。

官古町の花街は大別して歙ヶ崎と官古との二地區に分かれて居る、先づ歙街から調べて見よう。

江戸で吉原南部で官古

宮古まされり歙ヶ崎

それ程盛名を江戸に比較された南部の歙ヶ崎花街、今では其れ程の名聲は無くとも、自然の良港に恵まれてそして民謡大漁節の本場として北海渡航の舟子や命を的に洋上遠く活躍する南海の海上勇士達に歙ヶ崎を知らぬ者はない、絃歌を金波銀波に映じ月山の明月を望むの風情は出雲の美保が關にも比すべきものがあり東海隨一の慰安港である。



八〇

料亭（亭料）對鏡閣

歙街戸籍調べによると大正八、九年の好景氣時代には藝妓七、八十名もあつたが、今ではそれ程ではないがそれでも四十名半玉十二人貸座敷十軒、娼妓四十人を擁し宛然三陸沿岸に潮を唱へてゐる。料亭には旭屋、相馬屋、長岡屋、柳川、松の家、福井亭、開清庵、石川亭等、カフェーには詩々龜支店、石川食堂、寶來家、菊廬家等尚續出せんとしてゐる。



カフエー銀座會館

びる第一歩の前兆として多くの場合さうである様に、料亭が日に増して數を増して行く東京でも郊外が發展する先驅として安料理屋やカフェーが根を張つて盛んに行人を魅惑したものだ、それと同じ様な過程を辿る此附近の花街は歙街とは又別な情趣が漂ふてゐる、薄暮迫つて五色の行燈に灯が付く頃になるとソロ／＼彼方此方のカフェーから彼女達のソプラノがジャズに混つ

八一



て響いて来る、それ程カフェー全盛の街、女給数も八十名を越へると云ふ、何となく新開地らしい気分が漂ふてゐる。料亭には壽々龜、嘉久扇、船越屋、錦水、新屋、多美屋、武藏家、扇屋、カフェーには銀座會館を筆頭に赤玉、キング、新屋食堂、スズラン、青雲閣、金の星、キリン、浦島、エーワン、祇園、洋洋、宮古食堂等がある。

此處に郷土色の豊かな民謡を紹介して粹人の参考にする。

### 大 漁 踊

「宮古浦にはナアアア…」

ヨイトコノセ

宮古キタシヨ浦には名所がござる」

「沖をはるかに沖を遙かに見渡せば

「一丁目、二丁目、三丁目、四丁目、五丁目までも」

「鮪が大漁で鮪が大漁でだんべに積んで

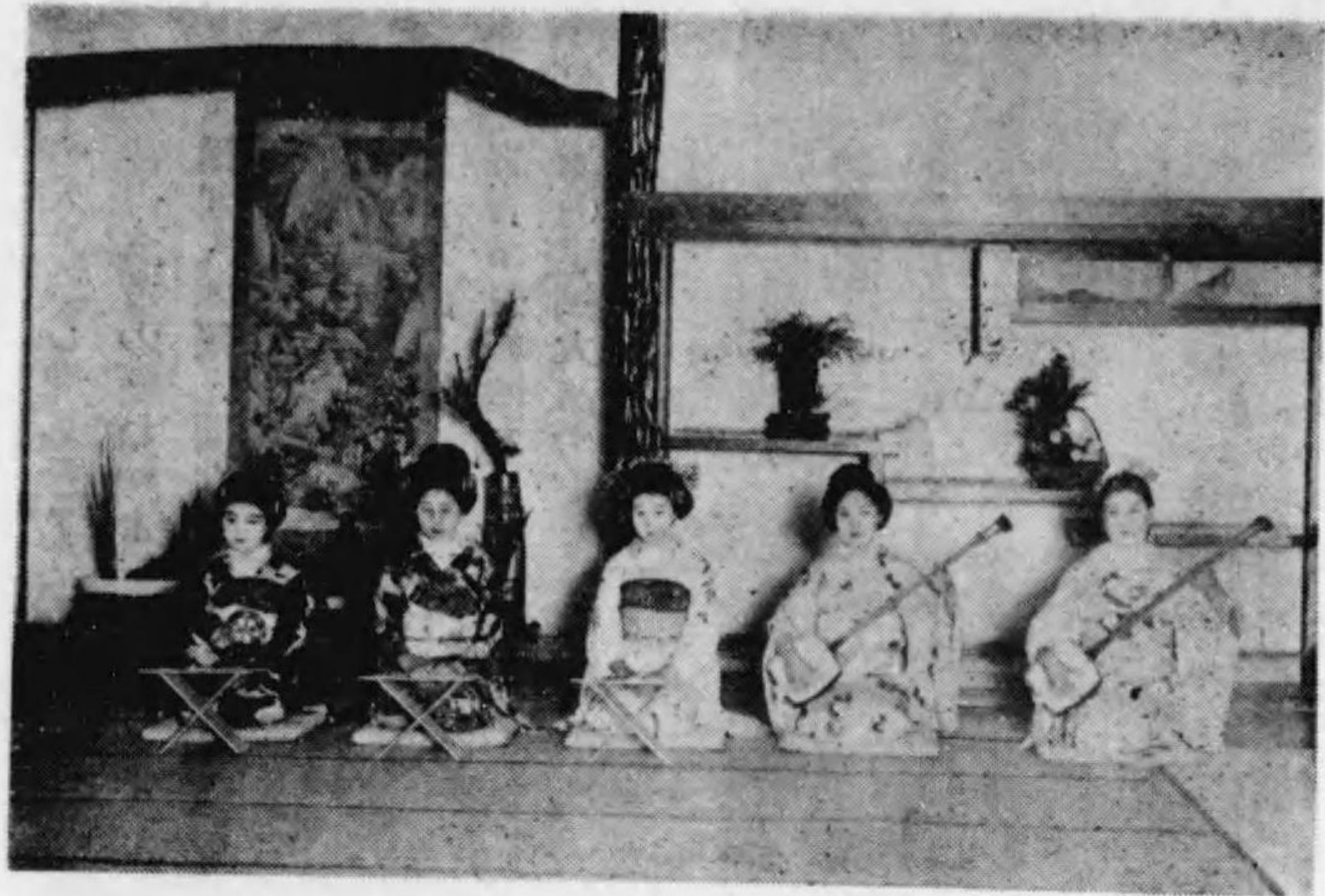
聲を張り上げ聲を張り上げ拍子を揃へ

よいとこらさてよいとこらさて語りこむ



八二

大 漁 踊



間 廣 大 屋 旭 (亭 料)

お祝はエーエーイヨイトコラサ  
ヤーレ繁ければエーエーイヨイトコラサ

御旦那様は七つの蔵を

お建なさる扇の如く末廣く、

團扇の如く末丸く

思ひがけなき大々漁

あまたの商人御祝

まして漁業者なほのこと

### 宮 古 音 頭

一、ハア白い島根に磯馴松そなれまつ

波も静かな浄土濱

ハア海女の小唄に暮れて行く

サテ大漁じや ドツコイナ

ハア宮古濱邊の賑わいよ

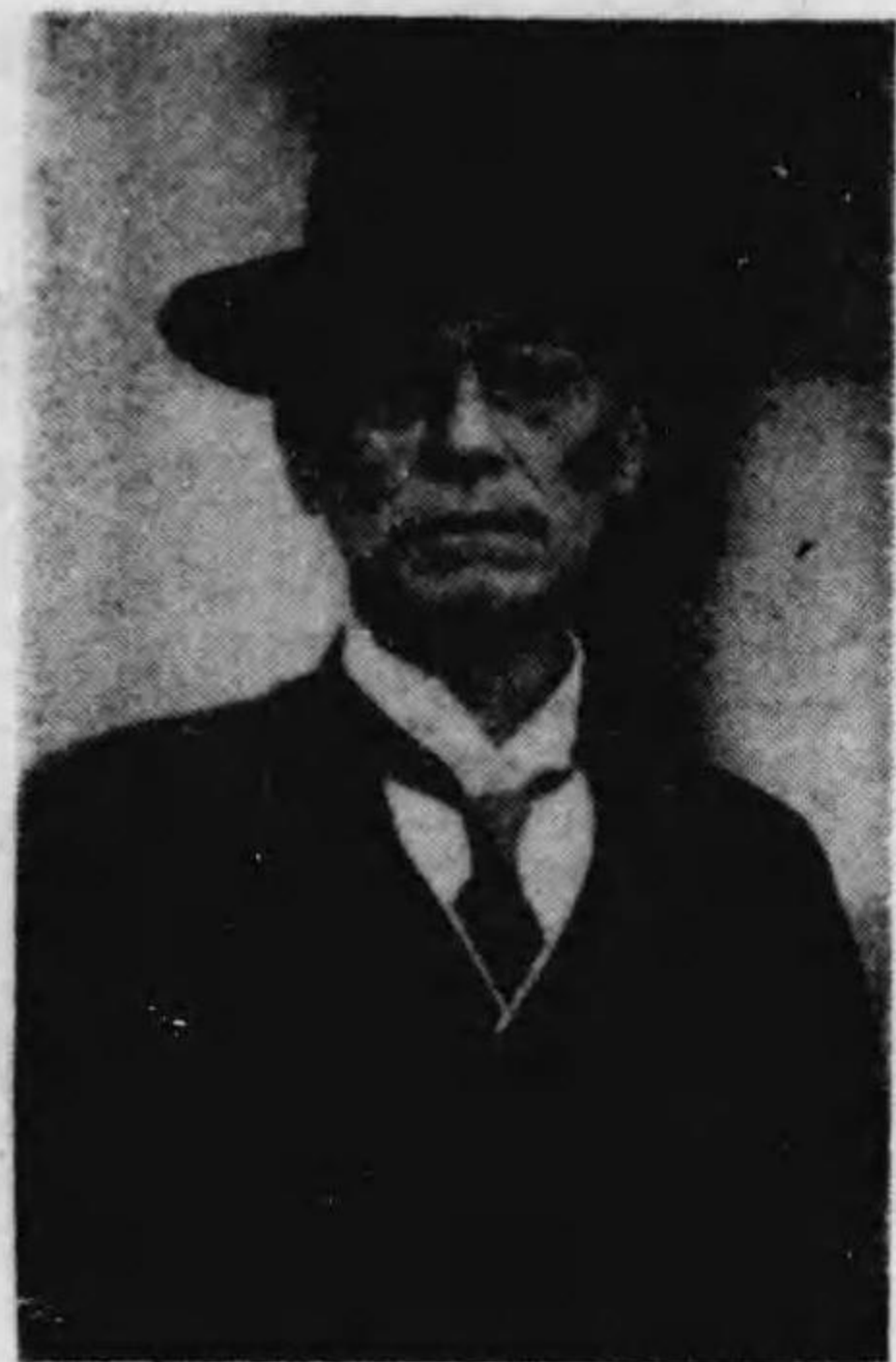
二、ハア沖の日出島山を越す

岩の中から潮を吹く

ハア男波女波の寄せ返し



サテ大漁じや ドッコイナ  
 ハア宮古濱邊の賑わいよ  
 三、ハア出船入船絶え間なく  
 宮古優りの鍬ヶ崎  
 ハア浮かれくゝて夜を明す  
 サテ大漁じや ドッコイナ  
 ハア宮古濱邊の賑わいよ  
 四、ハア浦の建網大漁の  
 上ぐるッライ旗鮪ぼり



前岩手縣立宮古高女校長  
 八重樫七兵衛氏

ハア拍子揃へて歌ひ込む  
 サテ大漁じや ドッコイナ  
 ハア宮古濱邊の賑わいよ  
 五、ハア沖に漁火一面の  
 錫すずめや鰯いわしの満船に  
 ハア笑顔嬉しや妻や子の  
 サテ大漁じや ドッコイナ  
 ハア宮古濱邊の賑わいよ

鍬ヶ崎花街の回顧

切通し下から長岡屋の間が葎が尻て上に辨天様  
 があり測候所山の脚下に「ぼら穴」があつた、小  
 島山の麓が小島の前と呼ばれ、どちらも山脚まで  
 波が打ちつけたものだ、その間大島、小島などの  
 残丘もあつた、水上警察署の邊から築港事務所間  
 はずつと奥の方まで入り込みの前須賀で、その砂

の上が我々の風揚げ場て有り、舟上げ場でもあつた、無論上町通り海岸道はなく、すぐに波に打たれ  
 てゐた、不完全な岩垣の上に縁屋、町川屋など娼樓があり、裏の棧橋に物置が置かれ便所が置かれ赤  
 青、紫等々色とりぐの干物が風に翻がへり、見るからに遊里の氣分漾ひ、北海行の遊子の心をそ  
 り立てたものであつた。

太田玉次郎氏所有の栗拾日記寫本に江戸の人松廼本壽堂と言ふ文人が宮古の俳人文涙を訪ねた其の  
 紀行文の内に

寒さいやまされば綿のものな  
 どととのへ宮古島にいたる、  
 ひと日琴來、其撲、芸々和尚  
 (俳人)等と四、五輩淨土ヶ濱  
 沖の井に遊び  
 「濱蘭や葉のくばりから別の  
 もの」

鍬ヶ崎とて松前へ通ふ舟の港  
 あり此のほとり凡て賣女をお  
 洒落と呼ぶ

とあり此の書は百二十年程前に  
 書きたる本にて尙鍬ヶ崎の處を



洋行



書いた處に

「歟ヶ崎港とて至て舟入よく何舟にても此の  
沖合を過ぐるもの此の間に入らざるものな  
し、故に御領内繁昌の地なり、此の舟一雙  
十五兩づゝのならし  
歟ヶ崎へ散財の  
ある見込のよ  
し、三十  
隻も舟  
入あ  
れ



千代美

小龍

しま子

萬平

芳松

若奴

二三奴



美代千

子勢

ば百六十人の遊女にてふそくの由、歟ヶ崎の町家は三百軒斗り中遊  
女百六十人斗りあるよし、歟ヶ崎沖には鳴物御停止おかまへなき由に

て太鼓、撥の音きこゆるなり、とあり、「以て其の往時盛況の一端を追懐することが出来る。

二三丸



小龍



登喜子照二

恵美子

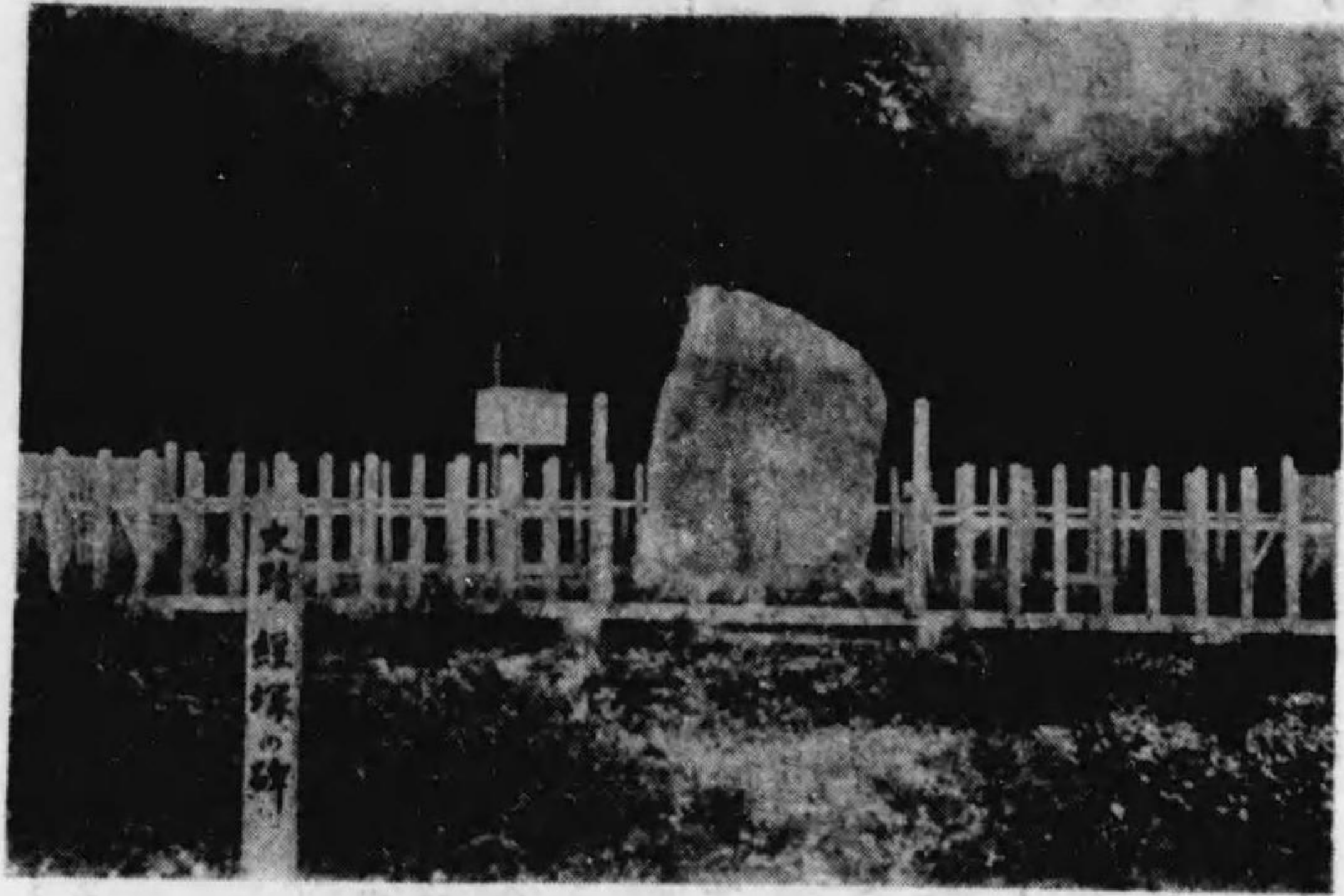


若奴



八七





經塚の碑

經塚の碑 (驛より西約五丁)

碑は宮古町の西方館合に在り、其の周圍十間四方は松田徳次郎氏の寄附する處、柵を廻らしてゐる、元三坪位の塚の上に建てられた碑で高さ八尺五寸巾五尺厚さ一尺五寸の御影石の自然石である。碑面の中央に徑一尺八寸の圓章を刻し其下方に五部大經一字一石雲公成之永和第二の十六字を四字宛々四行に刻んでゐる、古來其書風の卓越せるを以て著明である始め此の碑を天下に紹介せしは菊池五山で嘗て五山が宮古に來遊せし際一見して其風格を慕ひ之を模寫して、其師市河寬齋に贈つた寬齋又大に之を賞てし文化年間其著金石篇に收め且つ

瘞石經銘 南部宮古縣館合村に在り、永和二年雲上人の建つる所にして學寔書大に李北海の風格有り當時を顧るに趙吳興の蹟盛に緇徒の間に行はる蓋し此れ善く學んで上達せるなり。地奥の極北に係り南部治城を距る三百餘里騷人墨客の遊蹤罕に



文治



喜久二



まねぎ和子



千代葉



富葉



町會議員

山善商店主 山崎善四郎氏

明治二十九年四月二十九日生



明敏にして商機に通じ奮闘に次ぐに奮闘を以てする而かも人格圓滿文化的商人とは蓋し氏の如きを云ふべきか、宮古町隨一の中樞地に占據し、木炭、木材業を営み、ガソリンスタンド販賣をなし、又尾半自動車宮古取扱店になつてゐる。  
現に町會議員であり、又大地主として町の發展に並行して多幸な將來を約束せられてゐる。

臻る故に世人未だ之を知らず、池五山の之を採尋するに非ざれば焉んぞ二千里外に現れ親しく赫々の光を觀んや余特に其書を愛し寧一山碑の亞に定座す。

と記してゐる。又杜陵の書豪新渡戸非佛曾て此の書を評し「碑面の一字の如き實に衛夫人の所謂千里陣雲の概ありて趣味津津々として不盡之を漢魏の貞珉に伍せしむるも慚色なきことに候」と謂ひ又其圓章の位置及大さ並に五部大經一石一字の十六文字の配置等其の妙を得碑石全體の形狀に相調和して居る點は一種の藝術品的價値を有するものだと評した。又大正十三年内務省の島田考查官は之を評して曰く此の種の碑は我國最古のもので碑文は眞言宗なれども書は禪宗なり即ち禪宗の僧之を執筆して眞言の僧の建立せしものならんと皇陵研究學者尾上金城氏は曰く「一字一石とは一個の石に經文の文字を一字宛書いたもので、五部の大經とあるから金剛頂經の經文を記したもので之恐らく祈願に類す

るものであらう、一字一石の多くは供養や回向の爲にするのであるが五部の大經と云へば

一、金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大教王經

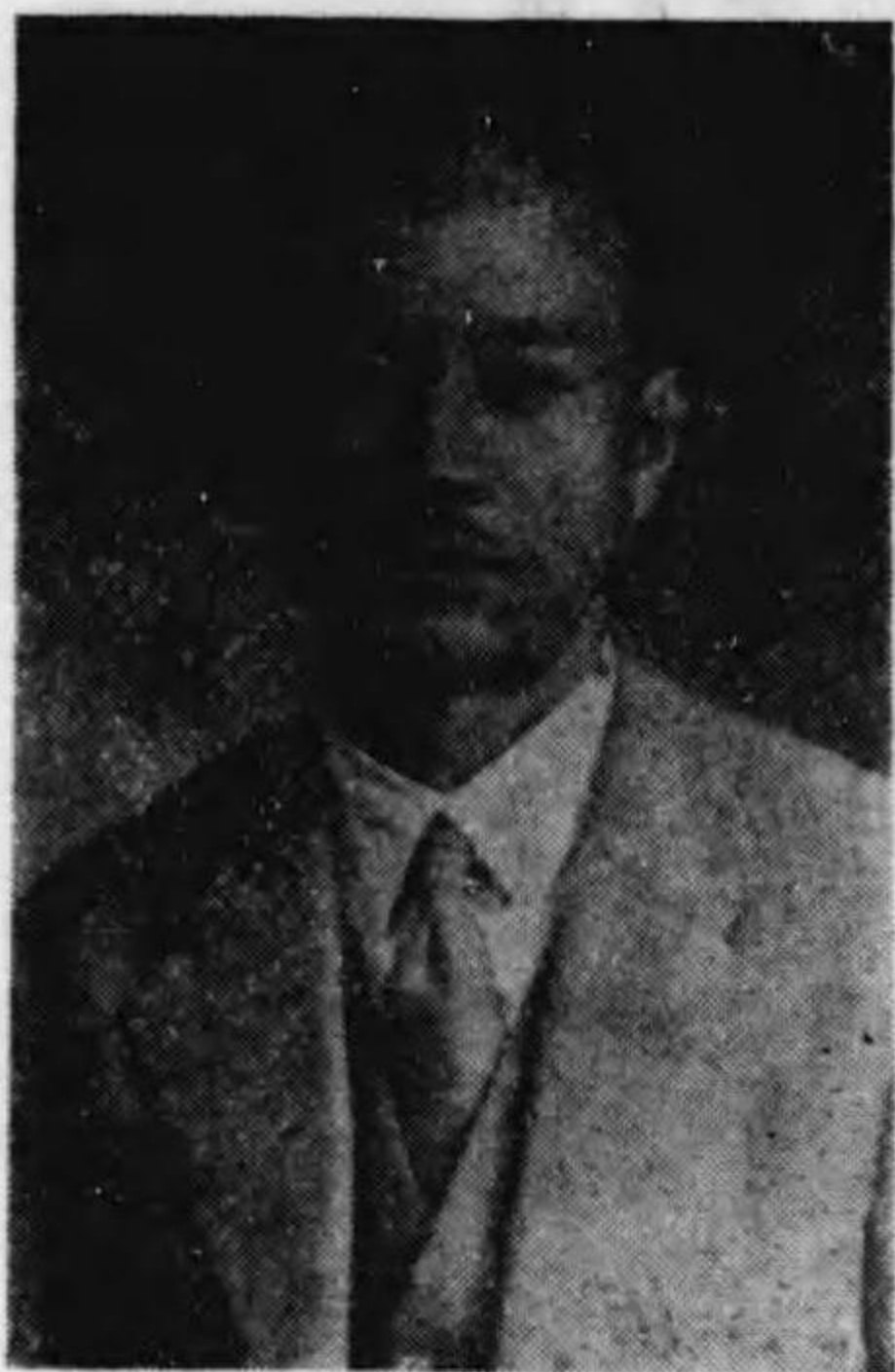
二、大毘盧遮那神變加持經

三、蘇悉地經

四、金剛峰樓閣一切瑜伽祇經

五、大毘盧遮那佛說要略念誦經

以上は即ち五部の大秘經で國家安泰國運隆盛を祈る爲に佛陀の瞑護を求めんとしたもので時の大臣大官若くは僧侶などが萬民の爲に打ち續く戦禍を避くる爲に此の地にて祈願をなした記念とも思はれる此の點から見ても此の地に南北兩朝にゆかりあるものと考へる」と此の碑を建てた雲公に就ては未だ定説がない、或は紀州雲水の僧なりと云ひり雲行と云ふ旅僧來り多年の歲月を経て之を築きたりとも



明治大學講師

商學士 佐々木三勝氏

云ひ、又行脚の僧長根寺に數年逗留して之を建立せりとも稱してゐる山口村の鑄造家中澤家に鑄造の器物を「雲公に献んじ」と録した舊記がある。又雲公は長慶天皇の皇子行悟碑正の事では最近尾上金城氏の説である此の碑は昭和三年十二月縣廳より史蹟名勝記念物として指定せられた。



黑森神社 (驛より北方約二十五丁)

大正十五年十月廿一日官報  
號外を以て長慶天皇を第九十  
八代の皇統に御加列の公布が  
發せられた。然るに天皇晩年  
の御事蹟明ならざる爲今日ま  
て其の確實なる御崩御の場所  
と御陵墓とを發見することを  
得ず其候補地と稱するもの全  
國に亘り數十個所の多數に及  
び今尙眞陵の確定を見ない、  
茲に宮古町町有山中に上古よ  
り鎮座せる黑森神社が、又長



社神森黒

慶天皇の御陵候補地として最近全國的に認めらるゝに至つた

(一) 御祭神及祭日

當社は山口村黒森山の中腹にあり、往古は黒森大權現宮と稱したが明治維新の際黒森神社と改稱し  
明治五年村社となり、同七年岩手縣廳より神璽を勸請した現在の御祭神は建速須佐之雄命大己貴命稻  
田姫命て往古は田村將軍觀音を勸請し又南部六郎八幡を祭ると稱し更に亦是津親王を祭り毎年舊六月  
十四日は其祭日である。當社の縁起に就き次の如き傳説がある。

(二) 縁起及傳説

往古垂仁天皇の第二皇子(或は推古天皇の御弟とも云ふ)是津親王故あつて勅勸を蒙り宮古浦に配流  
せられ田鎖村の皇屋敷(或は磯鶏村の柏木平)に住せられた親王常に鶏を愛養せられ又屢々釣を海濱に  
垂れて憂思を散せられた爾來箇居數年に及ぶも更に販洛の勅許なく悶々の中に空しく、歲月を送られ  
た或る日親王密かに皇屋敷を出てられた侍臣等は怪みて其の御行衛を尋ね千徳村に至つて村人に聞け  
ば其れとおぼしき貴人此處を通られたと云ふ宮古村に來りて之を尋ねれば其の貴人は海の方に下られ  
たと云ふ依て侍臣等は磯鶏の海岸に至りあちらこちらと搜し廻りしに、今の神林の海岸なる砂地に其  
御足跡があつた。(今日此の地を「あしかた」と呼んで居る)親王は曾て釣を垂れ給ひし橋架根島に渡り  
御自ら石を挾にせられ疊岩より海中に投ぜられたのであつた。侍臣及村老等驚きて海上沿岩隅なく搜  
索したが、遂に聖體を發見することが出来なかつた。其時村老の言に従ひ曾て親王が寵愛せられし双  
鶏を船に乗せて再び搜索したるに疊岩の沖合なる根島の附近にて鶏鳴を發した舟人等其海底を探りた  
るに果して尊骸を發見することを得た時に某年六月十四日て御入水の日より七日目てあつた。侍臣及  
村老等痛く悲みつゝ、御尊骸を其の海岸に守り揚げた今其海岸を河岸揚籠と稱してゐる是より御尊骸を



宮古通藤原に移して火葬に附し奉つた藤原比古神社は即ち其御灰所の跡である。後田鎖の皇屋敷の前なる畑地に假宮を造り、此處に靈柩を移し奉り勅詔を待つた廳で使者歸りて、「其の地の最も高き所に葬るべし」との勅命に依り黒森山は四十八谷を有する靈地なるが故に、其の山中に葬り奉ること、なり其の御靈廟普請中一時小澤の千代稻荷の境内に奉安した、已にして御靈廟の築造成りたる爲此に移して厚く奉祭した。即古黒森の本宮様と稱する所が是である。又親王の御尊骸を發見せし海岸の村を磯鷄と稱し其の鷄を葬りし山を鷄頭山と呼び又親王より文字を授けられたる村童等親王の愛鷄を重茂の海岸に放ちたるに其大祥忌迄に繁殖して一千羽になつた依て此の地を千鷄と名づけた。

大同年間田村將軍閉伊の蝦夷を征討の砌り此の黒森の嶺を過ぎて適々此の靈廟を發見し里人に其の由緒を訊きて大に之を尊崇し其の境内の甚だ狹隘なるを慨して其れより數百弓の山上に平垣の吉地を拓きて新たに一字を創建して神號を賜り黒森大權現の宮と尊稱し東夷征討祈願の一鎮守とした。後源義經高館の難を逃れて此の山中に參籠し大般若經を書寫して之を奉獻し、尙又甲冑陳刀をも奉納せしと云ふ應安三年南部政行當社を再建してより代々南部藩主厚く之を尊崇した。

(三) 黒森山陵誌及黒森神譜

以上は往時より此の地方に傳はる當社緣起の概要である。此の傳説を骨子として當社の緣起を書いたものに黒森山陵誌及黒森神譜がある、前者は幕末南部藩の學者にして南部封域誌の著者たる高橋子績の書いたもので此の傳説の主人公たる是津親王の事蹟を尊重し至尊に對する敬語を用ひ其の御墓の如きも山陵と書いてゐる。更に又「會て閔宮として錦帳の内に陳べたる金櫃之靈寶神籍等の如き人間

に出でざる者は之を識る能はざるも則ち是東奥南部一方の大鎮守護なり」と説き、其の金櫃の内容等知りつゝも語らず其の間に意外の祭神を秘めつゝあることを暗示してゐる、黒森山神譜は南部藩の儒者久保田玄順の作て徹頭徹尾是津親王を難拮して不仁者は津と謂ひ其の不仁者を崇敬して三尊の神位に替へたことを論難してゐる。又山陵誌に於て親王の御墓山陵と稱したことを駁し「先儒墓所に題して山陵志と謂ふ豈過たざる乎」と謂ひ又「余以て憶ふ神社は是神社墳墓は本自墳墓豈混すべけんや」と難んじてゐる、要するに山陵誌の著者は是津親王に假托して危く眞祭神の事まで吐露せんとしたこと

(四) 御陵を立證すべき文献

黒森神社が長慶天皇の御陵であることを立證すべき文献として三上氏の系譜がある三上家は其の先



郷土史家 伊藤 香彌七氏

祖義綱の時より御醍醐天皇從に從て忠勤し、元綱の時に至り長慶天皇に供奉して陸奥に下向し宮古浦に於て 天皇御崩御の際御葬禮の大任を奉仕した家柄である今其の系譜中當社に關係ある部分を示せば左の通りである。

元綱 富士名三上介太郎と稱す右馬介となり  
近江守を兼任龍馬と號す

正平十年八月十五日大和の吉野に生る



母は隱岐氏隱岐少輔四郎の女

元綱は長慶天皇正平二十三年四月御即位の、初銳意武を用ひ東西諸將に勅して一時に並び起り京師を圍る正平の例の如くなるべしと申せり。

天皇は元中三年八月左近衛少將千種清頭 左馬頭中院秀仲 在原忠平 右馬介三上元綱 廣田刑部竹森武左工門 小山儀兵衛 遍昭院春淨、釋明恩、伊勢内侍等を徒ひ伊勢灣を發し、九日廿六日陸奥の宮古浦に着し時に颶風烈しく激浪御艦を打ち帝御親ら揖を取り帆を擧げて出帆せんとす、此の時帝海中に溺る大納言北畠守親は此の報に驚き急行して宮古浦に達し黎明双鶏を艦中に畜ひ隊伍を組んで、搜索したるに偶々鷄鳴一發の所あり、舟師潜郎沈浮して玉體を獲たり 南部政行厚く守護して之を黒森山上に葬り奉り黒森大権現の宮と號す、從士と共に暎福を祈る式部の太夫源長時をして装綿を守らしめ、十二月一日北畠守親北畠顯時中院秀仲等と共に浪岡城に歸る。

### (五) 三上氏の系譜に合致せる郷土史

長慶大皇は御讓位後も亦南朝御興隆に御執心遊ばされ元中二年八月前記系譜にあるか如く左近衛少將千種清顯以下多くの從臣を從へさせ吉野の高峰を發し、伊勢の南島に御着直に神宮に參詣せられ前途の御武運を御祈願遊はされ、それより伊勢國司北畠顯能の許に寄せ玉ふた顯能は重臣等を集め鳩首協議の結果、京師を回復せしむるには陸奥の國司大納言守親の力を頼むより良策がないと云ふことであつた。顯能は直に陸奥の國司北畠守親に上皇の宣旨を傳へて軍備を整へしめた、こゝに於て上皇の御一行は伊勢の國を發し海路陸奥の國へ進航せられた。然るに九月二十六日大時化に遭ひし爲一時宮

古浦に難難された。即ち三上氏の系譜にある記事はこれからの出來事を書かれたものである。然るに上皇は朕の船に對し海神が暴威を振ふとは何事ぞ朕は決して海神を恐るゝものではないと、群臣の諫止も御聽き給はずいつの間やら親しく帆を張り梶をお取りになつて激浪天を衝く灣外へと御出御になつた。暫くあつて上皇出御の事を知つた群臣等は驚愕措くところを知らず、直に御行衛を追跡申上げたが及ばなかつた。群臣等天を掴み地を叩いて慟哭したけれども如何ともすべき手段がなかつた。大納言北畠守親及南部政行公は豫て長慶上皇を御待ち申上げつゝ、東海岸を警固してゐた。然るに意外なる大事件を供奉の人々から聞き大に驚いた、守親は悲觀しながら雄鷄を船に乗せて探索した。偶々今の普代村字卯子酉のところへ鷄が鳴いた、其處の海邊より上皇の御尊骸を發見した依て其の御尊骸を一先づ其の地に安んじ奉つた。今の卯子酉神社は即ち其の跡である。卯子酉は方位を顯はした名稱でわざと午の語を欠いたものだと云ふ。即ち至尊を安駕し奉ることを暗示してゐる十一月十二日上皇の御遺骸を船に乗せ奉り、南部政行公の御警衛に依りて野田の玉川より出帆し、宮古浦の藤原へ上陸した此處で土佐阿闍梨道尊御坊職を奉し更に黒森の靈所に奉葬し、黒森大明神と崇め奉つた。又此日多くの兵士等は侍演に於て上皇の冥福を祈り遙拜式を執り行つた。十二月一日北畠守親は千種清顯中院秀仲等と共に天拜坂より黒森神社を遙拜し浪打峠を経て津輕の浪岡へ歸つた。以上は三上氏の系譜と郷土史とが一致してゐる點である。又是津親王の傳説と三上氏の系譜とも似通つた點が多い、然し是津親王の方は暫くの間に此の地方に住まはれた後の出來事であると拜察される、長根寺及田鎖村の皇屋敷は昔時皇子の仙居せられし跡だと云ふ傳説がある。

### (六) 御陵墓としての傳説



當社が長慶天皇の御陵墓たることを立證すべき傳説として南部家の重臣櫻庭氏に往古より傳はる傳説がある。

「黒森大権現は確かに天皇様(長慶天皇の事なるべし)を葬つた所で、當時之を秘密にする爲其の御靈骨を分ち數名の武士僧侶姿に變裝して之を警衛し、高野山に登つて碑を建て天皇の御陵と稱して厚く奉葬した」と云ふのである。其の當時高野山に同行せし一人の後裔が今尚花輪村に在つて上皇の袈裟の一部を寶物として所藏してゐる櫻庭家は南北朝時代より此の近郷に領邑を有し殊に長根寺が菩提所なる爲毎月一回は必ず參詣し長根寺の山上より黒森大権現を遙拜したものだ云ふ。

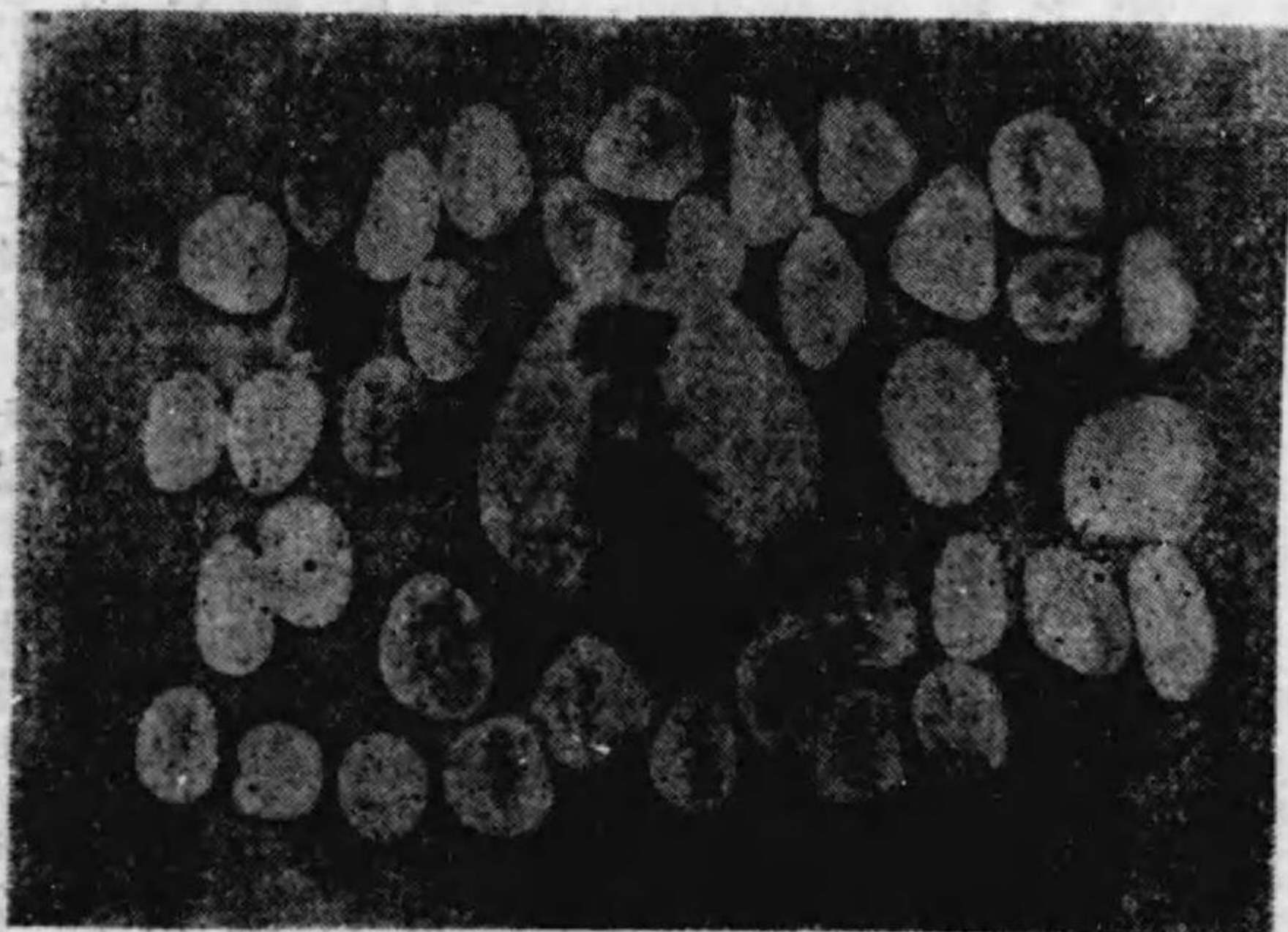
### (七) 社殿及境内の營造物

社殿は黒森山の南面中腹にあり背後の山を圓く切り崩し石垣を廻らし其の中央に造營せしもので、社の形式は單層切妻形の社殿で總べて徳川時代の様式を探り組垂木椽の透し浮彫にて袖隠し軒垂木欄間等に龍虎を精巧に浮彫りたる一丈二寸四面の小祠である。社殿の下は御影石を以て四面を敷切り其上に八本の柱を建て四方嚴重に椽の八分板にて圍ひ其の餘りの部分はタ、キ土としてゐる。而して四方嚴重に圍ひたる中には石棺が埋めてある。又社殿の廻りには玉垣が廻らしてある、會て岩手縣史蹟調査委員の手にて社殿の下を調査せしに其御兆穴の上部に數百個の丸石を配し其の中の最も大きな石に「御内神様」と記し、猶他の二個の石には「御内神様三四尺土中在」と記してある。又其他の石には夫々末社觀音堂稻荷堂等の造營の次第を記してある此の社殿より一段下りて廣き平地あり、其東方に龜堂西方には昔時護摩堂鐘樓があつたが、今は齋殿がある尙其境内を一段下りて池があり橋を架け

て此より參道となつてゐる。境内には白山堂稻荷堂辨天堂あり、又本社より少し下りて參道の西方に小丘がある古黒森と稱し其の上に御倍塚がある。又參道に沿ふて虚空藏堂一ノ皇子二ノ皇子三ノ皇子ノ宮の祠がある其他藥師堂及鳥居等がある、昔時山内に安泰寺及赤龍寺があつたが、今は其の舊跡を存するのみである。而して往時黒森山への登り口にて仁王門があつたと云ふが今は長根寺に現存してゐる。

### (八) 靈廟式御陵説

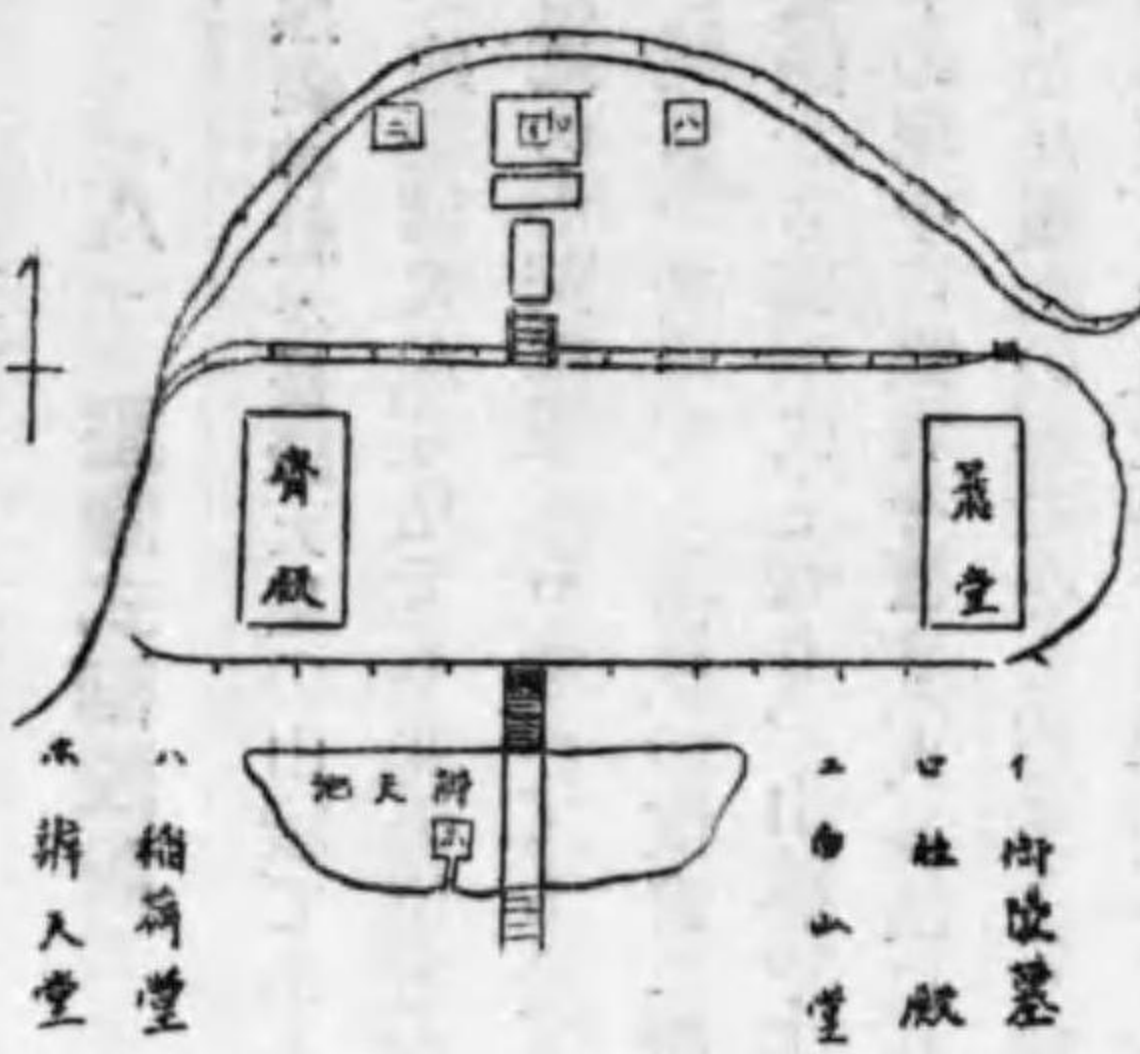
黒森神社が長慶天皇の山陵であると云ふ事實は此神社の建築様式から見ても其の位置から見ても之が設計及附近の寺院配置から考へても恰も南北朝時代に皇陵が純眞の神道から佛教の慣習に倣つて來て皇陵の形式變遷から靈廟式となり、山陵の上に寺院を建てその壇下の地中に靈骨を置き(火葬法に依る)佛堂と共に之を拜した靈廟の形式をそのままに建築しあることにて之等の様式を山陵學者は靈廟式とし、皇陵變遷史の一劃期としてゐる元語陵頭であつた。山口銳之助博士は



黒森神社御内神様



黒森神社境内平面図 縮尺二百分一

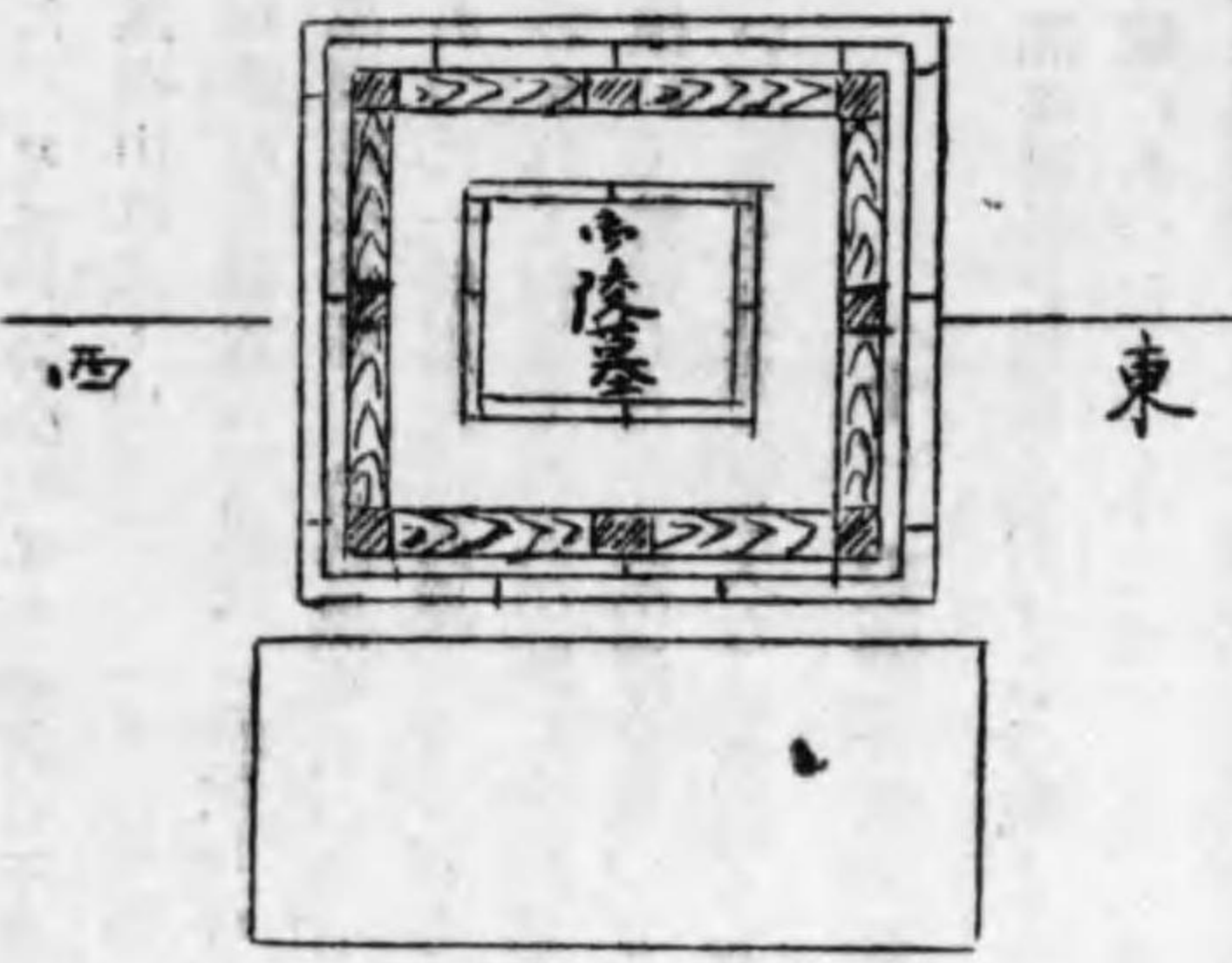


黒森神社境内

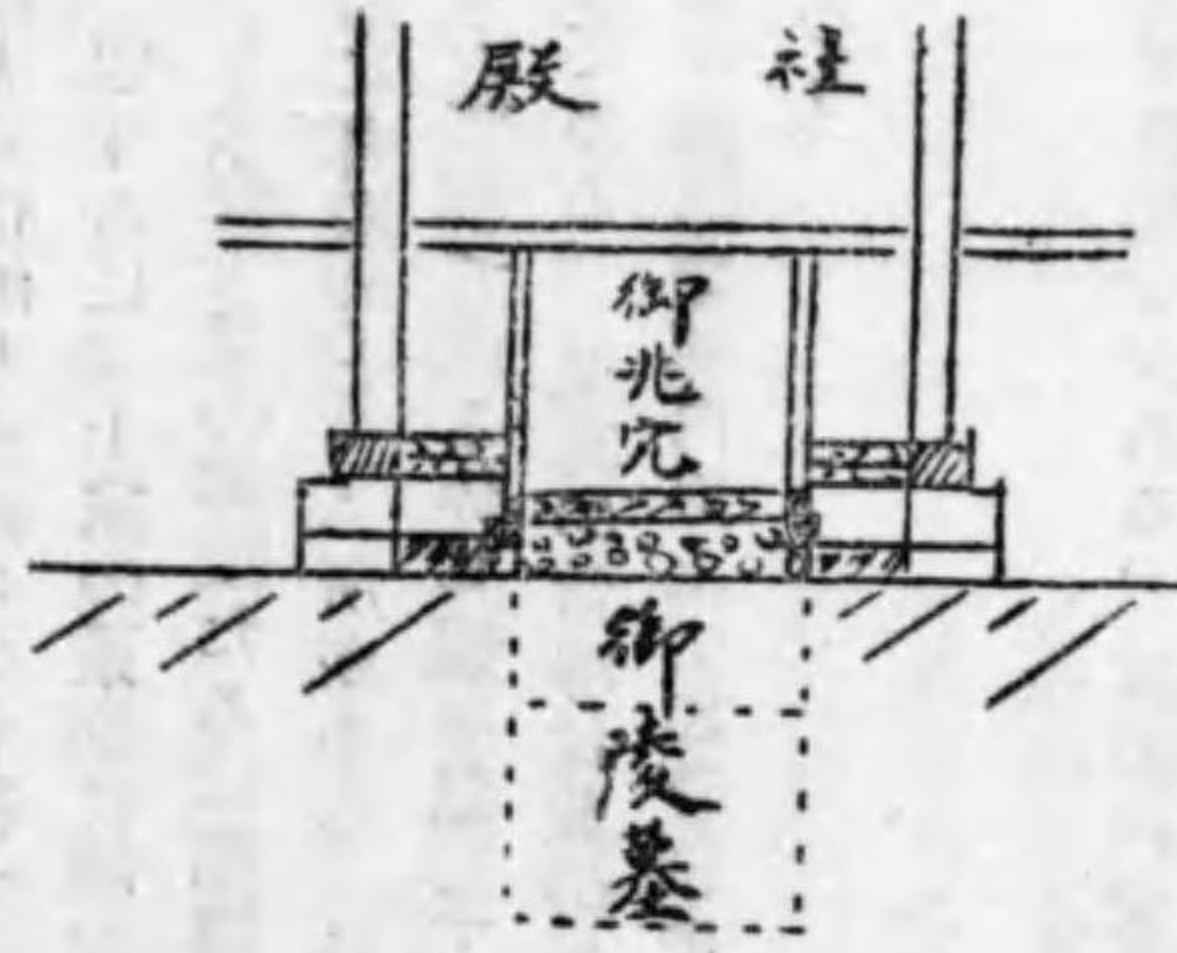
皇陵變遷の第七期として後鳥羽天皇より南北朝時代迄は主として山陵の上に法華堂を建設して安樂光院安樂壽院など稱し居てた殊に北朝の光嚴天皇以後は多く深草の東福寺内に法華堂を設けてゐた。北朝の天皇の御陵は悉く山陵の上に寺院を設けてゐたが同じ時代の南朝では、後醍醐天皇が吉野の山奥の塔尾陵後村上天皇が河内の觀心寺内の檜尾陵等は純然たる墳丘をなして上圓下方式に則り山陵の上に樹木を植へ、周圍に濠を設け玉垣御拜所鳥居等を備へてゐた。今黒森神社の建築様式を見るに靈骨を地下に埋め其の上へ寺院に換ゆるに神社を以て周圍に池玉垣石階等を設けて靈廟の様式が只寺院ではなく神社と變りし事である。南朝には北畠親房の如き大學者があつて如何に神佛習合の時代と雖ども寺院を以て山陵とせず、神社を以て佛堂に換へたる等の考へは南朝として然るべきことななければならぬ、之れ等の思想が陸奥の邊土たる宮古町や山口村の郷土民の間に存する理由あるべき筈なく必ずや南朝方の人の手に依て設計築造せられたものであると考へなければならぬ。以上は親しく當社を實地に研究せし皇陵研究學者尾上金城氏の所説である。

(九) 黒森山に御番屋を設けて守護す

南部家の史料編纂者小笠原伊八氏は三上家の系圖を引いて下の如く云つてゐる。黒森山を公式に守護する爲には南部政行公は祐京道房を別當にした、更に應永十一年三月に至り南部守行公は黒森山を愈々嚴重に守護せんが爲に別當の外に御番屋を設け三上元綱の一族三上八百右衛門に其の番屋の主任を命じた當時元綱は普代の城主で此の地方の郡代になつたので御番屋や別當は元綱の支配を受けて黒森神社に奉仕した、御番屋は黒森堂御番屋と稱し三上八百右衛門の子孫が代々其の御番屋を預かつて



平面圖



東西断面圖

黒森神社

御陵墓實測圖 縮尺五十分一



るた、又普代村の卯子酉神社は至尊たる意義を表はす方位的考察からの名稱である此の神社があるため黒森山は愈々山陵たることが確實となつてゐる。要するに三上家の系圖に明記された事實は南部家が御番屋を設置して異常に崇敬したことから考へても長慶天皇の御陵たるに相違ないと云つてゐる。  
(黒森顯彰會報) 昔時黒森山の登り口なる小澤の山に拜殿峠と云ふ所がある、往時は其の附近に拜殿があつた一般庶民は此處から參拜した、當時は又女人禁制で或る時其禁を犯して登山した巫女が大蛇に吞まれて相果てた其の跡に今尙供養碑が建てられてゐる。又其の當時は此のお山に登る者あれば鐘を撞いて警戒した今其の澤を鐘つき澤と呼んでゐる。南部領域内以上の如き制度を有する神社は他にない。即ち此處に重大なる意義を有するものであらう。

(十) 安泰寺及赤龍寺

黒森神社に關係を有する寺院として安泰寺赤龍寺及長根寺がある、其の内安泰寺及赤龍寺は黒森山の麓にあつたが。今は僅かに其の遺跡を存するのみである。往古田村將軍が黒森山に觀音を勸請して以來神運隆々として里民の信仰厚く東奥一方の大鎮守となつた、義經主従が此處に參籠して大般若經を寄進したのも一の靈山であつたからであらう。從て早池峰に於ける岳の妙仙寺の如き寺が黒森山にも昔よりあつたものと思ふ。封内鄉村志に「往古大峰に至る山伏は先此の山に至る行者今に存す」とある其當時此の地方の行者が熊野權現、醍醐山等所謂の峰入りをする前には必ず第一に黒森山をかけて後に上方へ上つた、安泰寺の草創の年代開基等不明であるが、南北朝時代に存在したことは鐘の銘に依つて明である。

拜殿峠建立鐘銘ノ寫

鐘建立直定志願惣百姓共衆上下四十五人施主堂鐘也 諸人心拜 敬白  
其時大旦那式部太夫源長時 於當所界拜殿峠掛奉拜勸進惠心 天長地久一心講拜堂 長一尺八寸口一尺六寸衆生一齊堂鐘  
貞治四年乙巳十一月

山口 村地下百姓  
同施主頭太左衛門



圖内案社神森黒

安泰寺の鐘銘  
之廻納安泰寺推鐘長一尺八寸口一尺六寸右之鐘者天地長久奉爲殊禱衆直阿定門惣百姓結衆聲法界衆生平等利益儀也  
大旦那式部太夫源長時  
別當假海  
勸進主旦那惠心  
貞治四年乙巳十一月六日  
赤龍寺(養命山)は元和三年三月黒森神社の司官川原田氏が田土高三石六



斗を分割して其の麓に建造したもので、盛岡山永福寺の支配で仙光法師の開基であつた明和二年無住職となりし爲長根寺で一時之を預つたが、天保五年廢寺となつた。其の後は川原田司官代々之に替て黒森山を管理し、長根寺は其の祭祀を奉修した。東奥僻陬の小社たる黒森神社が異常なる四民の信仰をうけ而も以上の如き多くの寺院を有して數百年來其の祭祀を嚴修して來た事は即同社が長慶天皇の御陵なるが故なりと考察せらるゝものにして、即ち以上の寺は其の供養寺と稱すべきものである。

(十一) 南部家と黒森神社

南部家は往時より黒森神社を崇敬すること厚く、應安三年には政行公は黒森堂を建てた封内鄉村志に「邑人傳て云ふ黒森八幡は觀音の末社なりと云ふ、觀音堂あり八幡宮は御先祖三戸六郎公尊氏に従て相戦ふ八幡宮に祈願し奉りて屢々戦功あり、此社を建立し社領を奉る」とも出てゐる、降て元中三年には黒森山上に靈廟を築きて長慶天皇を奉葬し奉つた、應永十一年には南部守行公之を再建し天文十年には南部安信之を再建して桶輪嗣の鎧一領御太刀一振を奉納した。天正七年には小笠原成清之を造營し慶長五年には南部利直之を再建し寛永十七年には南部重直造營し尙此年宮古代官の小本正吉神輿を奉納、延享四年南部利親之を再建し尙宮居造營費として金百貫の御下金があつた。以後毎年六月一日御祭禮費として金七貫二百文つゝ御下金があつた。弘化三年十一月屋根修繕費として二十四貫百六十四文御下金があつた。嘉永三年南部利剛現在の社殿を造營した、而して代々の藩主は一生一度は必御參拜になつた。又慶長年間宮古に代官所を置いて以來、毎歳の祭日には時の代官が必ず代拜した、上の崇敬厚きこと斯の如くなるが故に四民の信仰愈々厚く、其の祭日に三閉郡内及遠國の信徒と絡釋と

して登山した千徳村の羽黒坊中ノ坊柿木坊小澤の丑徳坊早橋の大黒坊大澤村の刺覺坊は當時の宿坊で非常に繁昌したものだ云ふ

(十二) 棟札及什寶

幕末の頃までは當社草創以來の棟札の寫書や舊記類が宮古大官所に保管されてあつたが、火災の爲焼失した、現在ある棟札の中最古のものは應安三年造營の棟札である其の文面は左の通りである。

我適會供養今復還親近

當郡地頭南部光祿

且那 沙彌 宗光

參封聖主天中天迦陵頻伽聲

奉造營治明御宇黒森大權現御社一字

哀感衆生者我等今敬禮

南部伊豫守信長且那

沙彌 眞清

對馬房阿闍梨明春

且那 藤原 宗光

同 上總守 光義

同 左近將監 光顯

同 中務尉 光清

三郎左工門尉光綱

十郎左工門尉光安

鍛冶 恒泰

鍛冶 金藤三郎



彈正左工門尉  
且那 沙 彌 戒 眞  
且那 岩 間 彈 正  
大工 三 郎 左 工 門  
執筆 治部房律師宗清

應安三季歲次  
庚戌十二月十七日

川原田右京助道  
小工五郎大夫重光



郷土史家  
佐々木泰樹氏

此の中の且那藤原宗光左近將監光顯中務尉光清等は吉野朝廷に忠勤せし人々て黒森神社と南朝と深き關係を有するものとして研究せられてゐる。當社の什物に建武年間の鐵鉢がある、其の銘に  
當山黒森 建武元年八月廿日 道德敬白  
とあり、幣代を入れるものだ云ふ、其他兜頭巾陣刀等の寶物が澤山あつたが、天保年間の火災で焼けた今は僅かに其の記録を有するのみである。黒森山は元鬱蒼たる大森林で松杉樅等の大木があつたが、明治三十五年全山伐採して今

は社殿の廻りに十數本の古木が残つてゐる。其の中におば杉、おぢ杉と云ふ大木あり其の周圍何れも三十六尺千年以上を経たるもので皆中空である。又本殿左側の谷間の木を伐採したる時松の根元より七個の曲玉を發見した、是に就て内務省の柴田調査官は二千年以前の曲玉であると鑑定された、長根寺には赤龍寺から移管になつた四個の釘隠がある。何れも菊花御紋章の形である、又赤龍寺及黒森神社の御寶物で民間に保存されてゐるものが尠くない、其の内菊花御紋章入りの經机がある。又先年黒森山の太木を伐採せし際黒塗りの香合の蓋を發見した又御紋章入りの寶刀がある「ほど丸」と稱するもので明治三十六年頃日詰の紫波神社に宮内省の刀劍係りの人が來て其の「ほど丸」の刀がある筈と云つて搜索したが遂に不明に終つた。其の時刀劍係りの人は「ほど丸」の刀劍のある所が長慶天皇の御陵である云はれた、其の寶劍は今宮古町の某子が秘藏してゐる。又白玉の御數珠がある。帝國大學史料編纂部の學者の御鑑定に依れば此の白玉は千二百年前のガラスで緒の結び方より判ずれば眞言宗の様式である、何れ高貴の方の所持されたものであらうと鑑定された、此の數珠は元「ほど丸」の寶劍と共に其家に傳はりたる御什物で寶劍を所持せられし御方のものであつたと稱せられてゐる。

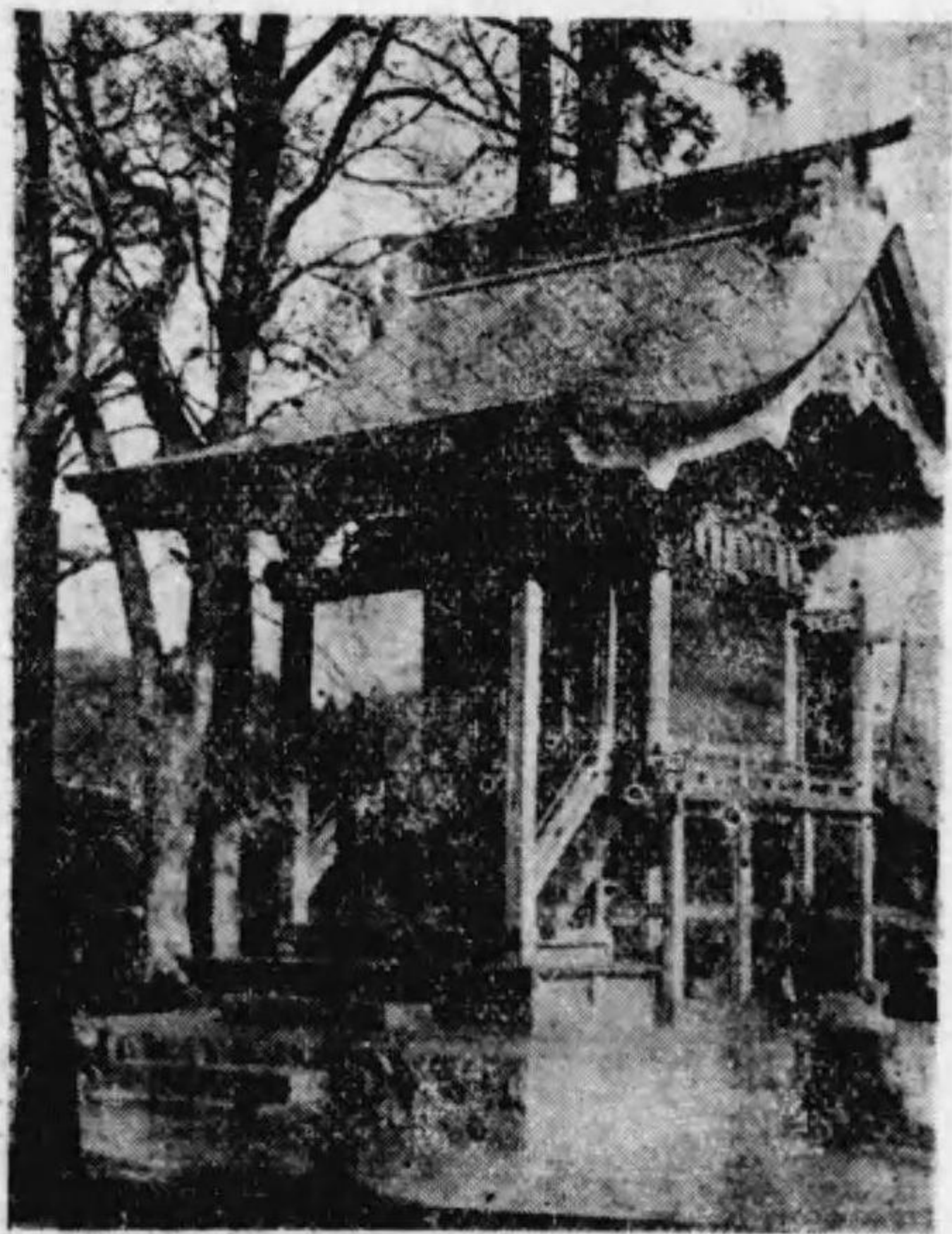
### 藤原比古神社 (驛より東南約十五丁)

同社は宮古町藤原にあり無格社ではあるが、黒森神社に關係あるの著明である。藤原は往時八幡野より突出せる三角洲で閉伊川の下流港川は磯鷄村の北端石崎の海に注ぎ漁民及廻船業者等は多く此處に住んでゐた時代があつたと云ふ、當時閉伊頼基は根城に館を築き氣仙閉伊兩郡を領し其重臣近能



親良は黒田館に據りて此の地方の警備に任じてゐた頼基の奥方は佐々木高綱の娘音羽姫で常に藤の花を愛せられた、曾て白藤を藤島村より採りて此地に植へ觀賞せられた、依て此處を藤原と號したと音羽姫の死後此處に葬祭して藤明神と稱した音羽姫の植へた藤は後年愈々繁茂して大木となり柵を廻らして神藤と稱し里人等毎年開花の多少に依て其年の豊凶を下した後明治二十九年に至り大津浪の爲枯死した、今は其根元より分蘗せるものが生成してゐる。

當社は黒森神社の縁起にある是津親王の御尊骸を一時此處に奉安してお通夜をせし所て又（火葬に附し奉りし所とも云ふ）其の跡に親王の御佩用の寶劍と御母君より賜つた寶鏡とを土中に埋めて塚となし神籬を繞らして厚く之を祭つた又此の事蹟に就き郷土史の研究家伊香彌七は次の如く云つてゐる「藤原比古神社は長慶天皇の御尊骸を守護し奉りしお通夜の假り場所て土佐道尊釋明恩は御坊職を掌つた其の後道尊は奥州糠部郡桂泉の八葉山天台寺に移し桂壽院第三十七世の住僧となる。義山雙釋明恩は後醍醐天皇の法師たりし三光國淨國師覺明孤岸の徒弟にして長久寺の開山和尚となり後三戸の聖



社神古比原藤

壽寺を繼ぎたる名僧である。」

當社の祭日は昔時黒森神社と同様毎年六月十四日であつたが後に親王御入水の日なる八日を以て祭とした、境内に牛頭天皇の祠がある此處は親皇御入水の時殉死せし七人の侍臣を葬りし所て往時は木柵を回らしてあつたが、年月久しきに及び荒廢せし爲櫻樹七本を植付たが之も亦漸次枯死したので杉七本を植へた安政年間に至り社殿を創建して牛頭天皇を勸請した、正徳二年火災の爲是津親王の烏帽子直垂及其他の御遺品舊記類を燒失した、天保十二年大井儀右工門及儀兵工の兩人京都に上り神祇伯白川家より神璽を勸請し藤原比古神社の社號を賜はつた。其當時の記録には社號の事に就て比古とは何の意味なるやを解せずと附記してある尤も其の時代の里人等は専ら當社の主祭神は音羽姫なるが故に女神なりと思ひしなるべく比古とは靈兒靈孫の意にして是津親王の御事たるべきを思ひ及ばなかつたものであらう。

## 長 根 寺（驛より西約十三丁）

玉王山長根寺は千徳村長根にあり氣仙郡如意山金剛寺の末寺て新義真言智山派に屬し本尊は不動明王である、往時は南部領内眞言宗寺院の總支配寺たりし盛岡山永福寺の次位に列する寺格を有する名刹であつたが、故あつて其の末寺となり明治の初年廢寺になつたことがあつた、昔から尾玉明神で有名であつたが、近來は又佛像其他の什物に古代の名作品が多いのと御陵としての黒森神社に關係を有するので全國的に注目せらるゝに至つた。



(一) 開山及寺の略歴

大同年間田村將軍閉伊の蝦夷討伐の際長根小山田黒森山に三所一體として彌陀藥師觀音を勸請した事は地方の記録が一致してゐる、而して長根には往古より阿彌陀堂があつたが其の後此處に長根寺の草創せらるゝと共に自然合同せしものなるべく、古記録には阿彌陀別當長根寺と書かれてゐる、長根寺の草創年代及開山等は未だ詳ならざれども文和年間寄進せられたる大般若經の奥書が残つてゐる。

文和五年大般若經の奥書

大般若波羅密多經卷第五百七十

奉寄進興州閉伊於長根寺之常住

開山光土寂法聖人 新大勸進

聖進等禪師

大旦那沙彌良西 同大施主若江女

執筆 常州吉田郡那珂湊天神別當坊住侶

三昧流門弟 金剛位 頂 範

之に依て長根寺の開山は光土寂法聖人であることが判かつた。又其の草創の年代も文和二年以前なることも明である。天文七年法印朝胤入山後火災にかゝり堂宇古記録等焼失せし爲それ以前の事は不明である、元祿十四年に至り快玄法印入山して殿堂を修理再興して中興開山と仰がれた、後寶曆六年三戸惠光院より祐義法印入山して大に寺門の興隆に努めた、降て明治三年に至り神佛分離の際廢寺の厄

に遭ひしが、當時の住僧祐登法印大に之を遺憾となし寢食を忘れて同寺の再興に努力し明治十六年遂に其の筋の認可を得て再興の志を達成した、現任職新山英賢師は其の息である。

(二) 盛時の長根寺と其遺跡

長根寺は南北朝初期より戰國時代の末期にかけて大に隆昌を極めた、九戸政實の變以後故あつて當路の監視嚴重にして衰運に傾き徳川時代の中頃再び往時の盛況に復し明治維新に至り殆ど廢滅に歸



長慶天皇御像

した往時の長根寺は七堂伽藍完備し觀音堂阿彌陀堂白山堂一ノ王子堂妙音堂熊野堂又池ありて辨天堂があつた。又黒森大權現の表門として仁王門を有し、尚池の坊西の坊金泉坊東久院等六口坊を有してゐた、又其の當時は莊園豊にして境内及寺領の山々には多く杉松樅等の大木が鬱蒼として繁茂して在つた其の壯麗隆盛なりしこと時人呼んで奥の高



野と稱したと云ふ、今日は僅に残れる古木苔石や殿堂の舊趾に往時の片影を留むるに過ぎない、然れども今尙若干の舊記什寶を存して當年の面影を忍ばしむるものがある。

一一二

- 一、長慶天皇御像 應永廿四年御供養の銘あり
- 一、尾玉尊 牛玉とも稱せられ原動物鶏卵大全體に毛あり丑午に開帳す  
延享四年南部藩主より下附
- 一、御玉神添書 南部利剛眞筆
- 一、尾玉明神額面 白山妙理權現文眞書
- 一、額面 白山妙理權現文眞書
- 一、阿彌陀如來坐像二體 一は慈覺大師御作 一は藤原貞朝作
- 一、毘沙門天立像 慈覺大師御作
- 一、仁王立像二體 長七尺余木像左甚五郎作と云ふ
- 一、獅子頭 高八寸横一尺一寸丹慶の作と云ふ
- 一、三十三觀音曼荼羅織掛物 横一尺六寸縦四尺五寸作者不明
- 一、十三佛掛軸 長さ二尺九寸幅一尺五寸無銘極彩色名品なりと云ふ
- 一、達磨掛軸 正慶の作なりと云ふ
- 一、古磬 支那唐代の作なりと云ふ

右寶物中の阿彌陀坐像及古磬は吉川保正氏の推賞に由り内務省の鑑定する所となり慈覺大師作の阿彌陀如來は内務省柴田考査官の推賞する所となり藤原貞朝の阿彌陀如來は文部省萩野大村兩博士の推賞に依て何れも國寶に申請中である。

### (三) 境内の造造物

境内には本堂及庫裡の外に尾玉堂地藏堂白山神社櫻庭氏の墓祐義祐登及一峯の反古塚がある、白山神社は上古の御社であつたが、故あつて明治初年に其の殿堂を取り拂ひ石の小祠を立てた其の當時の社堂は名工仙之助の作て今の黒森神社と同様の結構なりしと云ふ祭神は白山姫の命て五月一日の祭日である尾玉明神は古來里民の信仰最も厚く三月廿一日の祭日には近隣の町村より參詣者殺到して甚だ賑かである。

尾玉明神は長根寺に在り前田を掻く時牛の尾に付きあがる、利視公御取上げ錦の袋へ入れビイドロの厨子に納め又黒漆鶴の金御紋の厨子に容る潔齋して願へは則ち見る也栗毛の如くにして形寶珠之如く卵の程也。(封内郷村志)

南部三十三代利視公御病氣の際長根寺に靈驗顯たかなる神寶ありと聞き之を城内に召されて祈願せられしに果して御病氣平癒せられし爲厚く之を信仰せられ御定紋の袱紗に包まれ添書を附けて鄭重に送り返へされ其の後南部利剛公黒森山へ御參拜の途路長根寺に立寄られ親しく尾玉明神に參詣せられ直筆の額面を奉納せられた。

### (四) 長根寺と黒森神社

長根寺は往時黒森山の參道表門に當り黒森神社の神宮寺の如き關係を有してゐた。元和年間黒森神社の川原田祠官は自ら社領を分割して赤龍寺を立て其の寺僧を以て黒森山を管理せしめ長根寺の繫搏



より離脱せんと努めた然れとも赤龍寺廢滅後は之に替りて祭祀を司り又其の管理に任した會て黒森別當の小五郎が長根寺の指圖に従はずして「近年當山に出仕等疎略に相成御宮守り方の儀龕末に相心得」又獅子舞ひの廻り場所を省略したので支配寺たる永福寺からお呵りを蒙つた書き付けが残つてゐる。天保五年赤龍寺廢滅の爲其佛像什器等は長根寺に移管になつた其の中に一體の御木像がある長さ一尺四分の座像で頭に寶冠を載き袈裟を纏ひ右の手に劍を持つた御姿である其御木像の裏に銘がある。

摩耶經百三十六部餘分鑄佛

應永廿四年大歲丁酉八月十九日入佛

二貫三百文

右御尊像に就き尾上金城氏は次の如く論じてゐる「摩耶經百三十六部」は山邊習學氏の説の如く追福の爲に其寺に寄納し、又多くの尊像を鑄造して各所に分つたものと思ふ、又頭に寶冠を戴いてゐるその寶冠が能く御出家遊ばされた上皇や法皇の冠て雲形に日輪を現し、その日輪が鏡になつてゐる恰も天皇が御即位の禮を行はせ玉ふ時にその高御座に六面の鏡が附いてゐて雲形の模様があるから恐らく法皇などの召さるゝものである。又此の尊像は眞言宗の法衣を纏つてゐる、右の手に持つたものは破損してゐて不明なるも左の御手は上方に開いて一種の印を表し東大寺の盧舍那佛と同じであるから高貴の御方の御體像と拜する殊に台座の銘に「應永二十四年大歲丁酉八月十九日入佛」とあるから長慶天皇の御崩御になつた應永元年八月一日からは丁度二十三年目に當る、廿三回忌の御追福の爲に此の御木像を造り多くの鑄佛像を各所に分けたものであらう又「二貫三百文也」は此の法會に附けて供養の爲に添へたものか乃至はその費用と推察せらるゝ、二貫三百文は永樂錢であるから頗る澤山な額である、

此の多額の費用を投じて黒森山乃至其の寺院に於て長慶天皇の二十三回忌の御供養が行はれたものと思ふ。天皇の御崩御が應永元年八月一日と今日では殆ど確定し八代博士始め凡ての學者がそれを認めてゐる即ち是は南部興福寺の大乗院日記に依つたもので文献として残つてゐるものに信を置いてゐる、八月一日か二十九日となつてゐるのは法會の日で入佛の當日であつたとすれば或は御崩御の日が八月二十九日であつたかも知れない、應永二十四年は稱光天皇の御世で足利義持將軍の時である已に南北合體の後なれば公然と天皇の御冥福の爲追善供養をしたのではあるまいか。(皇陵十號)

此の御尊像は長慶天皇の御陵を立證すべき最も有力なる資料として學者間に研究せられつゝ、あるもので之に添附せられし摩耶經は當地に於ては未だ發見するを得ざれども其の分鑄佛と稱すべきものは二三發見せられ其の中元黒森別當川原田家より出てたるものには「黒森大權現御寫」と書き添へてゐる。大さは七分位の黄金佛で觀音或は文殊菩薩の立像の如き御體相で右手に劍を持つてゐる神々しき御尊像である。

#### (五) 長根寺と大覺寺

長根寺の門前は一峯嶽ほらけと書いた記念碑がある。其の碑面に「唐の吉野と申せ梅處」の一句がある往時長根寺の山内に梅の木が澤山あつた、其中廻り一丈餘の梅の大木があつて名物の一つとなつてゐた此の句は梅に寄せて史的述懐をしたものであらう、長根寺は長慶天皇の御仙居せられし場所だと云ふ傳説があり、其記念に建てられしものだと稱せられてゐる。又此の寺に昔時高貴の方が住まれたと云ふ傳説もあつて其の御墓があつた寛政四年風雨の爲其の塚が崩れ石棺が現はれたので其の中を改め





長根寺前門一 塚 徽 徽 峯

しに獨鉗手香爐及鈴等の副葬品が納めてあつた依て之を再び石棺に納め塚を築き碑を立て、厚く葬つたと云ふ記録がある而して此等の副葬品は眞言宗の法具で長者又は高位高僧の使用するものなれば或は、皇子皇孫等の御墓ではないかと稱せられてゐる。又其の附近に王子堂があつた長根寺は南北朝時代に於ては高貴の方や高僧等が遁棲せられし場所であつた。今同寺の書庫に「阿字觀通節解」と云ふ佛書がある其の卷末に

正平三曆初冬餘病ありて堰然たり、時に禪者あり病を訪ふの序阿字觀の意を尋ね固辭するに忍びずとあり尙その末に奥書がある。

維れ時に世亂れて兩大帝あり吉野御村上帝の曆號なり三年は北京光明の貞和四曆號なり

其の禪者と云ひ又阿字觀の意を説明せられし僧と云ひ、何れ身分由緒のある方々たるべき勿論である殊に一字一石の經塚を建造せられし雲公は長慶天皇の第二皇子行悟僧正で多年長根寺に住居せられ後江州園城寺に轉住せられし御方なりと稱せられてゐる、長根寺は南朝方の寺院と密接の關係を有して

みた。

指令の寫

權大僧都義釗法印御免許の事

不可有子細旨所

大覺寺御門跡御氣色候

仍執達如件

寶曆十一年十二月二日 書き版

法印義釗御房

同

權大僧都圓乘法印御免許の事

不可有子細旨

大覺寺御門跡御氣色之所候也

仍執達如件

明和元年十二月二日 書き版

法印圓乘御房

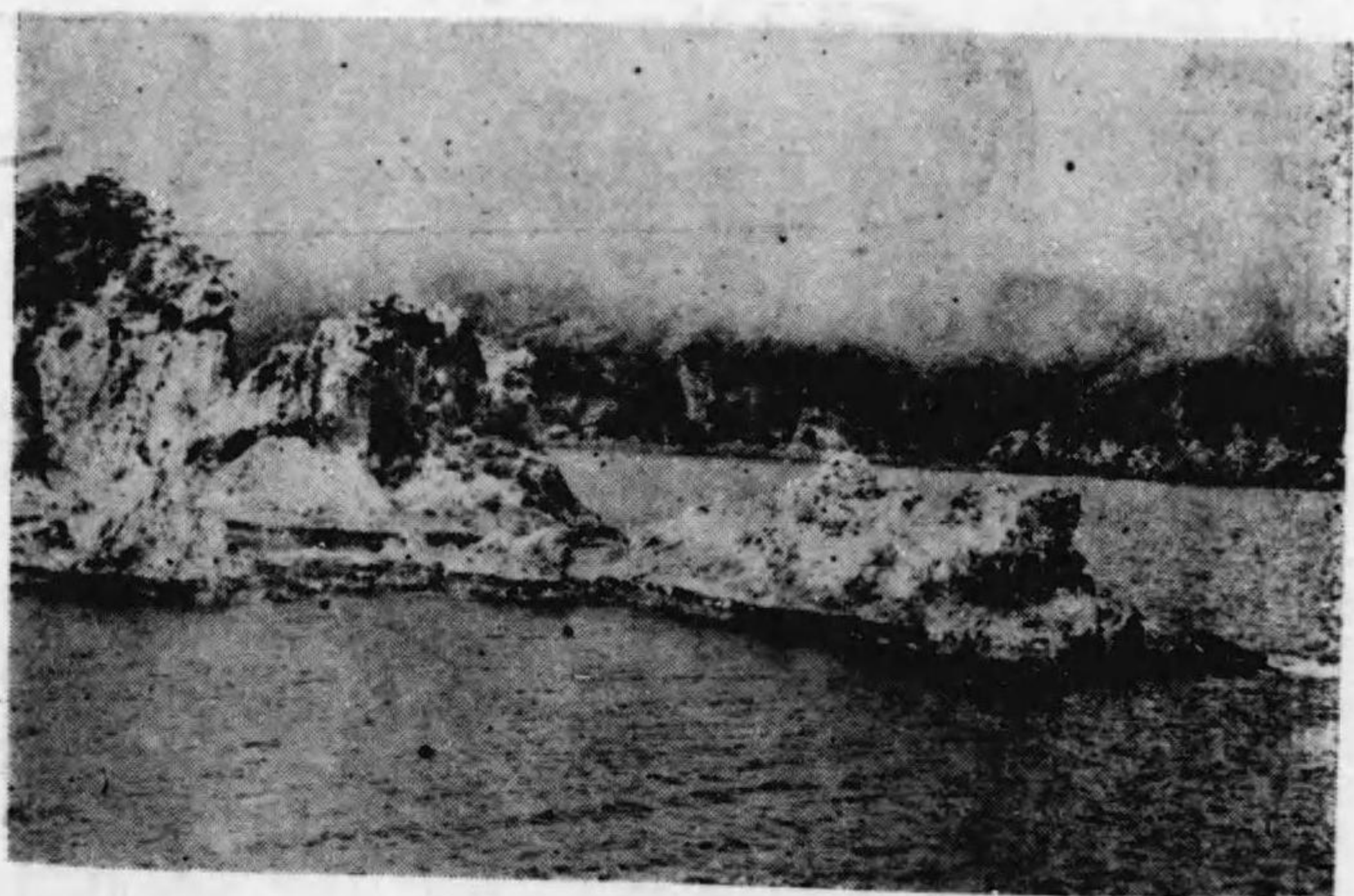
右は南朝と最も關係深き大覺寺より長根寺の住僧に賜はりたる指令で此の外仁和寺長谷寺等よりの指令及高野山との關係ある文書もある長根寺は南朝と密接なる關係を有する寺であつた事は明である。



## 景勝地

### 一、浄土ヶ濱（驛より海岸約一里）

宮古町の東北白木半島の東端にあつて館ヶ崎と潮掛の間に深く灣入した景勝地之が即ち浄土ヶ濱である。灣内更に數ヶの碧灣奇巖相交し八戸穴砲臺場等の奇勝地も此の間にあり、何れも海濱一帯に丸小石が押し上げられてゐる、最も北端なるを劔の山と言ひ白岩鋸状に峭立し、山容の奇、青松跌座し、白鷗軽く過ぎて海波動かず、更に遠く閉伊崎を隠見し日出島、潮吹を望見する時誠に煩障滌出し去りて心目爽かなるものあり、其の風光の明媚眞に東海の勝地たるに恥ぢざるものがある、俳聖碧梧桐が明治三十九年十二月十四日此の地に來遊し日出島を望見して



名勝地浄土ヶ濱

更に潮掛の崎を廻つて外洋に出づれば賽の河原、千疊座敷等あり、半島づたへにも其の一端を伺ふ事が出来る。

若し夫れ初めより陸路自動車によつて此の地の探勝に出でんか、更に風光の新たなるを知る、松韻靜かに潮音に和して立つ處、眞帆片帆の去來するあり、幾度か遊んで幾度か洗腸の新たなるもの眞に此の間の風光である。尚賽の河原の地蔵の建立は常安寺第七世靈鏡龍湖（法名）和尚の時であつて、浄土ヶ濱の地蔵（一名賽の河原地蔵）上道（新墓）の地蔵、及常安寺境内の子安地蔵は三兄弟である、浄土ヶ濱なる名稱も同和尚の命名せられたものと稱せられてゐる（常安寺現任職阿部文雄師談）



常安寺第二十二世  
現任職阿部文雄師

同和尚は東山天皇中御門天皇徳川綱吉及家繼頃の人で今日より約二百年前に當り常安寺三名僧（五世遠室龍浦、十八世大訥愚禪及七世靈鏡龍湖）の一人で浄土ヶ濱に付て次の様な詩を残されてゐる。

由來梵相備岩邊  
贏得風流九品蓮  
潮音自是談玄妙  
見說海門般若船

同和尚が如何に學徳兼備の名禪であつたかを覗ふことが出来る。尚千疊座敷の上に眞鼎院（神鼎院ならんか）の御座石と云ふのがある、神鼎院とは第四十代南部利剛の事であつて元治元年東海岸巡視の際の御座石と稱せられてゐる。

因に南部利剛は海岸防備のため、東海岸を親しく巡視したる際館ヶ崎鏡岩の砲臺を設けられ又音部



(月山の東面の山腹)に黒船見張番屋を設けられた、今に其の跡が残つてゐる、是等から推測しても千疊座敷の上の御座石は神鼎院の御座石ならんと推せらる。

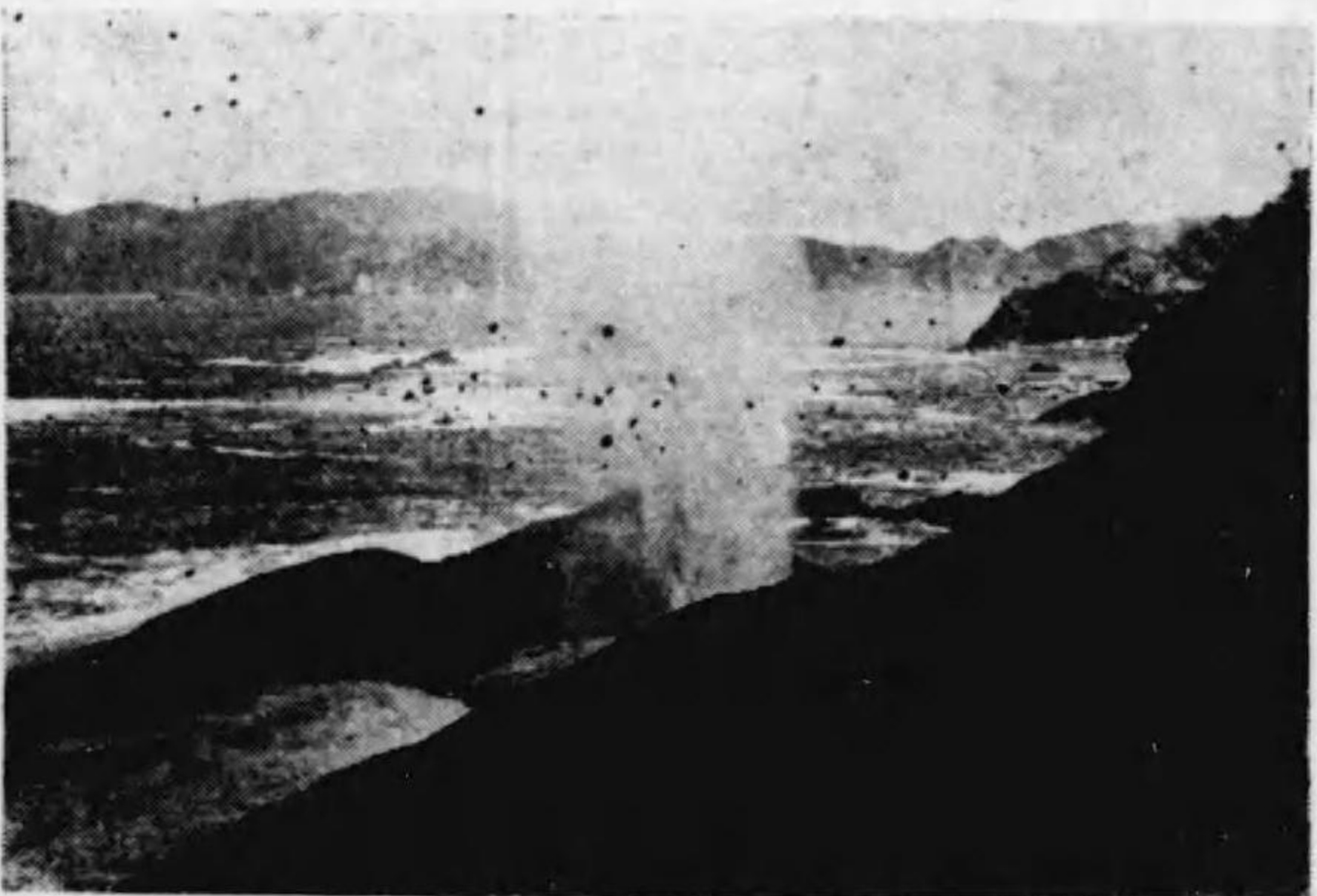
### 一、潮噴穴 (驛より北約一里半海岸)

潮吹穴は日出島の對岸陸地崎山村日出島部落にあり、時々其の巖穴より潮沫を吹き上げ其の壯觀眞に奇絶である星冰陽先生は淨土が濱より此れを望見して次の如く詠まれてゐる。

遙見煙霧貫巖嘯轟々 驅雷驚鷗鳥 忽疑鯤鯢噴 鹽沫  
一躍蹴浪天池趣  
以て其の一端を覗ふことが出来る。

### 三、蛸の濱 (驛より海岸約廿三丁)

鎌ヶ崎の蛸の濱町を過ぎ心公院を左に見て小坂を登れば此處が即ち蛸の濱である、附近一帶海蝕されて、或は岸に或は高く所々に洞穴が穿がたれてゐる。殊に濱の中央に屏立し幾十丈の上空に僅かに



潮 噴 穴

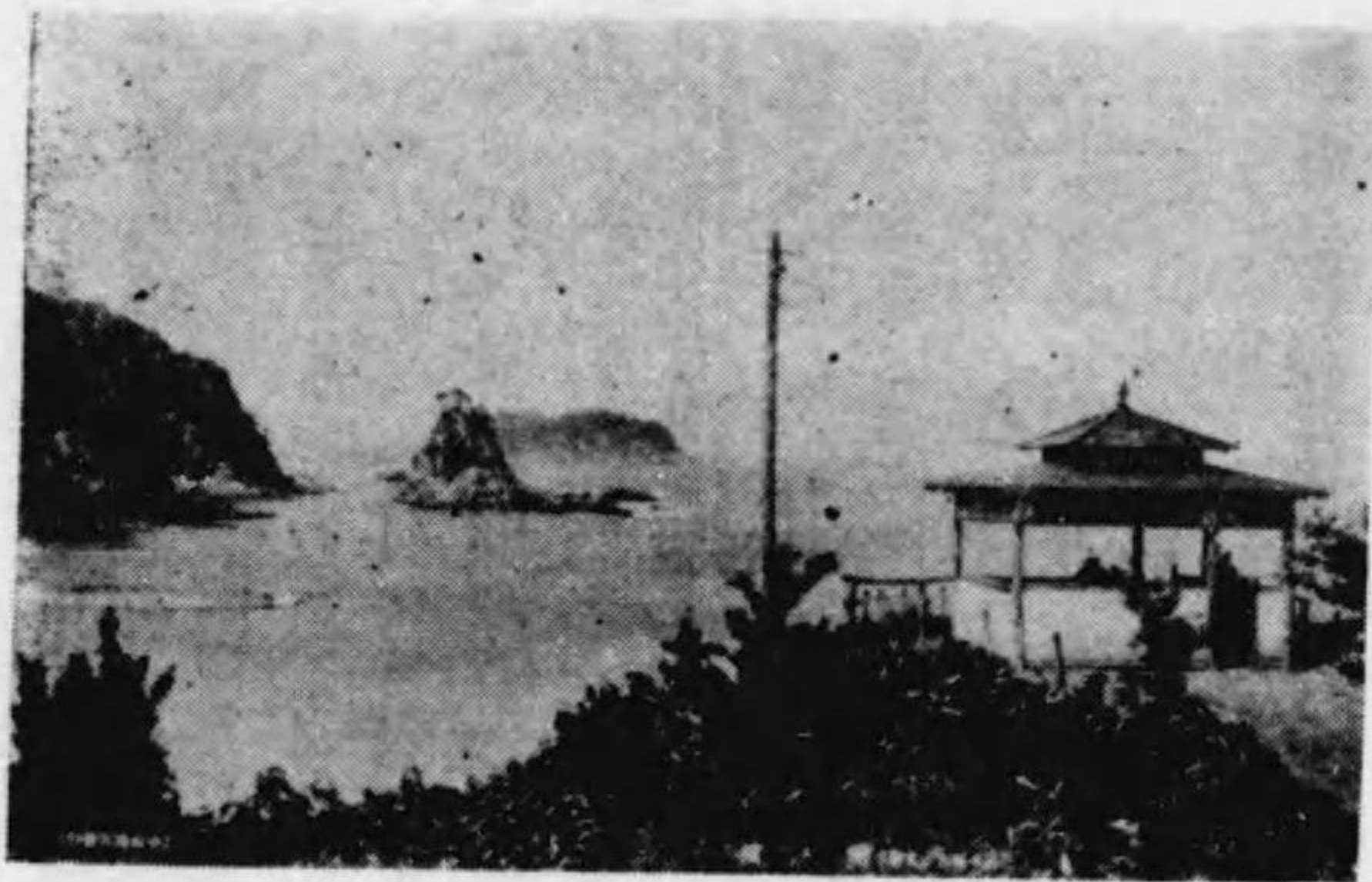
繋がれた巖岩は正に天下の奇觀と言ふべきである、濱の前面少しく左によつて砂子島横はり濱に一層の景觀を添へてゐる、更に白波岸に散る日出島を望見する時眞に快哉を叫ばざるを得ない。

### 心公院と觀音像並津浪供養碑

蛸の濱の入口の處に心公院と云ふ曹洞宗の寺がある、大きな寺ではないが、此の寺に黒森神社の御本尊であつた立派な觀音様があるので有名である、此の觀音は黒森神社の研究上最も重要な史料で、多分此の像の中に何か書いたものが必ずあらんとは専門家の見る所である、高さ三尺位、正觀音の立像で、寶冠の飾りには、菊花御紋章が見へてゐる。尙當寺境内に明治二十九年津浪の供養碑あり高さ七尺巾四尺位の自然石で碑文は當時の郡の書いたものと傳へられ和文で判り易く、當時の阿鼻叫喚の狀を記してゐる。

### 四、藤原、磯鷄の松と月山

長汀曲浦、老松林立した海濱に藤原磯鷄の海濱がある、海濱學校で有名な黄金が濱も其の續きである、其の對岸が



名 勝 地 蛸 の 濱



月山(一名御殿山)て此の間に深く灣入したは宮古灣である、此の砂濱から嶽ヶ崎浦の眺望も良く、夜間烏賊釣りの船の燈火明滅を沖合に見るのも宜しく、月山の明月を賞するに可なるは勿論夏期は海水浴場として知られ將來別荘地として着目せられてゐる。尙御殿山は椿が名物の一つであつて次の如き俗諺が残つてゐる。

あれ見やしやんせ御殿の椿

枝は榮へて花は八重

## 砲臺遺蹟

(驛より東北約三十丁)

館ヶ崎及鏡岩には明治維新前砲臺のあつた遺蹟がある、館ヶ崎の砲臺場は嶽ヶ崎町白木山東方の山腹にあり今は唯だ其所に平坦な個所を存するのみなるも昔時



藤原海岸

は砲手並に役人の出張する番所あり砲數門を備へてゐた。此處は對岸に月山を見淨土ヶ濱及灣内の風景を一眸に收めて風光甚だ美である。

昔時田村將軍閉伊の夷賊を追討して此地に至るや大猛丸逃れて月山下の鬼形に渡りしが田村磨遠箭を以て此の館ヶ崎より之を射殺したりと云ふ、後此の地に城砦を構へ兵を駐屯して夷狄に備へた、幕末の際英露の船艦屢々我國に來寇せし爲文政八年に至り幕府は沿海諸藩に令して我が海岸に近かける外國船は一切之を撃壊することを命じた茲に於て南部藩は其沿岸重要な地點に砲臺物見番屋を設けて沿岸の警戒をした、此の地方では館ヶ崎乙部下磯の山上及鏡岩等であつた、其後南部利剛親しく東海岸を巡視し宮古鏡岩館ヶ崎に砲臺を設けられた、明治戊申



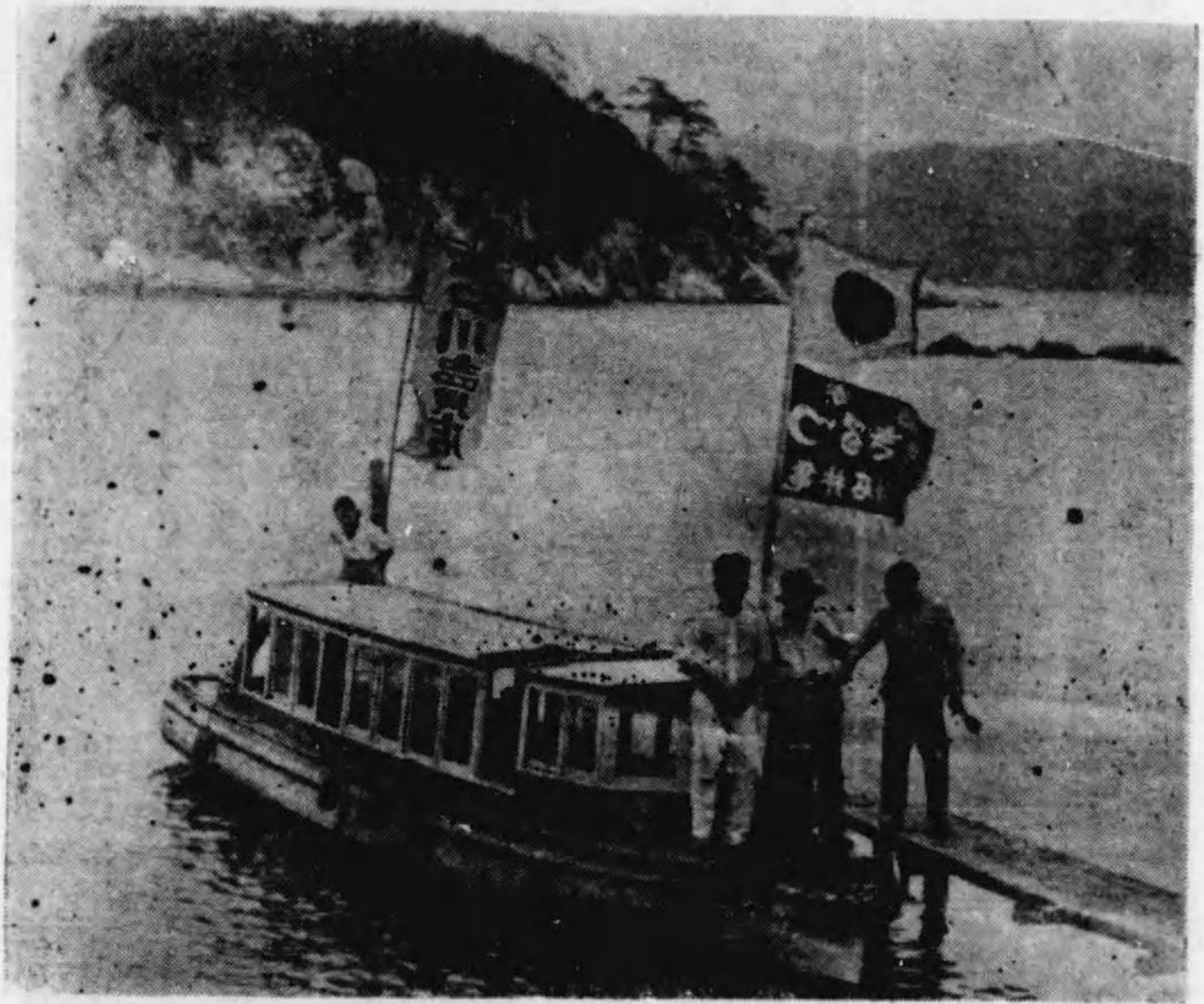
磯鴨海岸



十月秋田藩士某當地を周歴せし報告書の  
一節に曰く

宮古嶽ヶ崎は船着宜しく鏡岩館ヶ崎  
の砲臺あり宮古村は八百軒給人二百人  
嶽ヶ崎戸數六百戸給人五十人防備行届  
候得共給人は農兵様のもの多數なり總  
べて急變の節は一防戦の手當其中遠野  
花巻より援兵の都合なり。

の記事がある、當時海岸警戒の爲め相當  
の防備をしたものであらう、館ヶ崎及鏡  
岩の大砲は最初木製の大砲で恰も花火の  
筒の如きものであつた、其の當時の火藥  
庫は臼木山々麓日立濱にあり臼木權左衛  
門の所營であつた、其の後鐵の大砲を鑄  
造して各砲臺に備へ付けた今大杉神社境  
内忠魂碑前の臼砲の如き大砲は即ち其の  
一である、此の大砲はボンデンと稱し館  
ヶ崎對岸の追切おひきりに標的を立て屢々實砲射



淨土ヶ濱遊覽船

撃の演習を行つたものと云ふ。

鏡岩の砲臺は即ち今の宮古測候所のある場所て其の當時此の山は夏保峠に續いてゐた其の東岸の岩  
壁に大なる岩洞ありて其の形圓く南北に貫通して自由に船の交通が出来た、之を遠くより望めば恰も  
一大明鏡の如く降雨の際は船を入れて之を避くるの便があつた。又其の附近に牛石べいしとて臥牛の如き大  
岩があつたが、今回港灣修築工事の爲め其の名所も切り崩すの厄に會つた。

桔梗咲くや戊申の役の砲台場  
青嵐や短艇ポットて廻る鏡岩

蔗園  
具村

## 閉伊氏と七社明神

往時蝦夷の巢窟たりし本郡が初めて日本文化の惠澤を受くるに至りたるは桓  
武天皇の朝坂上田村麿の東征軍が閉伊の蝦夷を掃蕩せし時代を以て其の第一紀と稱すべく主として眞  
言天臺等の僧侶に依て宣傳されたる佛教文化であつた、其の第二紀は閉伊頼基が中根城に館を築きて  
本郡を統治せし時代である。當時本郡は平泉文化の圏内にあり山に金銅鐵を産し海に魚鹽豊にして其  
の物資供給の一寶庫たるの位置にあつた。茲に頼基入城以來恩威並行の武門政治を以て郡内を統治し  
大に鎌倉文化の移植に努めた。閉伊頼基は鎮西八郎爲朝の子で、爲朝が大島に流されて後、島の官令廣  
澤三郎忠重の娘を妻とし男子四人あつた、基頼は即ち其の三男で初め島の冠者爲頼と稱した、爲朝が大  
島に於て自刃の際其家臣に伴はれて島を逃れ江州佐々木高綱の家に寄寓した時に爲頼僅かに九才にし



て千歳と稱した、高綱又深く同情し君臣の禮を以て之を養育した、爲頼武藝に長じ學問を好み殊に騎射を善くした、其青年に達するや武勇祖父に劣らなかつた。此の時老臣近能佐七郎親良は高綱に依頼して爲頼の爲に請ふて閉伊氣仙二郡を頼朝より下賜せられた、爲頼は文治五年の春江州を出發して氣仙唐桑に着いた、それより甲子葛掛等を巡り釜石の板屋の澤に一時住居することになった、此の地に於て爲頼は長男家朝を儲けた、爲頼は領内適當の地に居城を定めんとして和田津見の神に祈願をこめた、其七日目の明方夢に二十尋餘の大蛇枕頭に現れ「爲頼よ汝の心願空しからず是より北に當つて澁田の庄と云ふ所あり往きて其要害を見立て子孫永く住むべし我は汝が父爲朝なり」と云つて消へ去つた、爲頼は即ち此の靈告に従ひ板屋の澤を去つて建久二年三月宮古に着いた、それより宮古館を居城と定め澁田の庄に築城すべき場所を尋ねた、近能佐七郎は今の根城が最も要害無双の地なりとして其の繩張に従て此處に築城することに定め根市の坂の下に假小屋を建て、移住した體て三年の後新城が落成したので此處に移つた、當時は根城を以て本丸と爲し田鎖を以て其の府内とした東海第一の名城であつた、爲頼の奥方は佐々木高綱の娘音羽姫で常に藤の花を愛し藤島より白藤を採つて之を宮古村藤原に植へ又城内田鎖三合並にも植へて觀賞せられた其の藤が近年まで大なる枯本となりて残つてあつた。

後鳥羽天皇の建久二年十月頼朝は上洛して爲頼家朝父子に勅宣の詔答相濟み爲頼又參内して儀式を全ふして歸つた。爾來爲頼は閉伊尾形陸奥守頼基と稱し、北は八戸閉伊口より南は氣仙の海岸まで其の一帶を領し領内に四十八館を有して之を近親十三家を以て統治せしめ、要所に重臣を配置して善政を布いた爲里民大に其の德望に服し其の勢四隣を壓するに至つた、後頼朝の秀衡及大河内兼任を討伐せし功に依り阿曾沼廣綱を遠野郷に封ぜし際現時の豊間根以南は阿曾沼領に分割せられた。

宮古區裁判所



宮古區裁判所  
奥田判事

頼基は承久二年六月十五日根城に於て行年六十三歳を以て薨去せられた、依て一時根城に葬り後遺命に依り田の濱に移し後年更に又釜石の尾崎に遷宮せしと云ふ頼基薨去の後其家臣等七名追腹の願があつた其の文面に曰く

不肖等先君父子の御恩德篤き事海より深く山より高し之を報ゆるに何を以てかせん黄泉の御供を願ひ鴻毛の命を果たすに如かず宜しく御免許ある可し

恐惶謹言

頼基の嫡子家朝之を見て其忠誠に感じ暫く感慨に沈んで居られた、體て涙乍らに之を許し依て近能親良始め同志七名は先君に殉じて追腹を切つた、時に承久二年十月十五日であつた、後此の忠節の士を夫々神に祭つた、即ち近能親良を田代の國境明神に、

太田島忠速を松山明神に、廣澤忠季を老木明神に、安蘇重休を川井明神に、猪狩諸深を川内明神に、明石宗時を小國明神に、石關兵庫を刈屋明神に祀つた閉伊七社明神は即ち是である。

荒神社 頼基の遺骸は一旦根城に埋葬されたが、後之



を船越村の田の濱に靈廟を造り大明神と尊稱し、厚く奉齋した即ち今の荒神社である。當時源義朝の孫和州長谷の天授院僧正は其の別當であつた。又正應二年に至り「我は其昔閉伊氣仙二郡の領主なり今兩郡の境に祠を建て、守護の神とせよ」との御神告に従ひ新宮を釜石浦の白濱に建て天授院僧正導師となり、盛大なる遷宮式を行つた尾崎縁起中にある「尾崎御室は閉伊郡の舟越浦田の濱崎は本宮なり新宮は釜石村也」とあるは是である。

荒神社は現在素盞鳴尊を祭神として七月二十五日が其の祭日である、其の縁記にも享保二年六月の勸請とあり、頼基の事蹟と一致せざる點がある、然し此の村は南北朝時代南朝方の歴史に深い關係を有する土地であるから徳川時代屢々あつた神社改めの際、故あつて其の古記録を失ひたるものなる可く、現存せる天保十五年正一位を授けられたる位記や當時賜りたる孝格天皇の御璽のある御神宣等は、正に此神社の神格の高貴なることを證明するもので黒森神社眞崎明神、氣仙唐桑崎の尾崎明神は共に相互關係ある神社として古來篤く尊崇せられてゐる、境内の南方小高き所に約四坪の古墳がある周圍に石柵を繞らし其の中央に徑二尺位の自然石がある、里人此處を本宮と稱し閉伊頼基の御墓だと云つてゐる。

### 華嚴院

閉伊頼基は根城の館を築城せし頃山門の僧某來つて館の麓に一寺を建立した、頼基は父爲朝の爲之を菩提寺となし、其の法名華嚴院殿鎮西府大守持劍法空大貴士の院號を以て其の寺號とし、其の地名洞の澤を取つて山號とした、始は天台宗であつた當時頼基は先祖代々追福の爲修羅念佛を始めた、今日此の地方に行はる、劍舞踊りは即ち是である。

閉伊氏の一族に大島爲政と云ふ人があつた、頼基の四男爲家の孫裔である、閉伊氏十三家の一で田嶺殿と稱せられた、爲政は文永年中菩提寺華嚴院を根城より花原市に移した、後約三百年を経て延徳元年八月田嶺氏は其の屋敷跡に梵刹を再建して遠州掛川なる雲林寺四世却外長現禪師を志波の源勝寺より請じ、天台宗を曹洞宗に改め其の末寺となつた、其後天正の頃田嶺氏は南部信時の爲めに滅され其の臣楢山氏の采邑となつたが、楢山氏は寺領を寄附し再興を圖つて其菩提寺と爲した。當院は花原市村畑の下にあつて山を脊にして南面し閉伊川を隔て、根城館と相對し、往時は館に直通する大參道があつたと云ふ、境内老樹古杉鬱蒼としてさながら古刹の面影があつた、大正七年山火の災に遭ひ堂宇悉く烏有に歸し其の後再建して今日に至つた、本尊は釋迦如來て本堂の外、庫裡、鐘樓、山門、觀音堂及土藏がある。又當院九世洞堯の正保四年に創設せし梵鐘がある其の銘は前任高野山法印有舜の撰文である、寺寶としては慈覺大師の藥師如來、爲朝の源氏小半の茶碗、開山長現禪師の紫衣並に眞筆（明應九年二月三日寫本）助包の名刀等である。

閉伊氏は建久年間本郡根城に城府を定め其領内に仁政を布いて地方文化の先驅となり南北朝戰亂の時代に於ては一族多くは南方に屬して忠誠を抽んじたるも、後村上天皇の正平十年閉伊十郎光親に至り（頼基歿後百六十餘年）遂に南部政行の爲に滅ぼされ今日纔に其居城たる根城城趾を止むるのみとなつたが、然かも閉伊氏の草創にかゝる其の菩提寺華嚴院は開山以來茲に七百年、代を重ねること三十二世長現禪師及山月秀關等の名僧出て、法門益々榮へ、法孫郡内に普く其末葉十一寺を算するに至つた、今根城城趾に立つて往年の閉伊氏を追懐し菩提寺華嚴院の法燈燦として彌や榮ゆる現狀と相對比し其の存亡の跡を知るもの只閉伊川あるのみ、閉伊氏は實に地方文化史上特筆すべき中樞をなすものである。



## 浮島明神

130

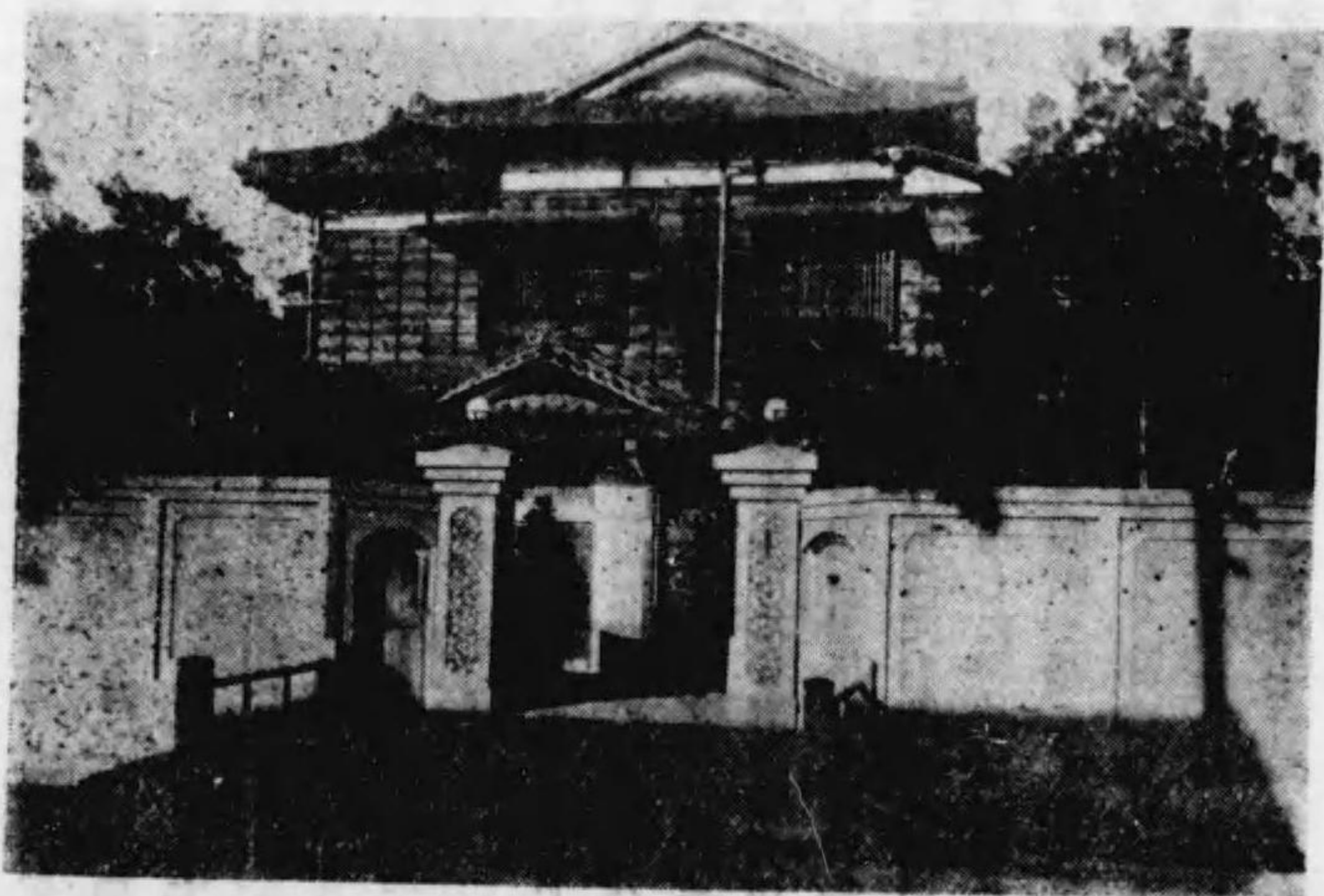
磯鷄村芦瀉は黒森神社の御祭神是津親王の御遺蹟で著名である、即是津親王が御入水の時此の海濱を通られ御足跡を其砂の上に印せられたので此處を足形アシガタと稱へたと云ふ、又其南方なる神林カミバシの稻荷神社は是津親王の休まれた御假宮の舊趾で、又田甫を隔て、西方の岡に茶畑チヤバタと稱する所がある。此處は是津親王のめし上がった御茶を採つた畑だと云ふ。

芦瀉の南方高濱峠の登り口に小さな沼がある、其の傍らの木立の中に赤い小祠がある即ち浮島明神である、往時此の沼に牛の如き主が住んでるて行人を惱まし、殊に赤い色のものを着て此處を通行する者がよく襲はれたと云ふ、それ故に此の村の人々は赤きものを禁物とし着用しなかつた「神林の赤手拭持つたが病ひどんかぶれ」の俗語が今尙残つてゐる、昔此の沼の傍に柳の老木があつた、或る時馬子が馬を引いて其傍を通りかゝるや、馬は棒立になつて一步も歩けなかつた、又或る時市日歸りの一杯氣嫌か鼻唄宜しく通りかゝるや、びつたり唄を止められた、又或る時旅僧が鉦を叩き乍ら此處を通ると、柳の前で鉦の音を止められた、旅僧は此の化け柳の話をして里人から聞き其の靈を祭る可く薦めた、村人等は其の柳を伐り其の木を以て神樂の面を作り、祠を建て厚く供養した即今の浮島明神は是である。其柳で作つた面は今でも寶物として残されてゐる。

此沼に往古より松の生へた浮島があつた、其の大きさは二三尺長方形の小島であつた此の浮島が年に依て或は沼の北岸に寄ることあり又西岸に漂ふことあり、移動の方向が變つた、里人は之に依て其の

年の豊凶を卜したと云ふ。

此の浮島の移動する現象に就き先年學者間に論戦があつた、即ち橋南溪の「東遊記」にある出羽の國大沼山の浮島に就てであつた、當時東北大學理學部長日下部四郎太博士は其原因調査の爲其沼に五晝夜滞在して嚴密に調査を遂げた、其結果浮島の遊動は要するに池水温度の昇降、氣流轉換等に伴ふ一種の物理的現象に過ぎずと片附けた、其後神靈學者石塚直太郎氏が親しく浮島神社に參拜して其の現象を拜觀し博士の説を論駁した、即氏は「たとへば人の歩行し移動することは足其のもの、物理的運動たるや言ふ迄もなし、然れども其の運動を起さしむる眞因は人の心そのものである、即ち心靈の發動に依るものである、浮島の遊動は物理作用たるは論なけれども、其の運動を起さしむる眞因は嚴乎として他に存すべきである。即吾人は此の浮島の遊動を以て超科學的神靈現象と爲すものである(氏の論説の大意)と謂ふのであつた



篠田米吉氏宅



此の沼は天武天皇白鳳年間役の行者此處に參籠して蒼塊の神を勸請せし頃より其の奇異の現象を有するを以て全國に著明であつた、今は縣社浮島神社として里人の信仰又特に厚い。此の芦瀉の浮島は恰も大沼山の浮島の如き奇異なる現象を有し、學問上興味ある沼であつたが、惜むらくは明治二十九年の大津浪の際不淨物が流入して以來、其の現象を失ひ浮島も自然に消滅して再び現れない。

## 農神内館元右工門

幕末文化文政の頃、南部藩士四戸甚之丞は其の領邑なる根市老木長澤等の村民より苛税を取り立て大に之を苦しめた、其村の農民等は協議の結果内館元右工門を代表として當路に其の税政を訴へ苛税免除の歎願をした、官は幸にも農民等に同情し其願を容れて四戸氏の采邑を取り上げ之を藩の直轄とし且つ特別の憐愍に依り十年間貢免除の公約を與へた、三郷の農民は大に喜び、元右衛門等の功勞を感謝した、然るに元右衛門は假令村民の爲とは云へ、官に強訴を敢へたので、早晚其のお咎めを蒙るべきは當然である、依て村民等は密かに彼を仙台に逃がした、其後同村某は元右衛門の匿れ家を訪ね甘言を以て彼を誘ひ、密かに之を代官所に告げた、代官所は直に彼を逮捕した、彼は一年の間獄中に辛酸を嘗めてゐた。結局彼は強訴の罪許すべからずの掟により無情にも藤原刑場に於て斬罪に處せらるゝこととなつた。文政十年六月九日彼は「ほのく」と野地もいつも花ざかりの辭世の句を残し從容として死に就いた村民等は彼の遺骸を申受けて長澤村神倉が澤に葬り堂宇を建て、長元神社と尊崇した、又お墓は北川目の内館家の墓地にもある、高さ二尺餘の自然石に一峰寛信士行年七十一才と

右の辭世の句とを刻んでゐる。又北川目の劍舞は元右衛門の供養の爲に出來たものと云ふ、その舞ひの所々に南無阿彌陀佛を唱へるのが特長で祭日は彼の命日なる六月九日である、明治二十七年六月三郷の村民等相議して其碑を建て、長くその事蹟を後世に傳へんとして碑文を山崎鯨山先生に請ふた然るに其後種々の事情により碑を建てる事が出來ず今日に及んでゐる鯨山先生の碑銘の稿は左の如し

### 農神内館作右工門君碑

(原文漢文)

内館元右衛門君は四戸甚之丞ノ采邑閉伊郡長澤村ノ人ナリ家世々農ニシテ清三郎ノ三子ニ出テ同性長八ノ家ヲ嗣ク天賦正直慈仁ニシテ膽略アリ人皆服ス主召シテ家臣ト爲シ俸若干ヲ給シ其家政ヲ掌ラシム君固ク辭シテ聞カス乃チ節儉ヲ主トシ拮据計畫稍々舊弊ヲ革タム常ニ甚之丞ハ奢侈ニシテ其賦歛ニ厚キヲ憂フ有ル時面陳諫爭ス甚之丞甚ク之ヲ喜ハス同僚ニシテ秘ニ君ヲ談スル者アリ甚之丞大ニ怒ル其罪ヲ捏造シテ以テ獄舎ニ繫ク君頗ル辛酸ヲ嘗ム村人其ノ冤ヲ官ニ訴フ數日ナラズシテ許サレ郷里ニ歸ル自ラ歎ジテ曰ク我レ不敏不能ニシテ主家ノ弊政ヲ革メ翻テ主ノ怒ニ觸レ囚獄ノ辱ニ罹ル門ヲ閉シ爵々トシテ樂マサルコト久シ甚之丞ノ奢侈ハ舊ニ依リ横政暴斂一年ニシテ民大ニ苦シム君ハ其ノ殄瘁ヲ坐視スルニ忍ヒス會議スルコト再三衆皆君ヲ推シテ其事ニ任ス君謂ラク是大事ナリ強訴セザレハ則チ成ラザルナリ先ツ書ヲ以テ數々宮古代官所ニ訴ヘ四戸氏ノ采地ヲ脱去センコトヲ請フ代官所ハ因循ニシテ之ヲ當路ニ申告セス徒ラニ説諭ヲ加フルノミ文政九年六月三日村民一百餘人奮起シ議ヲ決シテ曰ク代官所因循此ノ如シ何レノ日カ凍飢ヲ免レ得ンヤ糧ヲ包ミ錦ヲ荷フテ長澤河原ニ集合シ方ニ途ニ上ラントス代官所豫メ其ノ期ヲ探知シ急テ盛岡ニ報ズ報至ルヤ官數人兼行シテ馳來シ其衆ヲ田嶺ニ



抑留シ説クニ恩威ヲ以テス同七月遂ニ四戸市ノ采邑根市老木長澤ノ三村ヲ收メ命シテ御藏入リト爲ス御藏入りハ則藩ノ直轄ナリ三村ノ民大ニ喜ヒ更生ヲ叫ビト云フ而シテ官ハ君ヲ以テ強訴ノ首謀ト爲ス法ハ許ス可ラス獄ニ囚ハル、コト一年宮古村藤原刑場ニ於テ斬首ニ處セラル實ニ文政十亥年六月九日ナリ三村ノ人民爲ニ堂宇ヲ建テ秘ニ崇メテ農神ト爲シ祭祀絶ヘサルコト七十年コノ頃其堂宇廢壞セシヲ以テ更ニ議シテ石ヲ建テソノ事績ヲ記シ以テ之ヲ不朽ニ傳ヘント欲シ余ニ其ノ銘ヲ囑ス

銘ニ曰ク

主ヲシテ節用セシメ

其ノ民ヲ愛恤ス

諫ムレドモ行ハレズ

猶是レ忠臣

暴斂シテ止マズ

民怨リ天怒ル

首謀強祈ス

罪ヲ我カ身ニ委ス

志望斯ニ達ス

又是レ仁人

枯草忽チ活ク

屈虫始メテ伸ブ

噫君死セス

祭りテ以テ神ト爲ス

神倉ノ澤

藻蘋絶ヘス

報徳誰カ遺レン

磨シテ礪カズ

千古赫々

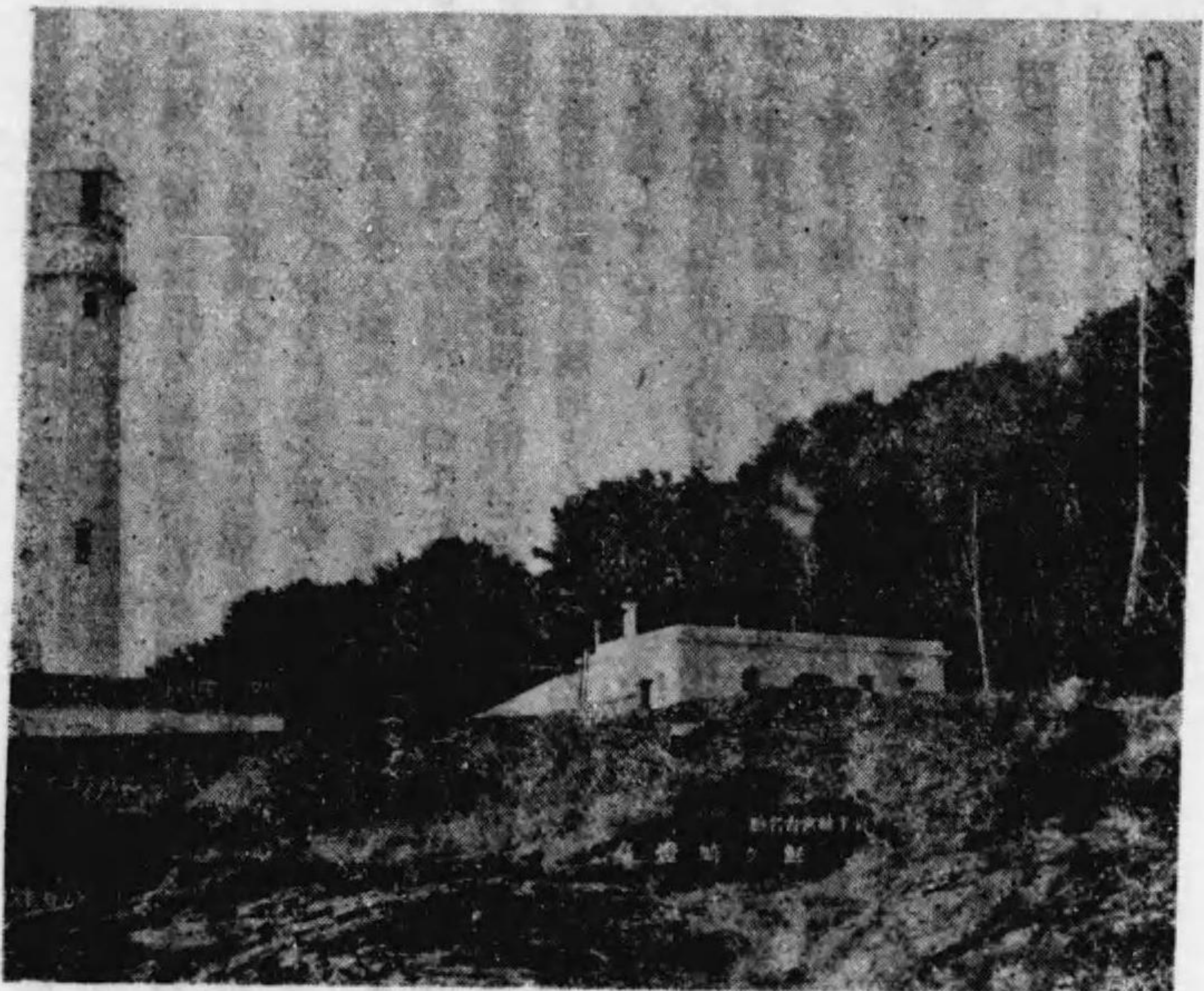
磨シテ礪カズ

明治甲午夏六月

鯨山崎吉謙撰

### 駒形神社

後鳥羽天皇の文治年間源頼基は閉伊の押領使に任ぜられ閉伊頼基と稱した頼基は源爲朝の三男で佐々木高綱に縁り頼朝に謁し奥州閉伊郡に封せられた頼基は中根城に館を築き、閉伊郡海岸地方一帯を領し土民の信頼又厚かつた、頼基の奥方は佐々木高綱の娘音羽姫である、姫は本國江州に居りし時より常に乗馬を好み愛養の名馬があつた、夫君が奥州に下られたので姫も亦遙々其の任地を訪はれた然るに或る日其の愛馬が古里に逃れんとし豊間根村に脱走した。村人等は之を草原に逐込み火を放つたので馬は猛火に包まれ遂に焼け死んだ音羽姫は之を御覽せられて深く悲み玉ひ厚く葬られた、即ち



鯨ヶ崎燈台



津輕石村藤島の駒形神社は是である、其の當時姫の愛馬を繫いだ所を後世繫村つなまと名づけ馬の鈴を祭つた所を鈴の觀音と稱して小さな祠が現存してゐる尾崎縁起の中に

十二神の麓に三字を造立し玉ひ馬頭觀世音と號し奉る郷民等早世神と云ふは是なり早く死したることを悲み早世神と云ふ時に頼基の奥方悲みに堪へず彼の里に立越させ玉ひ懇に弔ひ玉ふ然るに此の里に白藤多く有りけるを供奉の人々に掘らせ歸り玉ふ今云ふ藤原町に植させ玉ふ依て藤を掘りたる所を藤島と云ひ植へたる所を藤原と云ふ。

とある後藤島に有志があつて社堂を寄進し牛馬の安全を祈つた其子孫安兵衛の時神祇伯白川家に依りて神璽を勸請し御蒼前みそうぜんと稱した後明治に至り駒形神社と改稱した往時十二神山を中心とせる此地方の村々は奥羽有数の馬産地として名聲を拍し殊に南北朝戦亂の時代に於ては南朝方の馬匹供給地帯として重きを爲してゐた。

大澤牧場は現在の大澤村豊間根村津輕石村重茂村に跨る十二神山を中心として附近一帯一大牧場あり大澤御牧場と稱し官方に屬して多賀國府の支配を受く隣接の赤前重茂大澤には閉伊光頼の一族居りて吉野に屬し八戸南部を援く當時の御牧馬の遺跡として十二神山に觀世音を祭祀し又山麓の藤島と稱する所には牧馬の守護神たる蒼前様と稱する駒形神社あり今尚例祭は盛大に施行せらる當時の古文書を左に

閉伊郡内大澤村御牧馬並殺害追捕以下狼藉事

石見左近大夫有資申狀二通副守常解狀等如此子細見狀山田六郎所行云々急速令尋沙汰任實正可被注進之由國宣候也仍執達如件

建武元年三月三日

南部又次郎殿

大藏權少輔清高

(以上郷土史家鈴木忠次郎氏説)

右の文書は建武年間山田六郎なる者大澤牧場を脅掠したる爲時の國司北畠顯家は國代南部師行(又次郎)に命じて糺斷せしめし國宣で當時此の地方は馬産地として多くの牧場があつた一證と稱すべきものである。又音羽姫の御乘馬は「本と藤原邑の與兵衛と云ひし土民の馬屋より出てたり」とも記されてゐる古來本郡内には多くの牧場を有し各戸亦競ふて名馬を産出せんとする氣風を有するが爲其の守護神たる當社は此の地方一帯の信仰特に厚く、其の祭日四月二十日には郡内各村より美麗に装ひたる人馬繹絡として參詣し其の歸途には繪馬を買求め各自其の厩に掲げて馬神を祭るを以て慣例としてゐる。當社の境内に蹄痕鮮かなる平石がある、是音羽姫の愛馬の足跡だと云つてゐる又藤の老木がある當社の近くにお藤の社とて古き小祀がある、其の社前の杉と枅の大木に五六丈餘も高くからみ付きたる大藤がある。數百年を経たものと稱せられてゐる其の開花の美觀は蓋し郡内第一である古來此の村は藤の名所として有名である。

## 鞭牛和尚修道供養碑

宮古町築地通り七戻りに鞭牛和尚の供養碑がある、此處は元愛宕神社の登り口に當り百數十段の高い石段のあつた所である、碑の高さは五尺位の自然石であつたが、今は折損して其基部丈けが残つてゐる、碑銘も亦「宗六世」の三字を存するのみだ、鞭牛和尚は本郡刈屋村和井内の人で幼にして上閉



伊郡鶴住居村常樂寺の徒弟に入り後延享四年七月七日上閉伊橋野鷄石山林宗寺第六世の法燈を繼いだ名僧である、元武士であつたが故あつて佛道に歸依したものだと言ふ説もある。

和尚は閉伊郡内の道路嶮惡にして交通甚だ困難なるを見るに忍びず遂に道路開鑿の大悲願を發し自ら鐵錐を揮つて岩を碎き或は岩窟に起臥して只管工事に努力せられた、當時和尚の開拓せし道路は閉伊川街道、栗橋村と鶴住居間、大槌と釜石間及澤内街道等である、其の道路普請中和尚が庵を結びし所たりと云ふ大澤村の六角塔の碑文に「普請惡難所百八所人足六萬九千三百八十四人」とある、之に依つても當時和尚が工事の爲如何に苦心せられしかを規うことが出来る。鞭牛會て栗橋鶴住居間開鑿苦心の折、此の地の布引瀧より一軀の觀音像を得、和尚奇瑞となし御堂を建立し、其賽錢の上るを以て費用となす、此の像栗林に現存する三角形の石像なりと、又和井内村の藥水湯は即ち和尚の開基て古來其効驗顯著なる爲此の地方の入湯者に歡迎せられてゐる、往古行基空海等の高僧が諸國を巡錫して道を作り橋を架け池溝を築きて後世長く其德澤を讃仰せらるゝが如く、鞭牛和尚の道路開拓は當時此の地方の人々より悉く隨喜喝仰せられたことは今日郡内所々に建てられてゐる和尚の修道供養碑に依つても之を知ることが出来る。然し和尚の閩歴に就ての記録が餘り傳つてゐないので其詳傳を知ることが出来ないのは遺憾である、今川井村川内の流月庵境内にある鞭牛和尚修道碑陰記には次の如く記してある。

陸中國閉伊川は源を甲明神の岳に發し風曲迂回して宮古港に注く沿岸二十里概ね斷崖絶壁多し此の岩を鑿ち此の川に沿ひて一條の垣路を開き岳を踰へて盛岡に至るものを閉伊川街道となす、陸の國たる往古は蝦夷の巢窟にて絶えて文籍の徴すべし土人の口碑に據れば源爲朝の子頼基來りて閉伊郡を領し閉伊頼基と稱す、されど當時

は道路なく僅かに狐兔の迹をたどりて村より村に往來せしのみ閉伊氏の南部氏に併せられしは數百年の後なるも當時猶荷馬を通せず荷物の運搬は偏に人の肩背に依りしと云ふ、徳川吉宗の世に至りて天倅人を此の地に生ず名を牧庵頼牛和尚と云ふ、本郡和井内村佐々木氏の産なり郡路嶮惡にして人往來に難み民運搬に苦むを病み乃ち大慈悲と大勇猛心とを發して開鑿の業を起し自ら鐵椎を揮ひて山に倚り川に沿ひ岩石を斫り嶮崖を削る、郡民之を見て隨喜措かず老幼悉く起ちて和尚の命に従ふ、是の時に方り和尚岩石に命じて動けと令すれば則ち動き折けと命ずれば則ち折けて三十里の道路茲に開け荷馬始めて通ずるを得たり、是れ今の閉伊川街道にて行く者其膽力に驚かざるはなし、今の宮古街道は之に改修を加へしものゝみ和尚之に安むせず更に北街道南街道及澤内地方の道路を開鑿して以て人民の便益に供ふ且つ其間は岩窟に栖みて寺に入らず今も長澤の山奥に其の遺跡を存せり、又其の使用せられし支翁鶴嘴の類藏して佐々木氏に在り看る者其腕力に驚かざるものなし、又其地鑛泉を出せしに之を省る者なかりき和尚一顧して鑛泉なるを知り人に誨へて温浴せしむ極めて効驗あり和井内の湯是なり浴する者其智力に驚かざるはなし、晩年に本郡橋野村林宗寺に入りて第六世の衣鉢を繼ぎ寶曆六年丙子の正月十五日湛然として圓寂す、郡民哀感せざるはなし墓は同寺の域内に在り今や世換り星移りて人和尚の徳に負き世和尚の功を忘れむことを懼る是に於て明治三十三年庚子の夏有志の徒閉伊川の邊流月庵の側に碑を建て、記を予に乞ふ予喜びて之を記し且頌するに歌を以てす曰く

世を思ふ君かまことにあら山の

こししき岩もちなびきつゝ

馬くるまといろく御代となりけり

君がいさを石ずゑにして

以上は川合清丸氏の撰文である。鞭牛和尚の遺跡として長澤村に十三佛及洞窟がある。此の洞窟は





宮古坂 古宮 下 商工 會八 副會 長 氏

神倉より半里程上流なる南川目にある、洞窟の入り口に「長澤の南の股の岩の穴本來空の住家なりけり」と和尚の歌を記せる自然石が建ててある。此の洞窟は瓢形にて入り口は方二間位中部に石をたゝみて二室となし奥の間は疊四五丁程の廣さあり暗くして點燈せざれば入ることが出来ない、洞窟の極まる所に「彌陀藥師觀音」と刻める三尺位の洞がある、又此の室には鞭牛和尚の供養碑がある、室と室との中間目通りの岩壁に古鏡の如く光る部分あり、里人は鏡石と稱し其年凶事あれば覗けども此の鏡に映ることなしと稱してゐる。此の洞窟は和尚が道路工事中假寓せし所にして「彌陀藥師觀音」の碑は其の作である云ふ。十三佛は此の岩窟より約二三丁下手にあり川に面せる山腹に幾多の奇岩怪石露出せる個所ありて其の岩頭所々に十三佛の名號を刻したる自然石(大さ一尺位より三尺位)を建てたもので風雪の爲元建てた所になく其の順序も不同である、其の中央平坦の岩石上には「今上皇帝聖壽萬安」「南方火德星君火部」「木寺檀那本命元辰」と刻せる供養碑あり、年號はなく高さ二尺八寸の切石である。それより一段下方に右同大の切石の碑がある、其の銘は「大般若理趣分一字一石血書供養塔」「橋野村林宗六世牧庵鞭牛」「寶曆八寅年五月十五日」とある、此の十三佛は鞭牛和尚の草創だとも云ひ又それ以前より存在せし靈場なりとも稱せられてゐる。今其の由來を詳にすることは出来ないけれども其の山號を浮金山と稱する所は山田關口不動の金湯山と同様往時眞言天台等の一の靈場なりしこと明かである、又四月八日の祭日なる事等より考ふれば此處は藥師如來を本尊とせしものなるべく今南川目の村落の入

り口に元十三佛にあつた御本尊だと云ふ神様が祭られてゐる、其の御姿は僧形の御佛像で里人は之を應相大師と唱へてゐる、或は此の十三佛の御開山ではないかと思ふ。然し其の來歴は詳かでない。

明治の中頃までは老樹鬱蒼と茂りし靈地なりしが其の後全山伐木せし爲め痛く神嚴味を滅殺せられし觀がある。今は藤の名所として著明である。流月庵の碑文中に「和尚岩に命じて動けと令すれば則ち動き折けと命すれば則ち折く」とある。即ち和尚は法力に依て屢々奇蹟を現して里人を驚かした此の點よりして和尚は禪僧と云ふよりは寧ろ行基空海等の如き眞言天台の傑僧の風格を有せし名僧と稱すべきである、元本縣知事堤櫻崖及木縣師範教諭白井鹿山氏の頌詩がある。

- 俯仰偏驚造化工 萬峯兩斷一溪通
- 移山何啻愚公力 有此鞭牛鬪海東
- 閉伊街道上 白井鹿山
- 鑿開峻岨道途修 車馬交通儘自由
- 回憶當年辛苦事 偉功千古釋鞭牛

(以上下閉伊郡志より)

鞭牛和尚の著作として道路普請の日記や和井内湯本縁記及忘想歌千首があつたが、今は唯だ若干の寫本が残つてゐる、當時和尚が使用せし槌は二十貫挺子は四十貫もあつたと云ふ、和尚の生家井内



に血書して死すと、里人土中に鉦音絶へてより和尚遺言に随ひ土中より竹管を抜き取り座禪石を置いて先に造りおきし碑を立つ、經塚と云ふ碑文は次の如し

一四二

- 表 大乘妙典一字一石血書供養塔
- 左 南無文殊師利大菩薩 石切刈屋村常泉  
年六十三五年切
- 右 南無大行普賢菩薩 寶曆五乙亥年六月十日
- 裏 南無本師釋迦牟尼佛 林宗六世  
牧庵癩牛年四十六立之



宮古測候所(國立移管確定)

表紙「宮古港大觀と郷土の名所遺蹟」は下閉伊郡水産會長堀田熊次郎氏の御揮毫下されたものである。茲に謹んで感謝の意を表す。

## 宮古町後背地の産業



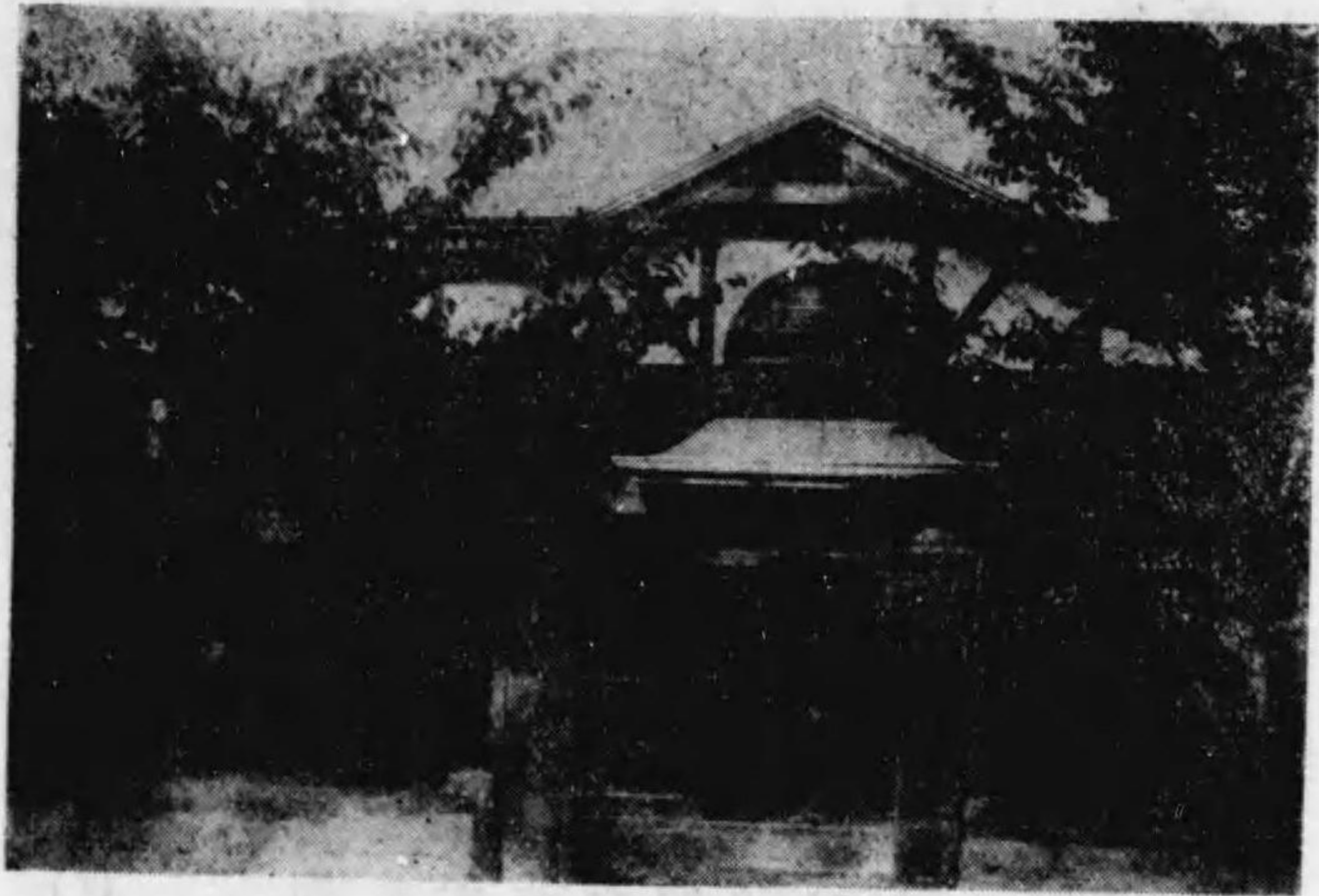
宮古營林署長

加納英一氏

宮古町の第一圈内の後背地は西方山口村、千徳村、花輪村、茂市村、刈屋村等に至り、北方 崎山村、田老村に、南方磯鶏村、津輕石村、重茂村等に及んでゐる。此等圈内に聚落を構成してゐる住民は一萬九千以上に達し、宮古町全住民數と殆んど同數である。即ち中心城市たる宮古町は之れと同數位の住民から成る後背地によりて培養されてゐるのである。而して以上第一圈内の地形を概観するに蝕谷は狭く深く下刻して其の間を閉伊川本支流が流入蛇行して宮古灣に開いてゐる、而して其の方向が宮古に向つて開いてゐることは宮古後背地をして宮古に連絡せしめる上に重要な事である。其の蝕蝕谷たる閉伊川本支流の上流地方は平野として見るべきものなく、僅かに其の下流地方に沖積平野を見ることが出来るのみである。

谷底に沿ふて行けば其の侵蝕斜面を見て峨々たる山岳の如く見ゆれども、一旦其の峻坂をよぢて頂上に達すれば至る處に高原が展開し、或は森林となり或は草野となつてゐる。住民は極く少面積の谷底に散村的聚落を造り廣大なる高原は原始の状態を持續して未だに聚落の發達を見ない。環境斯の如くなるを以て此の地域の住民は蒐集經濟が主で廣大なる森林は所謂彼等の地盤である。





宮古營林署



宮古商專修學校教諭  
松田萬右衛門氏

一四四

森林は温帯林で、すぎ、ひば、等によりて永久の林相を呈し、かつら、とち、くるみ、どろ、なら、はんのき、いたや、かへて、うりはたかへて、けやき、みつぎ、さいかち、ほ、のき、やまざくら、くり、あかまつ等の落葉闊葉樹又は常緑針葉樹を以て一時的又は局部的の林相を呈し之を呈し之等相交錯して千古斧鉞の入らざる處

女林至る處に展開してゐる、此等樹種中ならは薪炭材として品質産額共に最上位を占め其の他の潤葉樹は雜木薪炭材として次位に置かれてゐる。くりは鐵道枕木材として全國稀れに見る多産地となり、すぎまつ等の針葉樹又用材として伐採輸出されるものが多い。

高原草生地

は放牧地に利用されてゐる處もありて春季青草の芽出づる頃より秋季の草枯れまで、牛、馬の放牧が此處に行はれ、後下げて市場に賣却する所謂牧畜業も相當に延びてゐる。

農耕地

としては沖積土至つて少ない爲め、急傾斜面まで利用し、水田少く、多くは畑作で麥類、

豆類、稗、粟、そば等自家用食料を得るに過ぎない、只果樹、蔬菜類の栽培は近時宮古町を中心に花輪千徳、山口、磯鷄、崎山の諸村に相當盛んで、効々優品の生産も見られてゐる。

養蠶

は地方住民經濟中畜産經濟と共に重要な位置を占めて居り後背地住民貨幣經濟を支配する重要な役割を持つてゐる。牛馬及繭の市價如何は後背地の經濟狀態に反應し、其の懷中具合より購買力の如何が直ちに中心都市宮古の商況に影響するのである。

要するに從來交通狀態の宜しきを得ざるより僅かに狹隘な谿谷地の開發を見たるのみで、廣大な面積を有する高原地帯は未だに蒐集經濟の域を脱するに至らなかつたが、山田線の開通によつて、今後此の部分の開發に多大の刺激を與へ後背地の價值をして經濟的に、より一層向上せしむるのみならず後背地の圏内を擴充せしめるであろう。

郡内鑛業の狀勢

山田線鐵道が郡内に延びる様になつて此の方、更にゴールドワツシユの波に乗つて一段と鑛業熱も旺盛になつて來た、本年七月一日現在で郡内鑛業の模様を見ると、試掘鑛區五三、探掘鑛區六、砂鑛區二十二となつてゐる。

試掘鑛區で見ると村別では、小本村に金、銀、銅、鐵、硫化鐵鑛區が二件、小國、川井、門馬、茂





宮古新報社社長 宮古日新報社社長 田徳太郎氏

市、刈屋村に金、銀、銅の鑛區が二十三件ばかりある。普代、田野畑村に滿庵鑛區ありて、之れは日本鑛業株式會社の所有である。又滿庵鑛區は茂市、花輪、千徳村にもありて北海道室蘭の輪西製鐵會社の所有である、田老村に金銀、銅の鑛區あつて日本鑛業會社之を所有し、其他鉛、亞鉛、硫化鐵等の鑛區もある。川井、刈屋村には釜石製鐵所有の鐵鑛區あり、岩泉町にも鐵鑛區がある。小川村には有名な石炭鑛區があり、大川、小川村に金、銀、銅鑛區がある。

町會議員

小笠原孝三氏

明治二十一年五月二日生



男の中の男とは蓋し氏のために作られた文字であるかの様に誠に然諾を重んずる任侠の士である、性飽くまでも勇猛、直言直行して憚らない一面稚氣を藏し親しみ深く町民は小が孝さんと言へば誰れ一人知らぬ者はない。

町會議員、帝水宮古救難所救助長、宮古漁業組合總代、魚商クラブ會長其の他多くの名譽職を兼ね、宮古の水産界に於て巨大な存在となつてゐる。

探掘鑛區は小國、茂市兩村に亘つて金鑛區、及金銀鑛區(前關萬之助氏所有)田老村に鐵鑛區、(ラサ島鑛會社所有)、小川村に門鑛山と稱し石炭鑛區(菅沼明氏所有)、大川村に大川鑛山、金銀銅鑛區(花房齡次氏所有)及山口村に金、銀、銅鑛區(高橋彦助氏所有)等があるに過ぎず。砂鑛區は砂鐵及砂金である、前者は船越村と田野畑村に、後者は門馬、茂市、刈屋、川井、小國各村にある。

### 推奨すべき技術

#### ……船匠と定置漁業……

宮古灣が番船時代北海渡航の日和見港として往古より航海者の間に著名であつた事は上來屢々述べた通りである、宮古港より當時の松前渡航の爲には少なく共當時の一本マスト角帆の帆走船で一週間以上を要したであらう、さらだに北海の荒海を造船技術の未だ幼稚な時代の舟で乗切するには完全なる修理を要したであらうことは想像に難くない。そこで必然的に宮古に技術優秀な船匠が必要になつて来る、此の要求が當港の船匠技術を優秀ならしめた遠因の一つである。

其後西洋型帆船時代となつて石の巻、銚子、東京などに盛んに往復する様になり、當港で之等を造船する様になつてから一段と技術が進歩して來た。當港生れの之等の船は非常に多數に上り、今逐一列擧するは其の繁に耐へぬが、明治時代の代表的な遠洋漁船に東海丸(九十五噸)大正に入つて運搬船東





建網水揚の盛況

丸(八十噸)發動機船になつて長連丸(六十噸)等がある昭和に入つて大型のものは恵比壽丸(九十五噸)妙壽丸(四十噸)等があげられる。

斯ふした経過を辿つて發達して來た當港の造船技術は今後は沿岸漁業の發達に伴つて愈々其の進歩發達を見る事であらう。尙當港造船所をあげて見れば次の如くである。

横田造船鐵工場、<sup>㊟</sup>造船所、金澤造船所、太田造船所、佐々木造船所、三上造船所、中居造船所、若江造船所、米澤造船所

元來宮古は、地形上斷崖が海岸に迫つて山高く海深く、海藻類の繁茂旺盛であることは本邦沿岸中有數である従つて此處に海中の微生物も良く生育し、之を餌料とする魚族も亦棲息多く従つて沿岸を廻游する廻遊魚も甚だ多きは理の當然である。茲に於て天恵の地形と相俟つて沿岸定置漁業の發達著しく其の技術斷然優越、全く全國稀れに見る處である。秋田北越地方、静岡、福島各縣に遠くは大連地方に其の教を乞ふものが多い、宮古灣内定置漁場としては堀田、青磯、一丁目、二丁目、三丁目、四丁目、五丁目、瓜が島、其他數ヶ所あり、更に灣外に少しく出づれば蛸の濱、桎柏内、日出島、姉が崎等の漁場がある。

## 宮古漁場

### 「三陸漁場」は實は「宮古漁場」

所謂三陸漁場と言ふは金華山約北緯三十八度十分から尻矢約四十一度三十分の間のことである。此の間に寒暖二流が合して金華山沖が魚族が多いと通例言はれてゐるも、其の實此の漁場は金華山から北東の方向に當つて居り、宮古から真東に針路をとつた線上が多種多様の魚族の集合點である、三陸漁場と言ふも實は宮古漁場と言ふ方が適切である、實際地圖の上に當つて見ても三陸沿岸弧の中心は

日本食料工業株式會社 宮古工場長

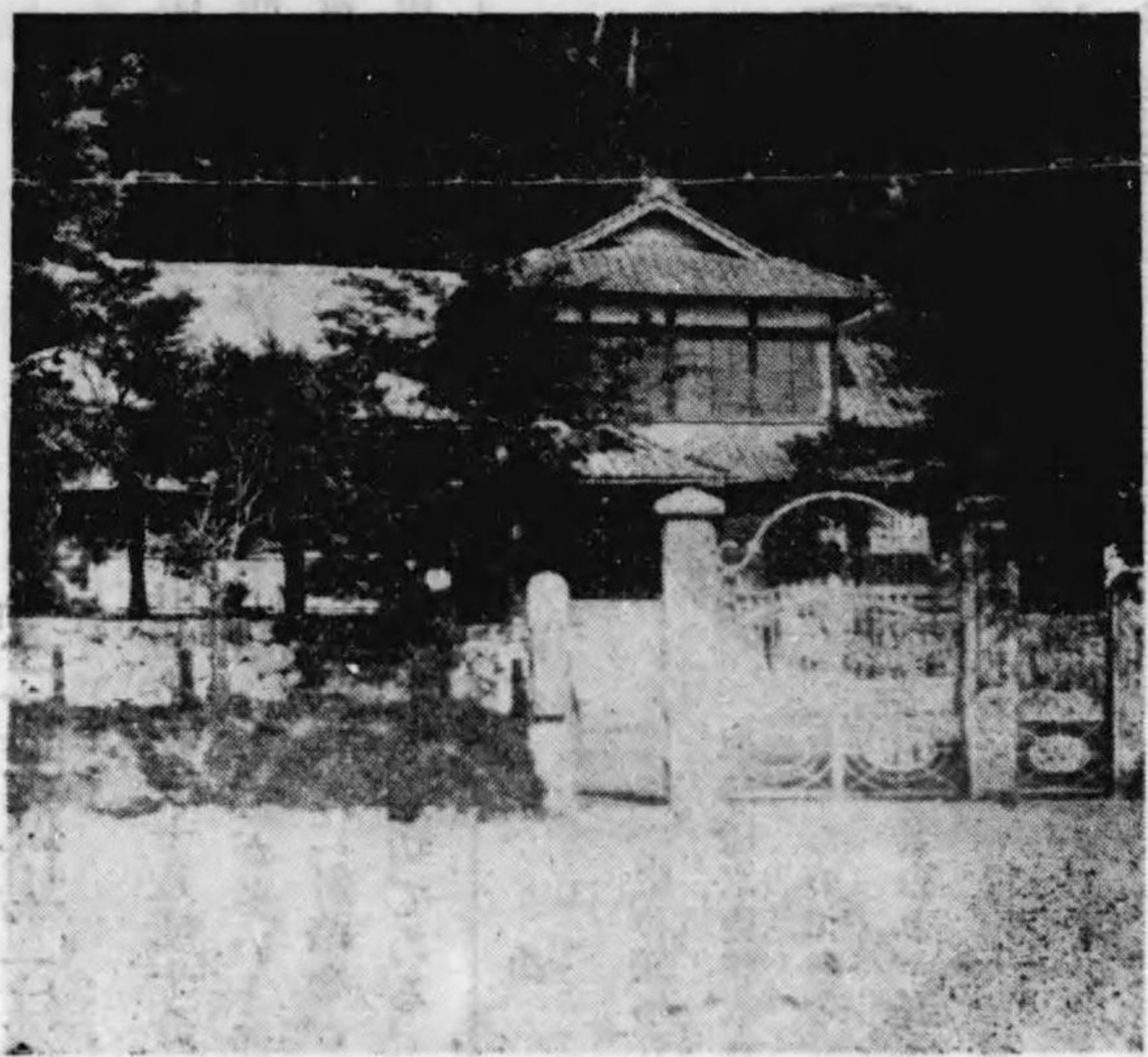
山

本 針 夫 氏  
明治三十一年三月廿二日生



氏は昭和五年五月三陸水産冷蔵株式會社宮古支店長として就任、本年合同水産株式會社となり、更に日本食料工業株式會社宮古工場長となつたのである。三冷時代に於てまへ宮古支店のみは經營に餘裕あつたと言はれ、氏の商才は夙に認めらるるものがある。六尺豊かな巨人しかも温厚人に接し肌觸りの宜い好紳士で現に釜石人會長として會員の信望が厚い。





(設併區管木土古宮會産水伊閉下) 廳支伊閉下



長廳支伊閉下森大

黒崎であり、黒崎から宮古までは僅かに二十哩に過ぎないのを見ても明かである。又實際鯉、めかぢき、まかぢき、もうかの如き

釜石沖に滞留が割合に永い、又鮪でも金華山を通つてから、本縣南部氣仙郡に突き當り沿岸近く廻遊する、例年宮古釜石沖に滞留し黒崎沖合が好漁場となる、鯉にしても春鯉は走り早い、秋鯉は青森

廻遊魚族の實際は此の事實を明かに證明してゐる、さんまに於ても北海道沖から本縣の黒崎沖附近までは其の走り足が遅いが、以南になると足が早くなるので金華山沖を根據に漁獲は出来ぬから矢張り宮古を根據にせねばならぬ、するめは尻矢沖から宮古

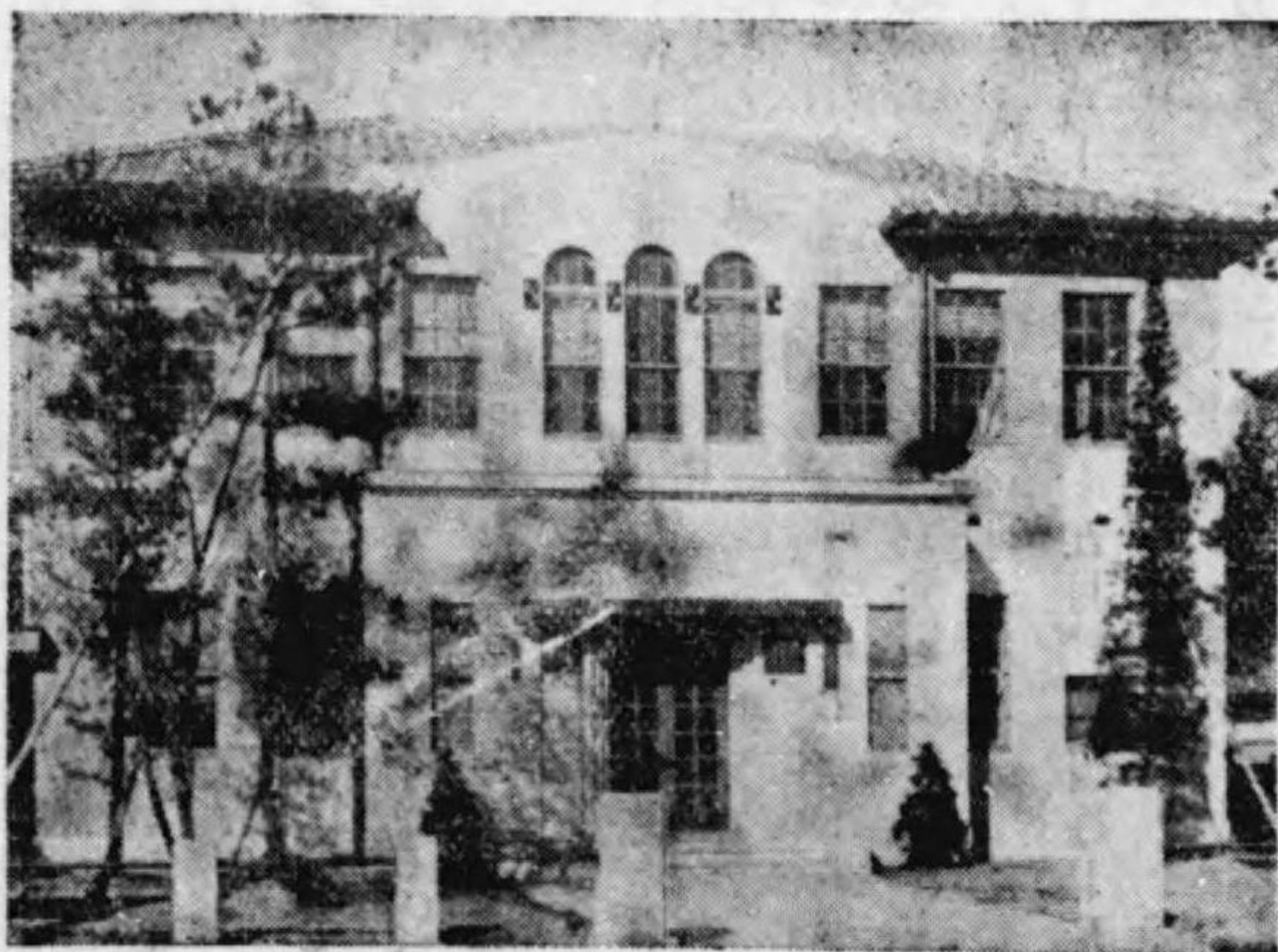
縣沿岸を素通りして久慈の辨天鼻附近から岸に沿つて好漁場を現はし、更に日本一の小壁漁場となつて本縣通過後は沖合に出る、鮭、鱒も殆んど同様で殊に



長署務税伊閉下  
氏郎治菊部阿

も本縣の特産と言ふも可なる状態である、鰻(まいわし)も亦

同様に沿岸に接近して足を留むること本縣が第一である。鱈も同様で産卵の爲めに本縣沿岸に寄つて来て漁獲され宮城縣に入るものは少ない、底魚として目抜け、あぶらざめも本縣の十哩から十五哩附近にがま地があつて此處に終年住んでゐるが、之れも宮古中心になつてゐる。



署務税伊閉下

ひらめ、かれい、そい、の如き磯魚にしても沿岸の地勢と海藻の繁茂状態からして宮古を中心とした南北沿岸が主である。すいき、たなご、ちか、あぶらめ、の如き磯物に至るまで其の分布状態は本洲



の北端になつてゐる。

南方魚として夏から秋にかけて北上するふくら、まさごいわし、へせぐらいわし、たい、あぢの類も先づ大體宮古中心として此れより北方に行くのは少ない、従つて此處に多く集る。

斯くの如く觀じ來れば漁夫の言の如く鯉が宮古沖から鯉ヶ崎沖に接近した年は海の常態の年であつて所謂各種の魚族の移動が本調子の常態で丁度陸上で天候も上々五穀豐穰の年である如く海上も亦豐漁常態の年である。兎に角漁場中心を金華山沖と言ひたがるが實は宮古沖と言ふべきであつて、三陸漁場中所謂宮古漁場は其の隨一である。現に本年の如き寒流が優越して鯉の如き本縣沖合に廻遊せざる年は各濱共に不漁をかもしてるは以上の事實を證明してゐる、從來他縣船が三陸に來るものは釜石中心にやつてゐる様だが、以上の事實から見て寧ろ宮古中心に漁場根據地をかまへる方が有望である事は何人も首肯出來るのである。

尙一言附け加へたきは海岸百尋線は沿岸に接近してトロール漁場としては狭き感があるが、むつ、幸神、目拔けの如き深海魚の漁場を探索せば相當有望であると思ふ。

又磯物としてシイ、アブラメ、メガラ、ゴイチ、ドンコ、アカウオの如き昨今に至つて多少漁夫の省みる所となつたが、他縣に比して漁撈法が粗率であるから將來開拓の餘地充分ある。左に主なる洄游魚期を上ぐれば。

鮭 九月一二月、鯉 六月一九月、鯖 四月一八月、鱈 十一月一三月、三月一五月、鰺 四月一五月、九月一十二月、鰯 五月一十一月、秋刀魚 十月一十二月、鮪 十一月一二月、若布 三月一七月、鯨年中、かぢき 六月一十二月、鰯 四月一十二月、鱈 三月一七月である。

## 漁業根據地としての宮古港

前にも述べた如く宮古は岩手縣沿岸の丁度中間に位して東北太平洋岸に於ける漁業根據地として最優秀の地位にあるばかりでなく、鐵道も已に開通して背面地との交通が完備し港灣修築も昭和十一年度に完成するから商港としても、やがて一躍日本の檜舞臺に出て様としてゐる。

東北地方の地圖を一瞥すればすぐ諒解される如く宮古港を中心として青森縣の鮫港まで一〇〇哩、宮城縣の鹽釜まで一六〇哩、北海道の釧路港まで二六〇哩前にも述べた如く宮古港は宮古漁場の中心である許りてなく釧路、八戸、金華山沖にも近く、出漁根據地として好適の地位にある關係上。廻來漁船にして宮古港を根據地に魚群を追ふもの近時非常に増大して來た、此處を足場として就業することの有益であることは今更多言を要せず事實は雄辯に物語つてゐるが、重ねて其の理由を列擧すれば

- 一、漁場中心地であつて出漁往復時間を短縮し燃料其他の諸經費を節約し得ること。
- 一、従つて漁獲物の汚れ少なく魚價にも有利なること。
- 一、鯉漁の如きに必須な餌料豐富なること。
- 一、天然氷は無盡藏に供給が出來ること。
- 一、冷蔵船の廻航頻繁であること。
- 一、冷凍冷蔵倉庫の設備あること。
- 一、鐵道輸送の便もあり、トラツクの設備も完全してゐる。
- 一、重油供給設備も完全してゐること。
- 一、必需品の供給圓滑低廉なること。
- 一、漁業者を主體とする漁業組合經營魚市場完全せること。
- 一、地方民の民風純朴且つ慰安設備完備せること。
- 一、水難救難所あつて救助に遺憾なきこと。
- 一、縣指導船の設置あること。
- 一、宮古測候所のあること。



一、暴風其他の避難港として申分なきこと。  
殊に近來町民競ふて廻來船の來港を歓迎し地元船と相携へて協力共榮のモットーとして、海田の開拓に任じてゐるから雲山萬里の廻來船も宮古にあつて何等の旅愁を覺ゆる事なく精一杯の活動が出来るのである。

昭和九年十一月二日印刷  
昭和九年十一月六日發行 (定價金八拾錢)

岩手縣下閉伊郡山口村大字山口  
第一地割字和見卅一番ノ一

發行所 宮古日日新聞社

複製又ハ轉載ヲ禁ズ

岩手縣下閉伊郡宮古町宮古  
第拾參地割字下町十三番地ノ一

編輯兼 松田徳太郎  
發行人

宮城縣仙臺市教樂院丁六番地  
印刷所 東北印刷株式會社

岩手縣山田港



尾半本店自動車部

電話 二二番・二二番・二二二番

宮古扱店 山善商店

電話 一五番

大槌扱店 尾半支店

電話 一六番

定期貸切乗合營業  
宮古—山田—大槌



宮古・山田・大槌・釜石間乗合  
 遞信局指定郵便物遞送

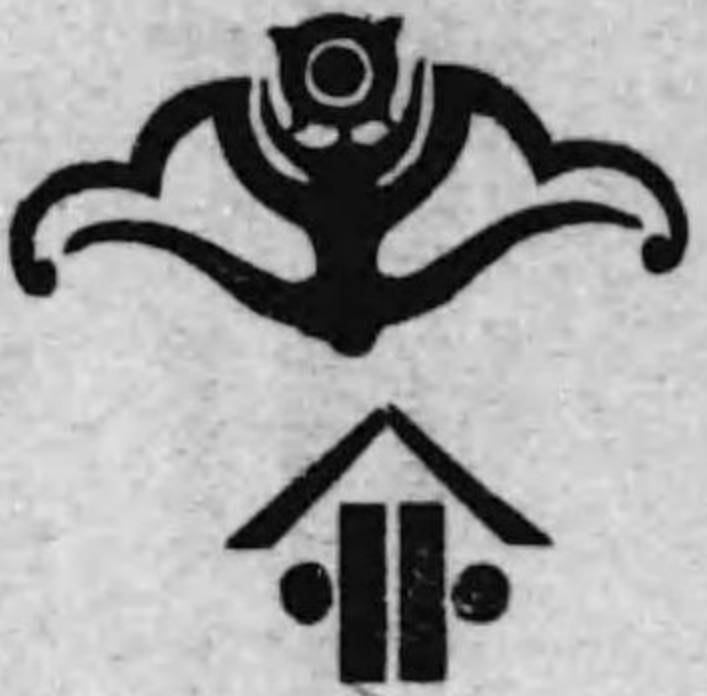


# 山田自動車合會社

電話

釜石 三十九番  
 大槌 三十六番  
 山田 三十九番  
 宮古 四十七番  
 銚子 七十一番

國產



株式會社

# 龜井商店

電話 五九番・二〇四番 (交換臺)  
 二五九番・四〇二番

宮城縣鹽釜港

日本石油株式會社代理店

石油部・米穀部  
 魚油 魚粕部  
 製繩部・飲料水部

魚市場出張所	電話二五九番	女川油槽所	電話四三番
築港八號倉庫	電話二四二番	氣仙沼油槽所	電話三六九番
西埠頭倉庫	電話七四番	釜石油槽所	電話二六五番
北濱油槽所	電話四〇二番	宮古油槽所	電話一三四番
代々崎油槽所	電話專用番	八戶市湊油槽所	電話二三六番
石巻油槽所	電話六九〇番	八戶市鮫出張所	電話四〇番



岩手縣宮古港楸ヶ崎上町

# 下岩田德藏商店

電話 一四五番  
振替(東京)二二八〇三番



日本ビクター蓄音器株式會社  
日本コロンビア蓄音器株式會社  
日本ポロドル蓄音器株式會社

特約店

## 岩德蓄音器部

商號



## 三陸汽船株式會社

會社設立

明治四十一年五月七日

營業所 三陸汽船株式會社鹽釜營業所

東京航路

(就航船)

射水丸 九八六噸  
永隆丸 七五八噸

寄港地

東京、鹽釜、氣仙沼、高田、大船渡、釜石、大槌、山田、宮古

函館航路

寄港地

(就航船)

直隆丸 四七八噸

鹽釜航路

寄港地

(就航船)

新東北丸 參〇五噸

三陸丸

壹九九噸 二號三陸丸 壹九壹噸

朝日丸

壹四六噸 白金丸 壹貳四噸

東華丸

六四噸 彌生丸 參八噸

卯月丸

參八噸

寄港地

(三陸沿岸) 鹽釜、鮎川、女川、氣仙沼、高田、大船渡、小白濱、釜石、大槌、山田、宮古



物療 温熱治療

本療法 骨子

本療法ハ進歩發達セル醫學上ノ温熱療ニシテ、吾人ノ努力研鑽ニ依ツテ完成サレタ獨特ノ治療法デアアル。即チ神經中樞部位及ビ患部ニ温熱的刺戟ヲ與ヘテ神經機能ノ異狀血行機能ノ異狀ホルモンノ變調ナドヲ生理的ニ整調サセ其ノ結果人體細胞組織ノ新生新陳代謝機能ノ亢進、自衛機能ノ亢進、自然ノ療能作用ナドガ振興シテ完全治癒ヲ營爲スルニ至ルモノデアアル。因ニ本療法ハ生理學上カラ云ヘバ生命神經中樞刺戟療法ト云フ。醫者藥物萬能ノ時代藥一服用マズ病氣ガ治ルト云フ事ハ奇蹟デモ氣休メデモ無イ自治組織ニ成ツテ居ル人體當然ノ生理的現象デアアル。

適應症・脚氣・關節炎・婦人血脚氣

高湯温泉湯の花

特約販賣店

東京物療大學院會員

治療主 井内平三郎

(宮古町)



於 第一回全國名産菓子展覽會名譽優良賞  
第三回國産製菓品評會一等賞金牌受領  
其ノ他賞牌十數個受領

宮古名物 いか煎餅

郷土味豊かな……

おみやげ菓子!!!

宮古港本町

宮古 三色モナカ  
名菓 宮古羊羹 本舗  
四季之漬

菅田菓子店

電話 二六六番



山田線宮古驛前

# 宮古合同株式會社

電話

二二八番(發送部)  
四一〇番(到著部)  
四一一番(魚市場)

宮古驛前	社 長	篠田	小笠原	孝三
	支 配 人	田畑	田治	一三
	取 締 役	織田	岸田	勘兵衛
	取 締 役	高田	澤田	
	取 締 役	村田	金澤	
	監 査 役	善一 郎		

# 宮古運輸株式會社

電話(特長) 二四四一〇番



終

